岩 波 文 庫

32-066-2

インド古典説話集

カター・サリット・サーガラ

(二)

岩 本　裕 訳



岩 波 書 店

目次

『ブリハット・カター』因縁譚

一

あるとき、シヴァ神を愛妃パールヴァティーが讃嘆の言葉を述べて悦ばせました。月輪を頭飾りとせられる神は愛妃の讃嘆の言葉を悦び、彼女を膝に抱き上げて、

「そなたを悦ばせるために何をしようか。」

と語りました。すると、パールヴァティーは

「あなたがわたしを愛しくおぼしめされるのでしたら、妾の未だ知らない面白いお話を何か聴かせて下さい。」

と言いました。すると、シヴァは

「愛しい妃よ、そなたの知らぬことが、過去・現在・未来を通じて、この世にあるだろうか。」

と答えました。シヴァの愛妃であるパールヴァティーは夫の愛情を内心ひそかに自惚れていましたので、シヴァにうるさくせがみました。シヴァが彼女を宥めるために素晴らしい物語を聴かせようと約束しましたので、彼女の心は収まりました。そして、

「誰もここに這入って来てはいけない。」

と命じましたので、従者のナンディンが戸口に見張りに立ち、シヴァは物語をはじめました。

「神々はこの上ない幸福を享けており、人間は常に悲惨である。これに反し、神人の所行は殊の外に興味深い。そのゆえ、ヴィディヤーダラ*たちの行状をそなたに聴かせよう。」

と、シヴァが女神に話していますと、シヴァの寵臣で、ガナ（シヴァ神の従者の一群）の中で最も勝れたプシュパダンタが伺候しましたが、戸口に立っているナンディンに入室を遮ぎられました。プシュパダンタは

「理由もなしに何故に入室を遮ぎられたのだろうか。」

と、好奇心をおこして、呪術によって姿を隠して、直ちに這入りこみました。彼はシヴァとパールヴァティーのいるところに忍びこみ、シヴァがパールヴァティーに未だ聴いたことのない七人のヴィディヤーダラの不思議な行状を物語っているのを聴きました。この物語を聴きましたプシュパダンタは、家に帰って妻のジャーヤーに話しました。まこと財宝と秘密とを妻に匿すことが誰に出来ましょう。ジャーヤーは奇異の念にかられて、パールヴァティーの前に罷り出て、その話を喋りました。女が口を慎しむことがどうしてありえましょう。そこで、パールヴァティーは怒って、夫に

「あなたはわたしに未だ聴いたことのない話を話して下さったのではありません。ジャーヤーでさえ、その話を知っています。」

と言いました。ウマー（パールヴァティーの別名）の夫は瞑想によって真実を知り、

「プシュパダンタが呪術を用いてここに忍びこみ、その話を聴いたのだ。彼がそれをジャーヤーに話したのであって、他に誰がそれを知っていよう。」

と語りました。この言葉を聴きますと、女神は非常に怒り、プシュパダンタを召喚し、彼女の前で慄えおののく彼を呪詛して

「お前のような不従順な召使は人間になるがよい。」

と宣言しました。また、プシュパダンタのために懇願しましたガナのマーリヤヴァットをも呪詛しました。二人はジャーヤーと一緒に女神の足許に平伏して、呪詛の終る時を宣示されるよう懇願しましたので、女神はゆっくりとした口調で語りました。

「スプラティーカというヤクシャ（夜叉、クベーラ神の従者）がクベーラ神*の呪詛によってピシャーチャ（鬼霊の一種）とされ、カーナブーティと名乗ってヴィンディヤ山の森林に住んでいる。この男に会って、そなたは自己の素姓を思い出し、この話を話すがよい。プシュパダンタよ、そのとき、そなたは呪詛から解放されるであろう。マーリヤヴァットがこの話をカーナブーティから聴くときカーナブーティは呪詛から免れ、その話をマーリヤヴァットが世間に弘めたときマーリヤヴァットも呪詛から解放されるであろう。」

と、パールヴァティが言い終るや否や、その途端に二人のガナは稲妻の閃光のように姿が見えなくなりました。

さて、時経て、憐愍の心をおこしましたガウリー（パールヴァティーの別名）は、シヴァ神に

「妾が呪詛した二人のガナは地上の何処に生れていましょうか。」

と訊ねました。月輪を冠に頂く神（シヴァ神の異称）は

「カウシャームビー*という都城があるが、プシュパダンタはその地にヴァラルチ*という名で生れている。また、マーリヤヴァットもスプラティシュタ*という勝れた都城にグナーディヤ*という名で生れている。女神よ、これが彼等二人の身の上である。」

と語りました。シヴァ神はこのようにパールヴァティーに報せましたが、常に従順でありました従者の追放されたことを再び思い出して悲しみながら、カイラーサ山*の斜面に建てられたカルパ樹*造りの悦楽殿にて、愛妃を楽しませながら日を送りました。

さて、プシュパダンタは人間の姿となって諸方を遍歴し、ヴァラルチ或はカーティヤーヤナ*という名で著名でした。彼は諸々の学芸に通暁し、またナンダ王*の宰相にもなりましたが、それに堪えられなくなり、ヴィンディヤ山に住む女神（シヴァ神妃パールヴァティーの異称）を詣でに出かけました。女神は彼の苦行に満足せられ、カーナブーティに会いにヴィンディヤ山の森林に行くようにと、夢の中で彼に指示されました。そして、彼がヴィンディヤ山中で、虎や猿が棲息し、水なく、蔓草の絡みあった深林をさまようていましたとき、一本の高い榕樹を見ました。その傍には、ピシャーチャのカーナブーティがサーラ樹*のような姿をして、幾百というピシャーチャの群に取巻かれて、坐っていました。カーナブーティは彼の姿を認めますと、恭しく彼の足に触れました。ヴァラルチは直ちに座について、カーナブーティに

「御身は常時戒行を遵奉する殊勝な人である。如何なる故を以て、御身はかくのごとき境遇となったのであるか。」

と言いました。この言葉を聴きますと、カーナブーティは彼に親愛の情を示したヴァラルチに語りました。

「わたくし自身は何も存じません。しかし、嘗てウッジャイニー*の焼屍場で、シヴァ神がわたくしに宣わせられたことがあります。それをあなたにお話し申しあげましょう。

あるとき、パールヴァティーがシヴァ神に

「あなたは何故に髑髏や焼屍場を悦ばれるのですか。」と訊ねましたとき、神は次のように答えられました。

「嘗て、カルパ（世界の継続する期間）の終りに際して、万物が壊滅したとき、宇宙は水となった。そのとき、余は太腿を切って一滴の血を滴らせた。それは水中に落下して卵となり、それが二つに割れて、プルシャ*（原人）が生れたが、余は天地創造のために、これよりプラクリティ（万物創造の原動力）を創造した。而して、この二つがプラジャーパティ（創造主）や他の生物などを造った。かのプルシャがこの世に於いて祖父と呼ばれるのは、その故である。かくのごとくに、生物・無生物の一切が創造せられると、プルシャは不遜となったので、余は彼の頭を刎ねたのである。その後、余は自らの所行を後悔して、極めて困難な祈誓を行じ、かくて余は髑髏を冠り、焼屍場を好むに至った。しかも、髑髏に似たこの宇宙はわが手の中に置かれている。嚮に述べた卵の、髑髏のごとき、二つの半片は天と地と呼ばれているからである。」

と、シヴァ神が語られましたとき、わたくしは好奇心に溢れてなお聴きたいと思って立っていま

すと、パールヴァティーが夫に

「あのプシュパダンタは何時われわれの許に帰って来ますか。」

と訊ねました。この言葉を聴きますと、マヘーシュヴァラ（大自在天、シヴァの称号）はわたくしを指ざされまして、女神に語られました。

「あそこに居るピシャーチャは、嘗てヴァイシュラヴァナ（財宝の神クベーラの別名）の従者であるヤクシャであったが、ストゥーラシラスという羅刹の友人を持っていた。財宝の神は彼が悪漢と交際しているのを見て、彼をピシャーチャに貶して、ヴィンディヤ山の森林に追放した。彼の兄ディールガ・ジャンガは財宝の神の足許に平伏して、呪詛の終る時期を宣示されるよう懇請したので、財宝の神は『呪詛のために人間界に生れたプシュパダンタから偉大な物語を聴き、それを呪詛のために人間となっているマーリヤヴァットに語るとき、彼は二人のガナとともに呪詛から解放されるであろう。』と、語った。財宝の神はそのときこのように呪詛の終末を定めたのである。そして、プシュパダンタのために、そなたが定めたのも、その通りであった。そのことを思い出しなさい。」

と、シヴァ神が仰せられるのを聴きまして、わたくしは非常に嬉しくなり、ここに参りました。このように、呪詛によるわたくしの災難は、プシュパダンタが来るならば、終るのです。」

と、カーナブーティが物語りますと、その瞬間にヴァラルチは自分の素姓を思い出し、夢から覚

めたように語りました。

「わたしがそのプシュパダンタです。わたしから、その物語を聴いて下さい。」

と言いまして、七十万頌の七つの偉大な物語を語りました。すると、カーナブーティは

「あなたはシヴァ神の権化です。他の如何なる人が、このような物語を知っていましょうか。あなたの恩寵によって、あの呪詛はわたしの身体から去りました。威力ある方よ、あなたの誕生以来の御自身の身の上をお聴かせ下さい。わたしのごとき者に隠すべきことがありませぬならば、すべてをお話しくださって、何卒わたしの罪をお潔め下さい。」

と申しました。そこで、ヴァラルチは彼の前に平伏しているカーナブーティの希望を遂げさせるために、自身の誕生以来の経歴をのこらず語りました。

（ヴァラルチの経歴）

カウシャームビーにソーマ・ダッタという婆羅門がいました。また、別名をアグニシカとも言いました。彼の妻はヴァス・ダッターという名でした。ヴァス・ダッターは聖仙の娘でしたが、彼女がこの世に生を享けたのは、呪詛によってこの世に権化したのでした。わたしが彼女の胎内に宿って、この勝れた婆羅門の子として生れたのも、呪詛のためです。わたしが未だ幼い子供であったとき、父は死にましたが、母は激しい仕事をして、わたしを育てました。ある日、二人の婆羅門が長途の旅行に埃にまみれて、わたしたちの家に一夜の宿をもとめに来ました。この人た

ちがわたしの家に泊っていますと、太鼓の音が聞えてきました。母はこの音を聞きますと、亡き父のことを思い出し、泣きながらわたしに申しました。

「坊よ、お前のお父さんの友人のナンダが踊っているのですよ。」

「お母さん、わたしが行って見てきましょう。そして、台詞を覚えてきて、それをみんなお母さんに真似してお見せしましょう。」

と、わたしは答えました。わたしの言葉を聞きまして、この二人の婆羅門は驚いてしまいました。わたしの母は、二人に

「もし、お二人の方、この子の申しますことは嘘ではありません。この子は一度聴いたことを本当に諳んじています。」

と言いました。そこで、二人の婆羅門はわたしを験すために、わたしにプラティシャーキヤ*を読誦しましたので、わたしは彼等の見ている前で、一字一句もたがえずにすべてを繰返しました。それから、わたしはこの二人の婆羅門と一緒に踊りを見に行き、帰って来ますと、母の前でわたしは見た通りにすべてを真似して見せました。彼等の一人のヴヤーディは、わたしが一度聴いたことを諳んじていることを確かめて、わたしの母に恭しく礼をして、こういう物語をしました。

「ヴェータサという都城*に、デーヴァ・スヴァーミンとカラムバカという兄弟の婆羅門がいまして、お互いに睦みいつくしみ合っていました。このインドラダッタはその一人の息子で、わたくしは他の一人の息子で、ヴヤーディと申します。わたくしの父が死にますと、インドラダッタの

父は悲しみのあまり還らぬ旅路に行きましたので、わたくしたちの母たちの心臓も悲しみのために破裂してしまいました。わたくしたちは財産を持っていましたが、孤児になりましたので学問を修めようと思い、苦行によってカールッティケーヤ神*に懇願するために旅に出ました。わたくしたちが苦行を行じていますと、夢の中でこの神のお告げがありました。『ナンダ王の都城であるパータリプトラ*という都がある。そこにヴァルシャという婆羅門がいるゆえに、この人からすべての学問を学ぶがよい。されば、そなたたちはその地に行け。』と、仰せられましたので、わたくしたち二人はその都城に行き、尋ねまわりますと、人々は『この都にヴァルシャという婆羅門の馬鹿者がいる。』と、言いました。わたしたちは不審に思いながらも直ぐに行き、ヴァルシャのみすぼらしい家を見つけました。その家は鼠のために蟻塚のようにせられ、壁は崩れ落ち、取りちらかされ、庇はなく、まことに貧乏の神の誕生の場処さながらでした。そこで瞑想にふけっていましたヴァルシャを見まして、われわれが彼の妻に近づきますと、彼女はわたくしたちを賓客として招じ入れてくれました。彼女の身体は痩せこけ、垢によごれてくろずみ、着物はよれよれで汚く、その婆羅門の徳を慕ってやって来ました貧乏の神の権化のようでありました。わたくしたちは彼女に恭しくお辞儀をしまして、自分たちの身の上と彼女の夫が馬鹿であると巷で聞いた噂とを話しました。すると、彼女は『子供たちよ、わたしは少しも羞ずかしくない。本当のことを話してあげるから、聴きなさい。』と申しまして、この貞淑な婦人は次のような物語を語りました。」

「この都城に、シャンカラ・スヴァーミンという勝れた婆羅門がいまして、二人の息子がありました。一人はわたしの夫ヴァルシャで、もう一人がウパヴァルシャです。わたしの夫は愚か者で貧乏でしたが、弟のウパヴァルシャは反対でしたので、この人は自分の妻に兄の家事をみさせていました。

　さて、ある年、雨期が来ました。雨期になりますと、女たちは粉に糖蜜を混じて陰茎の形をした嫌らしい形の団子をつくり、愚かな婆羅門に与えます。このようにしますと、この団子は寒季に於いては水浴の後の苦痛を除き、また暑季には水浴の後の疲労を癒すと言われています。しかし、この風習は陋習でありますので、婆羅門はこの団子を差出されましても、受取らないのです。弟の嫁はわたしの夫にそれを布施と一緒に与えますと、夫はそれを受取って家に帰って来ましたので、わたしは夫を激しく叱責しました。それ以来、夫は心中で自分の愚かなことを深く思い悩むようになりました。そういう訳で、夫はカールッティケーヤ神の足の裏を礼拝しに出かけました。夫の苦行に満悦せられたかの神は、夫にすべての学問を授けられました。そして、『一度聴いただけで、それを記憶することの出来る婆羅門を見出したとき、汝はそれらの学問を顕示するを得よう』というお告げを得まして、わたしの夫は大喜びで家に帰って来ました。帰って来ますと、わたしに一部始終を物語りましたが、そのとき以来夫は絶えず祈頌を誦しを瞑想しつづけています。ですから、一度聴いただけで記憶している人を見出して、連れて来なさい。そうすれば、そ

なたたちの願いは疑いなくすべて成就するでしょう。」

「ヴァルシャの妻からこの言葉を聴きますと、わたくしどもは彼女の貧乏を救うために黄金百片を贈って、その都城を出発しました。その後、世界を遍歴しましたが、一度聴いただけで記憶する人を誰も見つけることが出来ず、疲れ果てて今日あなたの家に着いたのです。そして、ただ一度聴いただけで記憶することの出来るこの少年、あなたの息子さんに出会うたのです。ですから、この子をわたくしたちに下さいませんか。わたくしたちは学問の精髄を得るために、パータリプトラに行きます。」

と言うヴヤーディの言葉を聴きますと、わたしの母は慇懃に申しました。

「あなたの仰言ることは、すべて完全に符合します。妾はあなたの言葉を信用します。と申しますのは、嘗て妾のこのひとり息子が生れましたとき、天上からはっきりと聖霊の声が聞えてきました。『一度聴いたのみで記憶することのできる子が生れた。この子はヴァルシャから学問を授かるであろう。そして、文法学をこの世に宣揚するであろう。この子は如何なることであれ、勝れたるもの（ヴァラ）を喜ぶ（ルチ）がゆえに、ヴァラルチと呼ばれるであろう。』と、仰せられて、その声は止みました。それ以来、この子が成長するに従って、わたしは夜となく昼となく『ヴァルシャという学匠は何処に居られるのであろうか。』と、考えていました。今日、あなたのお口からその名を伺って、こんなに嬉いことはありません。ですから、この子を連れて行って下

さいませ。この子はあなた方の兄弟ですから、何の妨げがありましょうや。」

と、わたしの母が申しますのを聴きまして、ヴヤーディとインドラダッタの二人は非常に喜び、その夜を僅か一瞬間と思うほどでありました。そして、ヴヤーディはわたしの就師式を祝うて、わたしの母に自分の財産を贈り、またわたしの希望を適えて、わたしをヴェーダ*の読誦に相応わしい者たらしめるために、わたしに聖索*をかけてくれました。こうして、彼等はわたしの母の同意を得まして、別離の悲しみを堪え忍んでいるわたしを連れて出発しましたが、わたしの母は涙をおさえることが出来ませんでした。ヴヤーディとインドラダッタの二人はカールッティケーヤ神の恩寵の花が咲いたと考え、急いでカウシャームビーの都を離れました。そして、漸くにして、わたくしたちはパータリプトラのヴァルシャ先生の家に到着しました。先生もまたカールッティケーヤ神の恩寵がわたしに化身して来たのだと思いました。その翌日、先生はわれわれを前に坐らせ、自分は清浄な座について、神々しい声で「オーム」という音声を読誦されました。すると、忽ちに、先生の心の中に諸々のヴェーダがアンガ*とともに浮び上って来ましたので、先生はそのすべてをわたしたちに教えられました。先生の言われることを、わたしは一度で記憶し、ヴヤーディは二度で記憶し、インドラダッタは三度で記憶しました。

こうして、未だ聞いたことのない神々しい音声を聞いて、婆羅門たちは何事かと心に訝りあやしみながら諸方から集まって来ました。そして、讃嘆の声を挙げ、顔を輝かせて、ヴァルシャを恭しく礼拝しました。また、この不可思議な奇蹟を眼のあたりに見まして、弟のウパヴァルシャ

は勿論のこと、パータリプトラの市民はすべて盛大な大祭典を行いました。また、勢威ならぶ者のないナンダ王も、シヴァ神の子（カールッティケーヤ神）の恩寵の威力を親しく見られて、大いに満悦せられ、ヴァルシャの家を忽ちに財宝で満たし、尊崇の心を示したのでした。

二

このようにヴァーディとインドラダッタと一緒にヴァルシャ先生の許に滞在していました間に、わたしは次第に一切の学問の蘊奥を会得し、少年期を終えました。あるとき、インドラ神の祭典を見物に出かけましたとき、わたしたちはカーマ（恋の神）の箭と言うよりも寧ろ兇器とも言うべき一人の娘に会いました。彼女は誰なのかとインドラダッタに訊ねますと

「あの娘はウパヴァルシャの娘で、ウパコーシャーと言うのだ。」

と答えました。その娘も友だちからわたしのことを聞き知って、愛情のこもった眼ざしでわたしの心を惹きつけたまま、しぶしぶと自分の家に帰って行きました。彼女の顔は満月のごとく、青蓮に似た眼、蓮華の茎に似てしなやかな腕、脹らんだ胸は輝くばかりでした。彼女の頸には貝殻に見られるような三条の印があり、唇は珊瑚に似て輝いていました。彼女はカーマ大王の美の殿堂で、いわば第二のラクシュミー（幸運と美の女神）でありました。こうして、わたしの心は恋の矢の一撃に貫かれ、彼女のビムバ*果に似た唇に接吻したい慾望のために、その夜は一睡もすることが出来

ませんでした。夜の明けがた少しまどろんだとき、わたしは夢の中で白衣を着た天女を見ましたが、そのとき天女は

「ウパコーシャーはそなたの前生に於ける妻である。そなたの徳を知る彼女は、そなた以外の男を夫に望まない。さればわが子よ、そのことについて思いわずらってはいけない。わたしは常にそなたの肉体に宿るサラスヴァティー（雄弁と学問の女神）である。わたしはそなたの苦しみを見るにしのびない。」

と、わたしに仰せられると、姿が消えました。そこで、わたしは起き上り、勇気をふるうて恋人の家の傍にあるマンゴーの若樹の下にそっと行って立っていました。すると、ウパコーシャーの親友がやって来まして、彼女がわたしに恋して、熱烈に愛慕していることを告げてくれました。その言葉を聴きまして、わたしの心配は二重になり

「彼女の両親が快く彼女をわたしにくれないとき、わたしはどうすれば彼女を得ることが出来ようか。まこと、死は不名誉に勝るものです。従って、彼女の心が彼女の両親に知られさえすれば、万事好都合に運ぶでしょう。ですから、あなたは親友とわたしの命を救うて下さい。」

と言いました。この言葉を聴きますと、ウパコーシャーの親友であるこの娘は、ウパコーシャーの母の許に行って一切を話しました。ウパコーシャーの母は直ちにそのことを夫のウパヴァルシャに話し、ウパヴァルシャは兄のヴァルシャに話し、ヴァルシャは同意しました。わたしとウパコーシャーとの結婚がきまりますと、ヴァーディはヴァルシャ先生の命によって、カウシャーム

ビーからわたしの母を連れて来ました。こうして、ウパコーシャーは正法に遵って彼女の父からわたしに与えられ、わたしは母と妻とともに幸福にパータリプトラで暮しました。

さて、時経て、ヴァルシャは非常に多くの弟子を得ました。その中にパーニニ*という、かなり愚かな男がいました。この男は師家への奉仕に疲れ果てて嫌気がさし、仕事を怠りましたので、ヴァルシャの妻に追い払われましたが、学問を渇望して苦行のためにヒマーラヤ山に行きました。そこで厳しい苦行をしましたので、それに満悦せられたシヴァ神は、この男に一切の学問の淵源である新らしい文法学を授けられました。そこで、パーニニは帰って来て、わたしに論争を挑みました。そして、われわれの論争は七日間を経過しました。そして、第八日に、わたしは彼を論破したのでしたが、その瞬間にシヴァ神の大音声が空から聞えて来ました。そのために、われわれのアインドラ派の文法*はこの地上から消滅してしまいました。そして、わたしたちはみなパーニニに論破せられて、再び愚か者となってしまいました。こうして、失望落胆しましたわたしは、わが家の生計のために自分の財産を商人ヒラニヤグプタに委託して、またそのことを妻のウパコーシャーに告げて、シヴァ神を苦行によって宥慰してその恩寵を受けるために、断食してヒマーラヤ山に行きました。

ウパコーシャーはわたしの成功を念願して自宅に留まり、毎日ガンジス河でみそぎを行い、常に厳格に操を守っていました。彼女は痩せて少し青ざめていましたが、新月のように人々の眼を惹きつけました。春になった或る日のこと、ウパコーシャーがみそぎのためにガンジス河に行き

ますと、王の司祭官、司法長官、太子傅育官たちが彼女を見て、忽ちに彼等は恋の神の矢の標的となってしまいました。しかも、たまたま、その日彼女はいつもより永く水浴をしました。夕方になって、彼女が家に帰ろうとしますと、太子傅育官が彼女に無理に抱きつきました。しかし、彼女は落着いて彼に申しました。

「あなたさまもそうでございましょうが、わたしもこのことは好きでございます。でも、わたしは良家の生れですし、それに夫が他出中でございます。ですから、どうしてそのようなことをここですることが出来ましょう。誰かが見ているかも知れません。もし誰かに見つかれば、わたしだけでなく、あなたさまのお名前も汚れましょう。ですから、街の人々が春の祭に浮れている頃を見はからって、春祭の日の夜の初更*にわたしの家までお出で下さいませ。」

と、約束しましたので、太子傅育官はウパコーシャーを離しました。しかし、運命の力は如何ともなしがたく、彼女が少し歩きますと、司祭官が彼女の行手を遮ぎりました。彼女はこの人にも同じ約束をして、春祭の日の夜の第二更に来るようにと言いましたので、漸くのことで彼女を離しました。すると、間もなく、またしても第三番目の司法長官が慄えるウパコーシャーを呼びとめました。そこで、彼女はこの人にも前と同様に、その夜の第三更に来るようにと約束をしました。そして、幸いにもこの男から逃れることの出来たウパコーシャーは慄えながら家に帰り、召使の女に自分のした約束のことを自分から話しました。彼女は

「良家の女にとっては、夫の留守中に美貌の女の尻を追う人々の淫らな眼に会うよりは、死ぬ

方がましだ。」

と思いあぐみ、夫のわたしのことを思うたり、自分の美しい容姿を悲しんだりして、食事も摂らずにその夜を過しました。その翌朝、婆羅門を饗応するために必要な金子を渡して貰うために、召使の女を商人ヒラニヤグプタの許へ遣りました。すると、この男もウパコーシャーの家にやって来て、ひそかに

「わたしと楽しみましょう。そうすれば、あなたの旦那がのこして行ったものをあなたに上げましょう。」

と言いました。この言葉を聴きますと、ウパコーシャーは夫ののこして行った財産に証人のないことを考え、またその商人が悪人であることを察して、悲しみにうちひしがれましたが、夫に貞淑な彼女はこの商人にも春祭の夜の最後の時刻に来るようにと約束しましたので、商人は帰って行きました。

そこで、ウパコーシャーは召使の女と一緒に油煙を油で煉り、麝香などの香料で香気をつけて壺の中に蓄えておき、四枚の布片にそれを塗りつけ、また外側に閂のついた大きな箱を用意しました。さて、春祭の夜が来ますと、太子傅育官が華美な服装をして初更にやって来ました。人に見られることなく這入って来ましたこの男に、ウパコーシャーは

「あなたが沐浴をなさらないうちは、わたしはあなたに触れることは出来ません。ですから、中に這入って、沐浴をして下さい。」

と、申しました。馬鹿者はそれを承諾しまして、下女たちに案内されて家の奥にある秘密の暗い部屋に這入りました。下女たちはこの男の下着を脱がせ、宝石を預って、下着がわりに一枚の布を渡しました。そして、この悪者の頭から足の尖端まで油で煉った油煙を、彼が気づかないように、あたかも香油を塗るように塗りつけました。下女たちがこの男の全身に油煙を塗りこんでいますうちに第二更がきて、かの司祭官がやって来ました。そこで、下女たちは太子傅育官に

「ここの御主人ヴァラルチさまのお友だちの司祭官さまが来られましたのです。ですから、この中に這入っていて下さい。」

と言いまして、全身に油煙を塗った裸の太子傅育官を急いで箱の中に這入らせ、その外側に閂をかけて蓋が開かぬようにしました。司祭官も沐浴を口実に暗い部屋に案内せられ、衣服などを脱がされ、一枚の布片だけを身につけて、下女たちに騙されて油で煉った油煙を塗られました。そのうちに第三更になりますと、司法長官がやって来ました。下女たちは直ちにその旨を話して司祭官を嚇し、前の男と同様にこの男もまた箱の中に這入らされました。下女たちは箱の蓋を閂で開かぬようにし、司法長官をまた沐浴を口実にして仲間と同様にだまし、一片の布だけを身につけさせて、油で煉った油煙を塗りつけました。そのうちにその夜の最後の時刻になりますと、かの商人がそこへやって来ました。下女たちは見つけられるかも知れないと司法長官を嚇して、同じように箱の中に這入らせて、外側に栓をしました。太子傅育官と司祭官と司法長官の三人は、暗黒の地獄に住むのに慣れているかのように、箱の中で互いに身体が触れ合いましたけれども、

恐怖のために一言も言葉を出しませんでした。

そこで、ウパコーシャーは部屋に燈火をともし、商人を這入らせて、

「妾の夫があなたに委ねて行った財産を渡して下さい。」

と、言いました。この言葉を聴きますと、この悪漢は部屋の中に誰もいないと見て、

「あんたの旦那がのこして行った財産を返して上げると言いましたよ。」

と申しました。ウパコーシャーは箱の中にいる人々に聞えるように

「神さまがた、ヒラニヤグプタのこの言葉をお聴き下さい。」

と言いました。このように言いますと、彼女は燈火を吹き消しましたので、下女たちは沐浴を口実にしてこの商人に油煙を長い間塗りました。そして、夜明けになりますと、

「もう夜が明けたから、帰ってくれ。」

と、この男の襟頸を摑んで強引に戸外に放り出しました。彼は一枚の布をまとうただけで、しかも全身に油煙を塗られて、一歩ごとに犬に喰いつかれながら、羞ずかしい思いで自分の家に帰りました。自分の家で召使に油煙を洗い落して貰っている間も、彼は召使の顔さえ見ることが出来ませんでした。悪業の道はまことに困難なかぎりです。

さて、その翌朝、ウパコーシャーは召使たちを連れて、両親にも告げずにナンダ王の宮殿に赴き、

「商人ヒラニヤグプタがわたしの夫の委託して行った財産を横領しようとしています。」

と、自ら王に訴えました。王はその訴えを取調べるためにヒラニヤグプタを召喚しましたが、この商人は

「陛下、この婦人のものは何一つとしてわたくしの手に委託はされて居りませぬ。」

と申し立てました。そこで、ウパコーシャーは

「陛下、わたくしには証人があります。わたくしの夫は家の守護神を箱の中に安置して、出かけました。これらの神々の前で、この商人は自分の舌でその財産のことを白状しました。その箱をここへ持って来させて、神々にお尋ね下さい。」

と申しました。王はその言葉を聴いて訝しく思い、早速その箱を持って来るように命令せられました。すると、忽ちに、その箱は多くの人に担がれて法廷に運びこまれました。そこで、ウパコーシャーは

「神さまがた、真実を語って下さい。あの商人の言ったことをお話し下さって、ご自分の家にお帰り下さい。もし真実を語られないならば、妾はあなたがたを焼き捨てるか、法廷でこの箱の蓋を開きますよ。」

と申しました。箱の中にいる人々はこの言葉を聴きますと、恐怖に怖れおののき、

「本当です。あの男はわれわれの面前で委託された財産のことを白状しました。」

と言いましたので、商人は返答に窮してしまい、一切を白状しました。しかし、王は好奇心をおさえることが出来ず、ウパコーシャーに頼んで法廷で箱の閂をはずして蓋を開けさせました。す

ると、真黒な団子のような三人の男が曳き出されました。王と大臣たちは彼等が誰であるかを見分けるのに苦労したほどでした。全廷は爆笑しましたが、王が

「これはどうしたことだ。」

と、好奇心をおこして訊ねますと、貞節なウパコーシャーは一部始終を話しました。

「貞節を守っている良家の婦人の行状はまことに不羈である。」

と、全廷の人々はウパコーシャーを讃嘆したのでした。こうして、他人の妻に食指を動かした人人はのこらず封禄を王に召し上げられ、その土地から追放されました。悖徳によって如何なる者が繁栄するを得ましょうか。王はウパコーシャーに

「そなたは今後余の妹である。」

と仰せられて、彼女に数々の財宝を授けられました。彼女は王の聴許を得て家に帰りました。ヴアルシャとウパヴァルシャとはこのことを聞いて貞節な彼女を賞讃しましたが、またすべての市民も顔に賞讃の微笑を浮べました。

さて、話かわって、わたしはヒマーラヤ山で劇しい苦行を行い、パールヴァティーの夫で恩寵の恵与者である神（シヴァ神）を宥慰しました。そこで、かの神はわたしにパーニニの論典を啓示せられましたので、わたしはかの神の希望によってそれを完成しました。わたしは月輪を頭飾りとせられる神（シヴァ神）の恩寵の甘露に満ち溢れて、旅の疲れを知らずに家に帰りました。そして、母と先生の足に礼拝し、ウパコーシャーの素晴らしい所業を聞きました。喜びと驚嘆とが、彼女に対

する愛情と尊敬の気持とともに、わたしの心の中に高潮しました。

さて、ヴァルシャはわたしの口から新らしい文法を聴きたいと希望しました。すると、カールッティケーヤ神が彼にそれを啓示せられました。そこで、ヴヤーディとインドラダッタとがヴァルシャ先生に薫陶の報酬を伺いますと、

「われに十万金を差出せ。」

と言われました。二人は先生の言葉に同意しまして、わたしにこう申しました。

「君、先生へのお礼の金をナンダ王に懇請するために、王のところに行こう。このような多額の黄金が得られるところは他にない。かの王は九千九百万金を所有している。そして、かの王は嘗て君の妻君のウパコーシャーを自分の妹であると言った。従って、君とかの王とは義兄弟である。君の徳によって、いくらかでも貰いたいものだ。」

と申しましたので、われわれ三人は決心してアヨーディヤー*のナンダ王の宮廷に出かけました。われわれが王宮に到着した途端に王が崩じ、哀悼の声が王国内におこりましたので、われわれは途方に暮れてしまいました。そのとき、呪術の達人であるインドラダッタは

「わたしがこの死んだ王の身体に這入ろう。ヴァラルチはナンダ王となったわたしに十万金を懇請してくれ。そうすれば、わたしがその黄金を与えよう。そして、ヴヤーディはわたしが帰って来るまで、抜殻となったわたしの身体を守っていて貰いたい。」

と言いますと、インドラダッタはナンダ王の肉体に這入りこみました。

王が蘇生しますと、国を挙げて祝賀の宴が催されました。ヴァーディが抜殻となったインドラダッタの身体を護って人影のない神殿にいました間に、わたしは王宮に赴きました。王宮に這入りますと、わたしは拝賀の言葉を述べ、師匠に対する報酬として十万金を贋ナンダ王に懇願しました。すると、王は真のナンダ王の大臣でシャカターラという者に、わたしに十万金を与えるように命じました。この大臣は死んだ王が甦がえり、また歎願者の願いが直ぐ聴き届けられたのを見まして、事の真相を覚りました。まこと、賢者に知られないことは何もないのです。この大臣は

「陛下、十万金を下げ渡すことに致しましょう。」

と言って、考えました。

「ナンダ王の王子は未だ幼少であり、しかもわが国には多くの敵がある。そこで、今の場合、当分の間は王の身体をこのまま護ることにしよう。」

と決心して、大臣シャカターラは直ちにすべての屍体を焼却させました。間者を用いて屍体を探させ、その中にインドラダッタの身体がありましたので、ヴァーディを神殿から追い出して、それを焼いてしまいました。

さて、その間、王は十万金をわたしに授けるようシャカターラに慫慂しつづけましたが、心中にひそかに疑念を持つ彼は、王に

「臣下の者たちはみな陛下御蘇生の祝賀のために忙殺されています。わたしが黄金を渡しますまで、あの婆羅門を暫く待たせて下さい。」

と申しました。そのとき、ヴァーディが贋ナンダ王のところに出頭して、

「何卒、お助け下さい。婆羅門に対する非行が行われました。未だ死ぬ年齢に達しませぬ婆羅門が、呪法を修して霊魂のみが他処に移っていましたのは、『これは無縁の屍だ』と申しまして、王さまの繁栄のために焼却されてしまいました。」

と訴えました。この言葉を聴きまして、贋ナンダ王は悲しみのために言うに言われぬ気持でした。肉体を焼かれたために、インドラダッタがナンダ王の肉体に宿ったまま最早逃げられなくなりましたので、思慮あるシャカターラは王の前から退って、わたしに十万金を渡しました。

さて、贋ナンダ王は自分の帰るべき肉体が無くなりましたのを悲しみ、ひそかにヴァーディに語りました。

「余は婆羅門であるに拘わらず、首陀羅（シュードラ）*となってしまった。余には現在確固たる王威があるけれども、それが余のために何の役に立つであろう。」

と、贋ナンダ王が言いますのを聴いて、ヴァーディは王を慰めて、時宜に適した忠言を与えました。

「シャカターラはあなたのことを知っています。ですから、今後あの男に注意を払うべきです。と申しますのは、あの男は大宰相ですから、間もなくあなたを自分で倒し、嚮のナンダ王の子のチャンドラグプタを王位に即けようとするでしょう。ですから、ヴァラルチを首相にして、彼の神のごとき俊敏な智慧によって、王権を泰山の安きに置かれるべきです。」

と語って、ヴァーディはヴァルシャ先生に報酬の金を届けるために出発しました。贋ナンダ王は直ちにわたしを召して大臣に任命しました。そこで、わたしは王に

「あなたは婆羅門たるの身分を離れて王位に即いたけれども、シャカターラが宰相の地位に留まるかぎり、あなたの王権が安泰であるとは考えられません。従って策略を用いてあの男を殺すべきです。」

と進言しました。贋ナンダ王はわたしの進言を聴きますと、シャカターラと彼の百人の息子に、婆羅門を生きたまま殺したという罪を被せて、彼等を暗黒な土牢に投じました。そして、シャカターラと彼の息子たちの食物として、毎日麦粥一椀と一杯の水とを土牢に入れたのでした。そこで、シャカターラは息子たちに

「この麦粥では一人でも生き永らえるのは困難である。多くの者がどうしてこれで生き永らえることが出来よう。従って、われわれの中で贋ナンダ王に復讐することの出来る者だけが、毎日この麦粥と水を食べることにしよう。」

と申しました。すると、息子たちは

「父上だけがかの王に復讐することが出来ます。ですから、それを食べて下さい。」

と答えました。まこと、志操堅固な人々にとって、敵に対する復讐は生命よりも大切なことであります。かくて、シャカターラだけが毎日麦粥と水とを摂って生き永らえました。嗚呼、勝利を念ずる人々はまことに残酷です。シャカターラは、暗黒な土牢の中で、息子たちが饑餓に苦しん

で溺死の苦悩に喘いでいるのを見て、

「自らの繁栄を冀う人は、権勢ある人々に対して、その性格を知らずに、またその信頼を得ないで、気儘に振舞うべきではない。」

と考えました。かくて、百人の息子は彼の面前で死んで行き、その骸骨に取巻かれて、彼ひとりが生き永らえていました。

こうして、贋ナンダ王は覇王として確固たる地歩を築きました。ヴァーディはヴァルシャ先生に礼金を贈ると帰って来て、王に近づき、

「友よ、君の王権の永く栄えんことを祈る。お暇乞いを申上げたい。わたしは苦行を行ずるために何処かに行こうと思う。」

と語りました。その言葉を聴きますと、贋ナンダ王は涙で声をつまらせながら、

「わが王国に留まって、安楽に暮してくれ。わたしを捨てて行かないで欲しい。」

と申しましたが、ヴァーディは

「王よ、人間の肉体は瞬時に滅ぶものです、このように空虚で浮動する快楽に惑溺する賢者がありましょうか。沙漠の蜃気楼にも似た幸福は、賢者の智慧を眩惑するものではありません。」

と言いますと、苦行を決心しました彼は直ちに出発しました。

かくて、贋ナンダ王は繁栄のためにわたしを伴ない、全軍を率いて、首都パータリプトラに帰還しました。わたしは宰相として重責を担いましたが、妻ウパコーシャーに侍ずかれ、母やヴァ

ルシャ先生たちと一緒に、その地に永く留まり、幸福な生活を送りました。わたしの苦行によって宥慰されたガンジス河はわたしに毎日多くの富を授け、サラスヴァティー女神は肉身を現じて、絶えずわたしに策を授けてくれました。

三

さて、時が経つにつれて、贋ナンダ王は愛慾などの虜となり、発情した象のように一切を顧慮しなくなりました。栄華が突然に近づいたとき、それに惑わされない人がありましょうか。そこで、わたしは考えました。

「王は昨今無軌道である。その上、あのことに心を奪われて、そのために自己の義務さえも怠りがちである。従って、かのシャカターラを土牢から出して、同僚とするのがよい。たといあの男が反抗するとしても、わたしが廟堂にあるかぎり、あの男に何が出来ようか。」

と決心しますと、王に懇願してシャカターラを真暗な土牢から出しました。まこと、婆羅門は心やさしいものです。賢明なシャカターラは

「ヴァラルチが宰相の地位にある間は、贋ナンダ王を倒すことは困難である。従って、当分の間、自分は水の流れに撓む蘆のように身を処して行こう。」

と思いめぐらして、わたしの希望に従って再び大臣の職につき、王事にたずさわりました。

あるとき、贋ナンダ王が都城を出て、城外に出かけました。そして、ガンジス河の真中に、五本の指を堅く握りしめた手を見ました。王は直ちにわたしを召して、

「あれは何か。」

と尋ねました。わたしが自分の二本の指をその方角に示しますと、その手は消え失せました。王は大いに驚いて、再びわたしにその訳をたずねましたので、わたしは答えました。

「あの手は五本の指を見せて『五人が心を合せれば、この世に成就しないことはない。』と、言おうとしたのです。そこで、陛下、わたしは二本の指を出して『二人でも心を一つにしさえすれば、不可能なことは何もない。』と、言うことを示したのです。」

と、わたしが謎を解きますと、王は非常に喜びましたが、シャカターラはわたしの智慧が測り知れないほどに深いことを知って、落胆しました。

ある日、贋ナンダ王は妃が宮殿の露台の端から身を乗り出して、下にいる賓客の婆羅門を見つめており、婆羅門もまた振り仰いで妃を見つめているのを見つけました。ただそれだけの理由で、王はその婆羅門に怒りを抱き、彼を殺すことを命じました。まこと、嫉妬は明智を妨げるものです。この婆羅門の首を刎ねるために刑場に連行する途中、市場にならべられていた一尾の魚が、死んでいたにも拘わらず、笑い*ました。王がそのことを聞きますと、直ちに婆羅門の処刑を中止させて、わたしに魚の笑った理由を尋ねました。わたしは

「熟慮してお返答いたします。」

と答えて退出し、サラスヴァティー女神を念じますと、女神は姿を現ぜられて、ひそかに

「夜間に、人知れず、棕櫚の樹の梢にいなさい。そうすれば、必ずやそなたは魚の笑った訳を聞くであろう。」

と言われました。この言葉を聴きまして、わたしは夜になるとそこに行き、棕櫚の樹上に隠れていました。すると、怖ろしいラークシャシー（女性の羅刹）が子供たちを連れてやって来ました。子供たちが食物をねだりますと、そのラークシャシーは

「お待ち。明朝、婆羅門の肉を食べさせてあげよう。その男は今日殺されなかったんだよ。」

と言いました。子供たちが

「何故、今日、殺されなかったの。」

と訊ねますと、ラークシャシーは再び

「その男を見ると、魚が死んでいたにも拘わらず笑ったからだよ。」

と言いました。子供たちが重ねて

「何故、魚は笑ったの。」

と訊ねますと、そのラークシャシーは

「王さまのお妃さまがたはみんなふしだらなんだよ。後宮の到るところに、女の姿をした男が忍びこんでいるのにさ、そんな連中はみなお見逃しで、無実の婆羅門が殺されると、魚はそれが可笑しくて笑ったんだよ。万物の中に這入りこむ霊鬼が姿を変じて魚となり、王の非常な不明の

ほどを笑った次第なのさ。」

と答えたのです。わたしはラークシャシーのこの言葉を聴きますと直ぐに樹から下り、その翌朝王に魚の笑った理由を話しました。王は後宮から女装をした男子たちを探し出しましたので、わたしを深く尊敬しました。また、かの婆羅門を死罪から放免しました。

わたしは王のあれこれの放逸な所行を見まして嫌気がさして来ました。ある日、一人の絵描きが王廷に参りました。この絵描きは王と皇后の肖像を画布に描きましたが、その肖像画はただ言葉を語らず動かないだけで、実物そのままでした。王は非常に満足して、画家に莫大な謝礼をしました。そして、その画を居室の壁にかけさせました。ある日、わたしが王の居間に這入りますと、皇后の肖像画は瑞相に満ちみちて輝いていました。しかし、わたしは他の瑞相との調和から、直感で、帯の部分にもう一つ黒子（ほくろ）があるべきであると考え、それを描き加えました。わたしはこうして皇妃の肖像を瑞相を完全にそなえたものとして、帰りました。贋ナンダ王が這入ってきまして、そのティラカを見つけ、侍臣たちに

「誰がこの画にこれを描いたのだ。」

と詰問しましたので、彼等はわたしがその黒子を描いたと告げました。贋ナンダ王は、憤怒の焔を燃やしながら

「妃のこの部分には黒子があるが、いつも衣服で被われている部分にあるのであるから、余のほかには誰も知らない筈だ。それをヴァラルチはどうして知ったのであろうか。たしかに彼奴は

余の後宮をひそかに荒したに相違ない。それだからこそ、彼奴は女の姿をした男どもがそこにいるのを見つけたのだ。」

と考えました。まこと、馬鹿な人々はこのような暗合を屢〻見出すものです。そこで、王は誰にも相談せずにシャカターラを召して、

「皇妃を犯した罪によりヴァラルチを殺せ。」

と命令しました。シャカターラは

「仰せの通りにはからいます。」

と答えて、退出しましたが、

「ヴァラルチを殺すだけの力は自分にはない。彼は神のごとき智慧の所有者であり、また自分を災難から救うてくれた恩人である。それに、彼は婆羅門である。従って、彼を匿れさせて、自分の味方にするのが得策である。」

と考えました。このように決心をしましたシャカターラはわたしのところに来まして、王が理由もなく怒っていることと結局わたしを殺すよう命じたことを話し、更に言葉をつづけて、

「あなたが王のために殺されたという噂が世間に弘まるように、わたしは誰か別人を殺しましよう。そして、あなたはあの怒り易い王からわたしを護るために、わたしの家に留まっていて下さい。」

と申しました。わたしは彼の申出でに同意して、彼の家に身を隠して逗留しました。そして、彼

は夜間に誰か別の人を殺して、わたしが死んだという噂を拡がらせました。わたしはこのような策略を用いた彼に対する親愛の気持から、そのとき彼に

「君がわたしを殺そうとしなかったことによって、君はまことに無比の大臣である。誰もわたしを殺すことは出来ない。わたしの友人に羅刹がいて、わたしが彼のことを念頭に浮べるだけでわたしのところに来る。わたしが望みさえすれば、万物を呑んでしまうのである。それに王はわたしの友人で、インドラダッタという婆羅門であるから、かの王を殺すことは出来ない。」

と言いました。この言葉を聴きますと、シャカターラは

「その羅刹をわたしに見せて下さい。」

と申しました。そこで、わたしが心の中で念じただけでやって来ました羅刹を彼に見せますと、彼はそれを見て驚き、また怖れおののきました。羅刹が姿を消しますと、彼は

「どうして羅刹があなたの友達になったのですか。」

と、再び訊ねましたので、わたしはその訳を話しました。

「ずっと以前に、都城長官が治安の維持のために毎夜市中を巡回していたのであるが、順次に殺された。そのことを聞くと、贋ナンダ王はわたしを都城長官に任命した。ある夜、わたしが巡回していると、うろついている羅刹を見つけた。すると、この羅刹はわたしに『この都で一番美しい女が誰か知っているなら話せ。』と、言った。この言葉を聴いて、わたしは大笑いして『馬鹿だね、惚れこんだ女が一番美しいのじゃないか。』と、答えると、『俺を負かしたのは、あなた一

人だ。」と、語った。謎を解いたために死を免れたわたしに、羅刹は再び言葉をつづけて『俺は、あなたに感心した。今後、あなたは俺の親友だ。あなたが心の中で俺のことを思うてくれさえすれば、俺は直ぐ現われよう。』と、言って姿を消したので、わたしももと来た道を帰った。こうして、羅刹はわたしの友人となったが、特に難事に味方となってくれた。」

と言いますと、シャカターラは再びわたしに懇請しましたので、わたしは彼にガンガー女神（ガンジス河の女神）を見せました。この女神も、わたしが心の中で念じただけで姿を現わしたのでした。そしてわたしが讃歌を読誦すると、この女神は満悦して姿を消しました。爾後、シャカターラはわたしに従順な味方となりました。

　そして、あるとき、身を匿しているのが嫌になりましたわたしに、この大臣が言いました。

「あなたは一切に通暁していられるのにも拘わらず、何故自分から落胆して悄気ていられるのですか。王の心が正気の沙汰でなくなっていることをあなたは知らないのですか。間もなく、あなたは青天白日の身となります。この点について、こういう話があります。お聴き下さい。」

〔賢相シヴァ・ヴァルマンの物語〕

　むかし、この土地に、アーディティヤ・ヴァルマンという王がいまして、その大臣にシヴァ・ヴァルマンという賢人がいました。あるとき、王妃の一人が妊娠しました。そのことを知りました王は、後宮の守衛たちに

「余がこの後宮に出入しはじめて二年になるにも拘わらず、誰も妊娠しなかった。それに今この妃が妊むとは如何なる訳だ。つつまず申せ。」

と訊ねました。そこで、守衛たちは

「陛下の宰相シヴァ・ヴァルマンさまのほかには、ここに誰も出入をなさりませぬ。ただあの方のみは自由に出入せられます。」

と答えました。この言葉を聴きますと、王は考えました。

「あの男こそまさしく裏切り者だ。しかし、公然とあの男を殺せば、余は非難されよう。」

と思いめぐらして、アーディティヤ・ヴァルマン王は口実を設け、シヴァ・ヴァルマンを友好関係を結んでいる隣国のボーガ・ヴァルマン王の許に派遣しました。直ぐその後から、シヴァ・ヴァルマンを殺してほしい旨をしたためた書簡を持たせて、王は使者をボーガ・ヴァルマン王の許に派遣しました。大臣が出発して七日を経ると、かの王妃は恐怖から逃げようとしましたが、守衛に発見せられ、女装をした情夫と一緒に連れ戻されました。アーディティヤ・ヴァルマン王は、そのことを聴きまして、

「余はどうして理由もなくかかる勝れた大臣を殺したのであろうか。」

と、深く悔んだのでした。

　さて、話かわって、シヴァ・ヴァルマンはボーガ・ヴァルマン王の宮廷に到着しましたが、そ

の直ぐ後から書簡を持参した使者も到着しました。ボーガ・ヴァルマン王はこの書簡を読みましたが、運命の命ずるままに、シヴァ・ヴァルマンに、彼を殺すよう命令を受けたことをひそかに語りました。すると、智慧のある大臣シヴァ・ヴァルマンがボーガ・ヴァルマン王に

「わたくしを殺しなさい。さもなくば、わたくしはここで自殺します。」

と言いました。この言葉を聴きますと、ボーガ・ヴァルマン王は驚いて、

「それはどういうことですか。婆羅門よ、わたしに話して下さい。もし話して頂けないならば、わたしはあなたを呪います。」

と言いますと、その大臣は

「何処であれ、わたくしが殺された土地に、神は十二年間雨を降らさないでしょう。」

と語りました。この言葉を聴きまして、ボーガ・ヴァルマン王は大臣たちと協議しました。

「あの性悪な王はわれわれの土地の破滅することを望んでいるのだ。かの王は何故に刺客をひそかに送らなかったのか。従って、あの大臣は殺すべきでなく、また自殺もしないようにすべきである。」

と相談し、護送の使者を任命して、ボーガ・ヴァルマン王はシヴァ・ヴァルマンを直ぐに自分の国から送り帰しました。このように、この大臣は自分の智慧によって生きて国に帰ったのでしたが、彼が青天白日の身であることはこのように他のことから明らかとなりました。まこと、正義は必ずや認められましょう。

「ですから、あなたの無実も必ず明らかとなります。暫くわたくしの家にいて下さい。王も自分の所業を必ず後悔するでしょう。」

と、シャカターラから言われましたので、わたしはその後機会を待って彼の家に匿れて毎日を送りました。

さて、ある日のこと、ヒラニヤグプタという贋ナンダ王の王子が狩猟に出かけました。馬が速く馳ったために、かなり遠くまで行ってしまい、森の中をひとりでさまようていました間に、日が暮れてしまいました。そこで、彼はその夜を過すために樹に登りました。すると、彼の直ぐ後から獅子を怖れた熊がその樹に登ってきました。熊は王子が怖れて震えているのを見まして、人間の声で

「こわがらないで下さい。あなたはわたしの友人です。」

と言って、彼を決して害わないと約束しました。王子は熊の言葉を聴いて安心して睡りました。熊は睡らずにいました。獅子がやって来て、

「熊よ、人間を落せ。そうすれば、俺はここから立去るよ。」

と言いましたが、熊は

「悪漢め、俺は友人を殺したりはしないのだ。」

と答えました。暫くして、熊が睡り、王子が眼を覚ましていました。すると、獅子が再び

「人間さん、その熊を落して下さい。」
と言いました。この言葉を聴きますと、王子は怖ろしさのあまり、獅子をなだめるために熊を落そうとしましたが、不思議にも熊は落ちず、しかも運命のしからしむるところ熊は眼を覚ましました。そして、熊は
「友人を裏切る奴め、狂人になれ。」
と、誰かがその一部始終を知るまで解けることのない呪詛を、王子にかけました。かくて、王子はその翌朝狂人となって王宮に帰って来ました。贋ナンダ王はそれを見まして、忽ちに落胆してしまいました。そして、
「こういうときに、ヴァラルチが生きているならば、すべてが判るのだが、あの男を軽率にも殺してしまったとは。」
と言いました。王のこの言葉を聴きまして、シャカターラは考えました。
「ははあ、ヴァラルチを連れ出す時期が到来した。あの男は自尊心が強いから、ここには最早留まらないであろう。そうなれば、王は自分を信頼するであろう。」
と考えて、彼は宥恕を請うて王に
「陛下、決して気を落さないで下さい。ヴァラルチは生きています。」
と言いますと、贋ナンダ王は
「直ぐヴァラルチを連れて来よ。」

と命じました。そこで、わたしは突然にシャカターラに連れられて贋ナンダ王の前に行きまして、王子が狂人となっているのを見ました。わたしはサラスヴァティー女神の恩寵によって一部始終を知り、王に
「王よ、王子は友人を裏切ったのです。」
と語りますと、王子にかけられた呪詛は解け、王子はわたしを讃仰しました。
「どうしてそなたはそのことが判ったのか。」
と、王が訊ねましたので、わたしは
「王よ、智慧のある人間の心は前兆から類推し、直感によって一切を覚るのです。わたくしが王妃の黒子を知ったのと同じように、一切のことを知るのです。」
と言いますと、王はわたしの言葉に深く恥じいりました。
さて、青天白日の身となりましたわたしは、王の手厚い贈物も受取らずに、自分の家に帰りました。賢人によって、清廉は財産であるからです。わたしが家に帰りつきました途端に、召使の者がわたしの前に泣きくずれました。すると、とまどっているわたしのところへ、ウパヴァルシャがやって来まして、
「王があなたを殺したと聞いて、ウパコーシャーは火に身を投じて死にました。そして、あなたの母上は悲しみのために心臓が破裂して亡くなられました。」
と申しました。この言葉を聴きますと、わたしは新たに生じた悲しみのために茫然自失して、風

に吹き倒される大木のように、俄かに地上に倒れてしまいました。そして、わたしは忽ちに大きな悲しみを味わう身となりました。最愛の身内を失うた悲嘆の焔に焼かれない者が何処にありましょうか。

「この世界に於いて、万物が輪廻(りんね)*する中で、唯一つの不変のものは無常ということである。あなたは創造主のこの幻術を知りながら、何故に錯乱していられるのですか。」

などと、ヴァルシャがやって来て、わたしの眼を覚ましてくれましたので、わたしは漸くのことで平静を取戻しました。かくて、わたしは世が嫌になり、一切の繋縛を捨て去り、寂静を唯一の友として、苦行林に這入りました。

かくて、幾日かが経ちましたある日、わたしの居りました苦行林にアヨーディヤーから一人の婆羅門がやって来ました。わたしがこの人に贋ナンダ王の王国についての噂を訊ねますと、彼はわたしが誰であるかを覚って、悲しげに次のように語りました。

(シャカターラの復讐)

「あなたが贋ナンダ王の許を去られました後に、あの王の身におこったことをお聴き下さい。シャカターラは長い間待って、漸くにして復讐の機会を得たのです。彼が策略を用いて贋ナンダ王の弑逆を考えていましたとき、路上でチャーナキヤ*という婆羅門が土地を掘っているのを見ました。

「何のために土地を掘っているのか。」

と訊ねますと、その婆羅門は

「ダルバ草*がわたしの足を刺しましたので、その草を掘っているのです。」

と答えました。この言葉を聴きますと、大臣シャカターラはこのように憤怒のために激しい決心をする婆羅門こそ贋ナンダ王の弑逆に最もよい方便であると考え、名を訊ねて、このように言いました。

「婆羅門よ、ナンダ王家に於いて十三日に挙行せられる祖先祭をあなたに司宰して頂きたい。あなたには布施として十万金を差上げましょう。そして、あなたは他の誰よりも上座について食事をして頂くのです。それまで、わたしの家に来て下さい。」

と言いまして、シャカターラはチャーナキヤを自分の邸に連れ帰りました。祖先祭の日になりますと、大臣はチャーナキヤを王に引きあわせ、王もこの婆羅門に満足の意を表わしました。かくて、チャーナキヤは祖先祭に於いて上座につきました。スバンドゥという婆羅門がひそかにその上座を望んでいました。そこで、シャカターラはナンダ王のところへ行きまして、その旨を告げますと、王は

「スバンドゥを上座につかせよ。他の者は如何なる者もその位置につく資格なし。」

と言いました。シャカターラはチャーナキヤのところに行き、怖れ畏んで

「これはわたくしの罪ではありません。」

と付言して、王の命令を伝えたのでした。そこで、チャーナキヤは全身から怒憤の焔を燃えたたすほどに怒って、自分の頭髪の束を解いて、次のような起請をしました。

「誓って余は七日のうちにナンダ王を殺すであろう。余の怒りの鎮められたとき、余は頭髪を再び束ねるであろう。」

と言いますと、贋ナンダ王が怒りましたので、シャカターラはチャーナキヤを人知れず逃がして、自分の家に匿したのでした。そして、この大臣の援助を得て、チャーナキヤはひそかに何処かに赴いて呪法の祭式を行いました。この祭式の威力によって、贋ナンダ王は激しい熱病に罹り、七日目が来ますと死んでしまいました。シャカターラは贋ナンダ王の子のヒラニヤグプタを殺して、嫡のナンダ王の王子チャンドラグプタ*を王位につけました。そして、ブリハスパティ神（智慧と雄弁の神）に等しい智慧を持つチャーナキヤにチャンドラグプタの宰相になるよう懇請し、その地位につけたのち、大臣シャカターラは贋ナンダ王に復讐を遂げて自分のなすべき仕事は成就したと考え、また自分の息子たちの死に対する悲しみから世を厭い、大森林に隠棲しました。」

と、この婆羅門の口から聴きまして、わたしは一切が無常で変り易いことを覚り、劇しい苦悩を受けたのでした。この苦悩のために、ドゥルガー女神（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）に詣でるためにここに来て、女神の恩寵によってあなたにお目にかかり、わたしは前生を思い出したのです。そして、神智を体得して、わたしはあなたに偉大な物語をお話したのです。今やわたしにかけられた呪詛は終ったのですから、わたしはこの肉体を離れるように努力するでしょう。あなたは三つの言語（梵語、プラークリット語及び地方語）の使用を放棄したグナーディヤという婆羅門が弟子を連れて、あなたのところに来るまで、ここに留まられよ。グナーディヤはもとマーリヤヴァットという勝れたガナであったのですが、わたしと同じように、彼もまた女神の怒りに触れて呪詛せられ、人間となったのです。あなたはこの人に、シヴァ神の語られたこの偉大な物語を話して下さい。かくて、あなたの呪詛は解け、また彼の呪詛も解けるでしょう。

このようにヴァラルチはカーナブーティに語って、彼は肉体を離れるためにバダリー聖処*に向って出発しました。そして、人間の状態の解脱を希求する彼は、その聖処に於いてシャラニヤー女神（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）に熱烈な誠信を捧げて、女神の恩寵を冀いました。女神は姿を現じて、肉体を解脱するために火より昇天するための呪頌を彼に教えました。そこで、ヴァラルチは自らの肉体を焼き、女神より教えられた呪頌を唱えて、自らの天上の住居に帰って行きました。

かくして、カーナブーティはその後もグナーディヤとの会見を切望しながら、ヴィンディヤ山の森林に留まっていました。

四

さて、かのマリーヤヴァットは人間の姿となって、グナーディヤという名でサータヴァーハナ王*に仕え、誓いに従って、かの王の面前で梵語など三つの言語を用いることを捨て、悲しい心を抱いてドゥルガー女神に詣でるために、森林の中をさまようて、やって来ました。そして、かの女神の命令によって、カーナブーティに会いました。すると、彼は自分の素姓を憶い出して、突如眼が覚めたようでした。自分が捨てると誓った三つの言語とは異なるパイシャーチー語を用いて、カーナブーティに自分の名を告げて、言いました。

「プシュパダンタから聞かれた神々しい物語を速かにわたしに話して頂きたい。それによって、友よ、あなたも、わたしも、ともに呪詛から解放されるでしょう。」

と、マーリヤヴァットの語るのを聴きまして、カーナブーティは彼に恭しく礼して、嬉しそうに語りました。

「物語をお話し申しあげましょう。しかし、わたくしは今非常な好奇心に取憑れています。まず、わたしのお願いをお許しあって、あなたの御誕生以来の御経歴をわたしに話して頂きとう存じます。」

と、カーナブーティがグナーディヤに慫慂しますと、グナーディヤは次の物語をはじめました。

（グナーディヤの経歴）

「プラティシュターナに、スプラティシュティタという都城があります。その地に、ソーマ・

シャルマンという婆羅門がいました。この婆羅門にヴァツァとグルマという二人の息子がいましたが、三番目には娘が生れ、シュルタールターと名づけました。時を経て、この婆羅門も、その妻も死にまして、二人の息子が妹を守って暮していました。すると、突然にシュルタールターが妊娠しました。それを見まして、ヴァツァとグルマとは、彼女の許に誰も他の男が通って来ないことから、お互いに疑いはじめました。彼等の心の中を察したシュルタールターは二人の兄にこう申しました。

「お互いに疑うなど醜い猜疑は止めて下さい。聴いて下さい。あなたがたにお話し申しあげます。ナーガ（龍）族のヴァースキ王の甥にキールティセーナという公子があります。わたしが水浴に行きましたとき、この公子が妾を見染め、自分の家柄と名を告げ、ガーンダルヴァ式の結婚*によってわたしを妻としました。彼は婆羅門種の出であります。彼によって妾は妊娠しましたのです。」

という妹の言葉を聴きまして、ヴァツァとグルマは

「どうしてこの言葉に信用が置けよう。」

と申しました。そこで、彼女はひそかにナーガ族の公子を心の中で念じました。すると、その途端に公子が現われて、ヴァツァとグルマに語りました。

「あなたがたの妹御をわたしが妻としましたことは真実です。彼女は呪詛のために地上に落された美しい天女なのです。あなたがたもまた呪詛のために地上に落ちたのです。あなた方の妹に

必ず男児が生れるでしょう。そのとき、彼女もあなたがたも呪詛が解けるでしょう。」

と言って、姿を消しました。程なく、シュルタールターに男児が生れました。友よ、それがわたしだとお知り下さい。そのとき、

「この生れた子は徳（グナ）の権化である。されば、この子はグナーディヤ（「徳のゆたかなる者」の意）と呼ばれ、婆羅門種である。」

という神々しい声が天空から聞えてきました。こうして、呪詛の解けましたわたしの母と叔父たちは死にまして、わたしは縁辺のない身となりました。わたしは子供でしたけれども悲しみを捨てて、自分の力を頼んで学問の修得のために南方に赴きました。時を経て、一切の学問を修得して有名となりましたわたしは、自らの数々の徳を誇示しながら、故郷に帰りました。弟子を連れて、わたしが久し振りに都城スプラティシュティタに這入りましたとき、わたしは或る素晴らしい光景を見ました。ある場処では、詠歌僧がサーマ・ヴェーダ*の讃頌を聖典の掟に従って歌っています。ある場処では、ヴェーダ聖典の釈義について、婆羅門たちが口論しています。また、別のところでは、博奕打ちたちが

「博奕を知っている人は誰でも財産を手に持っているのだ。」

と、騙し文句を叫んで、博奕を讃えていました。また、別のところでは、お互いに自分の金儲けの手腕を自慢し合っている商人の群の真中で、一人の商人がこんな話をしていました。

〔「鼠」という名の商人の物語〕

「貯蓄心のある人間が財貨によって財貨を得たとて、何の不思議もないことです。ところが、財産を持たないわたしは、嘗て大儲けをしました。わたしが未だ胎児でいる間に、父は死にました。そのとき、母は悪い親族の者たちに財産を奪われました。そこで、母は胎児のわたしを守って、親族の者たちの迫害を避けて、父の親友のクマーラ・ダッタの家に身を寄せました。そして、そこで将来の生計を担うべき運命のわたしを生んだのですが、その後も操を守りつづけ、賤しい仕事までもして、わたしを育てあげたのです。貧乏なために人のあわれを受けても差支えなかったのですけれども、母は先生を説きふせて、わたしに読み書きと運算を学ばせました。あるとき、母がわたしに

「伜や、そなたは商人の子じゃ。だから、そなたはもう商売をしなさい。この土地にヴィシャーキラという大金持ちの商人がいます。この人は、良家の生れで貧乏な人々に、資本を借しています。行って、資本を貸して貰うように頼みなさい。」

と申しました。そこで、わたしはヴィシャーキラの家に行きますと、そのときこの人がある商人の子に、こう言っていました。

「この床の上にあるこの死んだ鼠を御覧。こんな物でも、有能な人間は商売によって金儲けをする。馬鹿者め、わたしはお前に多額のディーナーラ*をやった。それにも拘わらず、お前はそれ

を増すどころか、維持することも出来なかったではないか。」

と言いますのを聴きまして、わたしは突然にヴィシャーキラに申しました。

「わたしがこの鼠を資本としてあなたから借り受けました。」

と言いまして、鼠を手に取上げ、受取を書いて、その家を出ました。すると、かの商人は大笑いしました。

わたしはその鼠を猫の食糧に売って、豆を両手に一杯貰いました。わたしはその豆を粉にし、水瓶を持って、町はずれの四辻の木蔭に行き、そこで冷い水と粉とを疲れて休んでいる木材運搬業者たちに恭しくあげました。すると、これらの人々は喜び、お礼に一人ごとに二本ずつ木材をくれました。わたしはそれらの木材を持ち帰って、市場で売りました。そして、儲けた金の一部でまた豆を買い、その次の日も同じように木材運搬業者たちから木材を貰いました。毎日このようにして、わたしは次第に金を貯え、三日間でわたしは木材業者たちから木材をのこらず買い取りました。すると、たまたま、多雨のために材木の運搬が絶え、材木が欠乏してきました。わたしは材木を幾百パナ*という金額で売りました。その金でわたしは店舗を構え、取引を行って、わたしは自分の手腕で次第に大きな財産を築き上げました。わたしは黄金の鼠をつくって、かのヴィシャーキラに贈りました。彼はわたしに自分の娘をくれました。こうして、わたしは世間に「鼠」という名で知られるようになりました。このようにして、わたしはお金がありませんでしたけれども、成功をかちえたのです。」

と言うのを聴きまして、他の商人たちは驚嘆してしまいました。

〔愚かな詠歌僧の物語〕

また、別のところでは、サーマ・ヴェーダの詠歌僧で黄金八マーシャ*の贈与を受けた一人の婆羅門に、ヴィタ*らしい男がこんな話をしていました。

「あなたは婆羅門ですから兎に角生活することが出来ます。ですから、あなたは今この黄金で世間のことを学んで物識りになるべきです。」

と言いますと、この馬鹿者は

「誰がわたしに教えてくれますか。」

と訊ねましたので、その男は

「それはチャトゥリカーという遊女ですよ。彼女の家に行きなさい。」

と答えました。婆羅門が

「そこでどうするのですか。」

と聞きますと、ヴィタが

「黄金を彼女にやって、彼女を喜ばせるために何か歌（サーマン）をうたいなさい。」

と言いました。この言葉を聴きますと、その詠歌僧は急いでチャトゥリカーの家に行きました。この僧がチャトゥリカーの家に這入りますと、彼女が愛想よく迎えいれましたので、彼は座について、

「この黄金で、今日わたしに世間のことを適当に教えて頂きたい。」

と、ためらいながら申出て、彼女に黄金を与えました。その場にいた人々は笑いだしました。婆羅門は暫く考えていましたが、手を乳牛の耳の形に組み、両手で管のようにして、馬鹿者さながらに声を張り上げて、サーマ・ヴェーダの一節をうたいはじめました。* その家に来ていたヴィタたちは、余興を見ようとして集まって来て、

「この狐はどう間違ってここにまぎれこんだのだろうか。早くみんなで奴の頸に半月*をくらわしてやろうじゃないか。」

と言いました。婆羅門は半月とは尖端がその形をした矢のことであると思い、それで首を切り落されるのかと怖れて、

「世間のことを習いました。」

と叫んで、その家から飛び出しました。彼は直ちに自分を女の家に行かせた男のところに行き、一部始終を話しました。すると、その男は

「わたしが言った歌（サーマン）というのは、あの女を口説く甘い言葉のことなんだよ。そのようなときに、ヴェーダの聖句をうたって、どういう御利益があるというのかね。結局、ヴェーダで頭の混乱した人間には、本当に愚かさが滲みこんでいるという始末さ。」

と大笑いをし、遊女のところに行って、

「この二本足の牛に、あの黄金を返しておやり。」

と言いましたので、女も笑いながら黄金を返してやりました。婆羅門は蘇生した思いで家に帰ってゆきました。

わたしは、一歩一歩、このような奇妙な光景を眺めながら、インドラ神の神殿にも似た王宮に到着しました。弟子たちが先触れしました後から這入り、謁見の間にいるサータヴァーハナ王に会いました。王の左右には、シャルヴァ・ヴァルマン*をはじめ多勢の大臣が居並び、王は神々に侍ずかれるヴァーサヴァ（インドラ神の別名）のように、宝玉を鏤ばめた獅子座に坐していました。わたしが祝福の言葉を述べて、座につきますと、王は歓迎の挨拶を述べました。すると、シャルヴァ・ヴァルマンたちは、わたしを賞揚しまして、

「陛下、この方はあらゆる学問に通暁せられた方として著名であります。まこと、この方のグナーディヤという名は、その字義（「徳のゆたかなる者」の意）通りに、この方の資性を現わしています。」

と申しました。大臣たちがこのように賞揚しましたので、王は非常に喜び、わたしを恭しく崇めて、大臣の地位に任命しました。かくて、わたしは結婚し、王事に参画し、弟子たちに教授しながら、その地で幸福に暮しました。

あるとき、春祭の際に、サータヴァーハナ王はゴーダーヴァリー河畔にあるデーヴィークリティー遊園に行幸しました。王はあたかもナンダナ園に於けるインドラ神のようにそこで永い間逍遥していましたが、水遊びをしようと思って后妃たちを連れて、池の中に下りました。王は戯れて、手に水を掬うては愛妃たちにかけました。妃たちも負けずに王に水をかけましたが、そのさまは牝象の群が牡象に水を浴びせかけるさまさながらでした。妃たちの顔には水がしたたり、眼は水に溶けた眼膏のためにかすかに赤味を帯び、身体には濡れた衣服が纏わりついて、裸身さながらに身体のどの部分もはっきりそれと知られるほどになって、王に水を浴びせました。王も、また、あたかも風が蔓草の葉や花をもぎとるように、愛妃たちに水を浴びせてはそのティラカ*を流し落し、妃たちは近くの草むらの中に逃げこむほどでした。すると、シリーシャ花*のように華奢な一人の妃が、乳房の重さに堪えかねて、この遊戯に疲れてしまいました。彼女はこの遊びにそれ以上堪えられなくなり、なおも水をかけている王に

「王さま、妾に水をもうかけないで下さい。」

と言いました。その言葉を聞きますと、王は急いで糖果を沢山持って来させました。その妃は笑い出して、再び王に申しました。

「王さま、どうして水の中で糖果(modaka)が要りますの。妾が申上げましたのは、『もう水をかけないで下さい。』(mā udakaḥ) と、申したのです。あなたさまは mā という語と udaka という語との連声(れんじょう)*さえ御存知ないのですね。文法をお知りになりませんの。どうして、こんなに御馬鹿さんなのでしょう。」

と、梵語の文法をよく知っている彼女に言われました王は、周囲の者たちが笑いましたので、内心非常に恥じいりました。王は直ちに水遊びを止め、悄然とうなだれて、人知れず自分の宮殿に這入りました。こうして、王は思いわずらい、心迷い、食事などの楽しみも遠ざけて、画像のように人から訊ねられても何も答えませんでした。

「自分にのこされた逃避所は、学識を得るか、死ぬかのいずれかである。」

と考え、臥床に身を投げて嘆き悲しみました。そこで、周囲の者たちは王が突然にこのような有様になったのを訝しく思い、

「これはどうしたことだ。」

と当惑してしまいました。こうして、わたしとシャルヴァ・ヴァルマンの二人が、漸くにしてそのことを知りました。兎角するうちに、その日は暮れかかりました。われわれは直ちに、そのときもなお王が茫然としていることを察して、ラージャ・ハンサという侍従を呼び寄せて、王の健康状態を訊ねますと、

「王さまがこのように悄気ていられましたことは、今までに一度だってありませんでした。学問かぶれした、あのヴィシュヌ・シャクティンの娘が今日王さまを辱かしめた、と、他のお妃たちが憤慨していました。」

と答えました。このことを侍従の口から聴きまして、わたしとシャルヴァ・ヴァルマンとは悄気

てしまい、進退谷まって考えました。

「王が病気であるならば、われわれは医者を呼ぼう。しかし、精神的な苦悩であれば、その原因をつきとめることは困難である。茨なす者は滅ぼされているから、この王国に敵はない。しかも、臣下の者たちは王に心服している。何ひとつ不足はない筈だ。従って、王のこのような煩悶はどうしたのであろうか。」

と思いめぐらしていますと、賢明なシャルヴァ・ヴァルマンが

「わたしはその訳を知っています。王は自分の愚かさを悩んでいるのです。と申しますのは、王はいつも『自分は愚か者だ。』と、申されて、学識を得ることを望んでいられるからです。わたしは王の望みを嘗て知ることが出来ました。それに、今日王妃に馬鹿にされたのが直接の原因だ、と聞いたではありませんか。」

と申しました。このように、われわれは論議しながらその夜を過し、その翌朝二人で王の私室に行きました。そこには誰も這入ることを禁ぜられていましたけれども、わたしは漸くのことで這入りこみました。シャルヴァ・ヴァルマンもわたしの後から素早く這入りこみました。わたしは王の傍に近寄り

「陛下、理由もないのに、あなたは何故悄気ていられるのですか。」

と申しました。サータヴァーハナ王はわたしの言葉を聴きましても、なお黙ったままでいました。すると、シャルヴァ・ヴァルマンが驚くべき言葉を語りました。

「陛下、あなたは嘗てわたくしに『余を学識ある者とせよ。』と、仰言られました。そこで、わたくしは昨夜夢を正夢とさせる呪文を作りました。すると、わたくしは夢の中で天から蓮華の降るのを見ました。そして、蓮華は一人の天童によって開かれ、その中から白衣の天女が現われ、しかも陛下、その天女はあなたさまの口に這入りました。わたくしは玆まで夢を見まして眼が覚めましたが、思うにかの天女はサラスヴァティー女神（雄弁と学識の女神）で、かの女神が明らかに陛下の口に這入られたに相違ありません。」

と、シャルヴァ・ヴァルマンが夢のことを語りますと、サータヴァーハナ王は直ぐ沈黙を破って、非常な熱心さでわたしに

「真面目に努力する人は、どのくらいの時間で、学識を得ることが出来るか、わたしに話して貰いたい。学識がなくては、余にとっては権勢も何等輝かしくはない。愚か者にとって、地位も権力も何の役に立とう。それはまことに丸太に飾った装飾品のようなものである。」

と語りました。そこで、わたしは

「陛下、人々は一切の学問の入口である文法論を学ぶのに常に十二年を要します。しかし、陛下、わたしはあなたにそれを六年でお教えいたしましょう。」

と答えました。この言葉を聴きますと、急にシャルヴァ・ヴァルマンは嫉妬心にかられて、

「安楽な生活に慣れた人がどうしてそのように永い間の苦労に堪えられましょう。ですから、陛下、わたしはそれを六ヵ月であなたにお教えいたしましょう。」

と申しました。この見込みを聴きまして、わたしは腹が立ちましたので、

「もし君が六ヵ月で王に教えることが出来るならば、わたしは人々の間に用いられている梵語と俗語（プラークリット語）と地方語との三つの言語を、直ちに、しかも永久に捨てよう。」

と、宣言しました。すると、シャルヴァ・ヴァルマンは

「もしわたしにそれが出来なかったならば、わたしはあなたの靴を十二年間頭の上に載せていましょう。」

と言い放って退出しましたので、わたしも家に帰りました。王はわれわれのいずれかによって目的が達成せられると思って、安堵の胸をなでおろしました。

シャルヴァ・ヴァルマンは自分の宣言したことが極めて実行困難であることを覚って思い悩み、後悔の念にかられて、すべてを妻に打明けました。彼女はそれを聴いて悲しみましたが、

「あなた、この困難を切り抜けるにはカールッティケーヤさまの恩寵にお縋りするよりほかに方法はありません。」

と申しました。シャルヴァ・ヴァルマンは

「その通りだ。」

と言いました。そして、その決心をし、カールッティケーヤ神の神殿にて断食を行うために、その夜の最後の更に出発しました。そのことを間諜の口から聴きますと、わたしは王にその旨を告げました。王はそれを聴いて、

「どうなることか。」

と思いました。すると、シンハ・グプタという忠実な侍衛が王に申しました。

「陛下、陛下が思い悩んでいられると聞きまして、わたくしも世の中が嫌になりました。そこで、わたしはこの都城を出まして、陛下の御繁栄を永く保たしめることを念じて、チャンディカー女神（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）の前で自分の頸を刎ねようと、準備していました。すると、天空から『そのようなことをしてはならぬ。王の願いは達成されるであろう。』という声が聞えてきました。ですから、陛下の御願望は必ず達成されると、わたくしは信じます。」

と言いまして、王と相談して、間諜を二人派遣してシャルヴァ・ヴァルマンを監視させました。シャルヴァ・ヴァルマンは空気を吸うのみで何も摂らず、沈黙の行を守り、決心堅く、漸くにしてカールッティケーヤ神の神殿に着きました。カールッティケーヤ神はシャルヴァ・ヴァルマンの自身を顧みない苦行に満足されて、彼の望みのままに恩寵を授けられました。シンハ・グプタの派遣した二人の間諜が王の前に帰って来まして、シャルヴァ・ヴァルマンの成功を報告しました。この報告を聴きまして、王は非常に悦び、わたしは落胆しました。そのさまは、あたかも雲を見てチャータカ鳥*が喜び、白鳥が悲しむようでありました。こうして、シャルヴァ・ヴァルマンはカールッティケーヤ神の恩寵をかちえて帰ってきまして、彼が思惟すれば直ちに浮んでくる一切の学問を王に授けました。これらの学問は直ちにサータヴァーハナ王に宣示せられました。マヘーシュヴァラ（大自在天、シヴァ神の称号）の恩寵にして、為し得ないことがありましょうか。

こうして、王があらゆる学識を得たことを聞きまして、王国は挙げて歓喜し、王土内の到る処で大饗宴が催おされました。そして、直ちに旗幟が掲揚せられ、風にはためくさまはあたかも歓喜に踊っているかのようでした。王はシャルヴァ・ヴァルマンに恭しく礼して、王者に相応わしい宝玉を夥多贈って、彼に師事しました。しかも、彼はナルマダー河の河口近くにあるバルカッチャ地方の太守に任ぜられました。王はまた六面の神（カールッティケーヤ神）から恩寵を得たことを最初に間諜の口から聞きましたシンハ・グプタを大いに多とし、彼に王者と同じ威光を授けました。また、王が学識を得る機縁となった妃のヴィシュヌ・グプターにも、王は愛情から自ら灌頂して、他の妃たちを越えて、皇后としました。

五

こうして、わたしは沈黙の行を守って、王の前に伺候しました。そこへ一人の婆羅門が自分のつくった詩頌を誦しました。王は正しく梵語で挨拶の言葉を述べました。その座にいました人々は、それを見て、王が学識を得たことを知り大いに喜びました。すると、王は謙遜な態度でシャルヴァ・ヴァルマンに

「如何にして神があなたに恩寵を授けられたか、何卒話して頂きたい。」

と申しました。この言葉を聴きますと、シャルヴァ・ヴァルマンは王に神の恩寵について語りました。

（シャルヴァ・ヴァルマンの物語）

「陛下、あのとき、わたくしは断食をし、無言の行を守って、ここから出かけました。そして、もう少しで目的地に着く地点まで行きますと、激しい苦行のために憔悴し、精根尽きて意識を失い、大地に倒れてしまいました。すると、そのとき、槍を手にした男が来まして、はっきりと

「わが子よ、立ち上れ。万事そなたのために好転するであろう。」

と、言われたように覚えています。すると、忽ちに、わたくしは甘露の驟雨を浴びせられたように、眼が覚めますと飢渇感はなくなり、身体の状態は上々であるような気がいたしました。そこで、わたくしは神殿に近づきまして、神に対する誠信の重さにうちひしがれ、懼れ畏こんで水浴をし、精進潔斎して、神殿の内陣に這入りました。すると、スカンダ神（カールッティケーヤ神の異名）がわたくしの前にお姿を現わされましたが、またサラスヴァティー女神も現われられて、わたくしの口の中に這入られました。そして、六本の蓮華を持って現われられました、世に尊崇せられます神（カールッティケーヤ神）は

「言語の聖典は成就せられた。」

と仰せられまして、経典を読誦せられました。このお言葉を聴きまして、わたくしは人間全体に通有な軽率さで、経典の続きを想像して、ひとりで口ずさんだのです。すると、神がわたしに申

されました。

「もしそなたが自ら語らないならば、余が今述べる経論はパーニニの文典にかかわるものとなるであろう。これは簡潔なるが故に、カータントラ*と呼ばれるべきであり、まだ余が乗御する孔雀の尾（カラーパ）によってカーラーパカと呼ばれるべきである。」

と仰せられ、かの神は身を現ぜられたままで、わたくしに新らしい簡潔な文法論を啓示せられました。更に、言葉をつづけられて、

「そなたの仕えるサータヴァーハナ王は、前生に於いては、聖仙であった。バーラドヴァージャ仙*の弟子で、クリシュナという大苦行者であった。彼があるとき仙人の娘を見た。彼女もまた同じく彼を恋するに至ったが、そのとき突然に恋の神の矢に射られた傷の痛みを感じた。かくて、彼は仙人たちに呪詛されてこの世に化身し、仙人の娘もまた彼の妃に化身したのである。サータヴァーハナ王はかくのごとく聖仙の化身であるから、そなたを見るとき、そなたの望みに従って、かの王は一切の学問を得るであろう。何となれば、最高義は偉大な精神の人々には容易に獲得せられるが故である。それは彼等が前生に於いて学んだところであり、その真実が彼等の強い回想力によって思い出されるのである。」

と仰せられますと、神は姿を消されましたので、わたくしも神殿の外に出ました。すると、神僕たちがわたくしに米粒をくれました。こうして、わたくしは帰途につきました。陛下、不思議なことには、その後わたくしは毎日毎日その米粒を食べましたのですが、それは少しも減りませんでした。*」

シャルヴァ・ヴァルマンがこのように自分の経験しましたことを物語り終えますと、サータヴァーハナ王は非常に喜びました。そして、座より立って、水浴に出かけました。

そこで、沈黙の行を守っているために任務を離れていましたわたしは、わたしを疎んずる王に敬礼しただけで退出し、二人の弟子を連れて都城を出て、苦行の実行を深く心に決して、ヴィンディヤ山に住む女神（シヴァ神妃パールヴァティー女神）に詣でるために出発しました。そして、夢の中で女神からお告げがあり、あなたに会うためにこの怖ろしいヴィンディヤ山中の森林に這入ったのです。プリンダ族*の言葉から隊商を見つけ、その後に随って運命のままに歩きまわり、漸くのことでこの地に着き、これら多くのピシャーチャどもを見ました。そして、彼等が互いに喋っているのを遠くから聞きまして、ピシャーチャの言語を学び知り、わたしは無言の行を止めることが出来るようになりました。そこで、彼等に近づき、あなたがウッジャイニーに行かれたと聞き、あなたが帰って来られるまで待っていました。あなたに会って、第四の言語（ピシャーチャの言語、即ちパイシャーチー語）であなたをお迎えし、そしてわたしは自分の生れを憶い出したのです。以上が、今生に於けるわたしの経歴です。」

グナーディヤがこのように言いますと、カーナブーティが申しました。

「あなたの来られたことが、昨夜どうして判ったか、お聴き下さい。わたしの友人に、プーティ・ヴァルマンという、神のような眼識を持つ羅刹がいます。わたしはこの友人が住むウッジャイニーの遊園に行っていました。わたくしがこの友人にわたしの呪詛の終る時期を訊ねますと、この羅刹は『われわれは昼間には何等威力を持たない。暫く待ちなさい。夜になったら、話そう。』と、申しました。わたしは承知してそこにいましたが、夜になりますと、『行け。お前にかけられた呪詛の解ける原因となるグナーディヤが来ている。』と、申しましたので、わたくしは急いで帰って参り、お目にかかった次第です。今、プシュパダンタから聴きました物語をお話し申上げましょう。けれども、それより先に、ただ一つだけ知りたいことがございます。どういう因縁で、あのお方はプシュパダンタと呼ばれ、あなたはマーリヤヴァットと呼ばれるのですか。」
と、カーナブーティから問われますと、グナーディヤは話しました。

（プシュパダンタという名の由来）

「ガンジス河の岸に、バフ・スヴァルナカ*という拝領地があります。その地に、ゴーヴィンダ・ダッタという、非常に学識のある婆羅門が住んでいました。この婆羅門にアグニ・ダッターという貞淑な妻がありましたが、永い年月の間に二人の間に五人の息子が生れました。これらの息子たちは、容姿は端麗でしたけれども、自惚れの強い人間になりました。

あるとき、ゴーヴィンダ・ダッタの家に、第二のヴァイシュヴァーナラ（火神）のようなヴァイシ

ュヴァーナラという婆羅門が客として来ました。そのときゴーヴィンダ・ダッタは外出していましたので、かの婆羅門は息子たちに挨拶をしましたが、息子たちは笑うてばかりいました。そこで、婆羅門は憤然として家から出て行こうとしました。丁度、そこへゴーヴィンダ・ダッタが帰って来まして、その訳を訊ね、しきりに宥めますと、この勝れた婆羅門は怒って、このように申しました。

「君の息子たちは愚か者であるから、婆羅門種から転落した者である。また、君はかかる輩と交際している故に、君もまた同様である。従って、余は君の家にて食事をしない。もし食事をすれば、余は贖罪の儀式をしなければならぬ。」
と申しましたので、ゴーヴィンダ・ダッタは
「わたくしはこの不肖な息子どもに今後決して触れたり致しません。」
と、厳かな誓いを申し述べました。賓客を常に厚くもてなす妻のアグニ・ダッターも出てきまして、同じことを申しましたので、ヴァイシュヴァーナラは漸くのことで彼等の歓待を受けました。息子の一人のデーヴァ・ダッタはそれを見て、父の無情を悲しみ、両親から烙印を押された生活が如何に下らないものかということを考えて、失望落胆して、苦行をするためにバダリカー聖処に赴きました。こうして、デーヴァ・ダッタは最初のうちは木の葉を食べましたが、後には煙だけで生命をたもちながら、ウマー（シヴァ神妃パールヴァティーの別名）の夫を宥慰するために永い間苦行を行いました。
かくて、シャムブ（シヴァ神の別名）は彼の厳しい苦行に負けて、彼の前に姿を現わされ、彼は神から常に

庇護を受けるという恩寵をかちえました。シャムブは彼に

「学問を修めて、この世に於ける楽しみを享受せよ。そのとき、そなたは希望を達成するであろう。」

と指示されました。こうして、デーヴァ・ダッタは学問を修めるためにパータリプトラに行き、ヴェーダクムバという教師に、掟に従って、就きました。彼が師匠の家に留まっていますと、師匠の妻が情慾の虜となって、彼にしつこく言い寄りました。まこと、女の情は変り易いものです。デーヴァ・ダッタは恋の神の悪戯によって自分の勉学が妨げられましたので、ヴェーダクムバ師の許を去って、勉学の強い希望を抱いてプラティシュターナに赴きました。彼はその地で老妻を持つマントラ・スヴァーミンという老教師に就いて、学問を完全に会得しました。

あるとき、その地のスシャルマン王の王女シュリーが、あたかも吉祥の女神シュリーがヴィシュヌ神を見染めましたように、容姿端麗で学識のあるデーヴァ・ダッタを見染めました。デーヴァ・ダッタも、また、月輪を主宰する女神が空中を逍遥するように、窓辺に姿を現わした王女を見染めました。二人は愛の神の鎖である眼ざしで結び合わされたかのように、お互いに離れることが出来ませんでした。王女はそのとき愛の神の命令が化身したかのような一本の指で

「近くに来て下さい。」

と、合図をしました。そこで、デーヴァ・ダッタが近づきますと、王女も後宮から出て来まして、歯で花を採って彼の方に投げつけました。王女の示した秘密の合図が理解出来ず、彼はどうして

よいか判らないで師匠の家に帰りました。彼は心中燃える思いに焼かれて一言も言うことが出来ず、唖か狂人のように地上に輾転煩悶したのでした。賢明な師匠マントラ・スヴァーミンは、恋わずらいに兆を認めて、言葉巧みにデーヴァ・ダッタに訊ねましたので、彼は漸くのことで出来事を語りました。賢明な師匠はその謎を知って、彼に

「歯（ダンタ）で花（プシュパ）を取って、彼女はそなたに合図をしたのである。それは『プシュパダンタという、花の多い神殿に行って、わたしを待って居よ。』ということである。早くそこに行くがよい。」

と申しました。この言葉を聴きまして王女の合図の意味を知りましたこの若者は、自分の今までの悲しみを忘れ、かの神殿に赴いて彼女を待っていました。王女はその日が八日であるから「参拝に行くのだ。」と口実を設けて、プシュパダンタ神殿に行き、「唯一人でお参りする。」と言って、神殿の内陣に這入りました。内陣の扉の羽目の後にいる恋人を見まして、彼女は彼の頸に縋りつき、

「本当に素晴らしいわ。あの合図がどうしてお判りになりましたの。」

と言いましたので、彼は

「先生が覚って下さったので、わたし自身で判ったのではありません。」

と言いました。すると、王女は忽ちに怒って、

「離して下さい。あなたは頓馬よ。」

と言って、秘密のばれるのを怖れて出て行ってしまいました。デーヴァ・ダッタは見た途端に消えてしまった愛しい女のことをひそかに思いながらそこを立去りましたが、彼の生命の蠟燭は別離の火に溶けさるほどでした。このようなデーヴァ・ダッタを見まして、嘗て彼の苦行によって宥慰せられたシヴァ神は、彼の望みを遂げさせるために、パンチャシカというガナに命令されました。この勝れたガナはデーヴァ・ダッタのところへ行き、彼を慰めた後、彼を女装させ、自分は老婆羅門の姿をしました。こうして、このガナの頭領はデーヴァ・ダッタを連れて、あの美しい眼のシュリーの父スシャルマン王の許に行き、

「わたしの息子は何処かに行って、行方が判りません。わたしは息子を探しに諸方を遍歴しなければなりません。それについては、この嫁を、王よ、お預けしたいと思います。何卒この嫁を保護してやって頂きたい。」

と申しました。その言葉を聴きましたスシャルマン王は、それを拒絶すれば婆羅門に呪詛されることを怖れて、この若者を預かり、女と信じて自分の娘の部屋の奥深くにかくまいました。こうして、パンチャシカが立去りますと、デーヴァ・ダッタは女装をして自分の愛人の後宮に住み彼女から信頼されるに至りました。

ある夜、王女が恋人に対する思慕のために眠られずにいましたとき、彼は自分の正体を明らかにして、彼女とガーンダルヴァ式の結婚をしました。彼女が妊娠しますと、彼が心に念じただけで、かの勝れたガナはやって来まして、彼を夜分に人知れず後宮から連れ出しました。そして、

この若者の女装を直ちに脱がせ、翌朝になりますとパンチャシカは前のときと同様に婆羅門の姿となり、若者を連れてスシャルマン王の前に出て、

「王よ、本日わたくしは息子と一緒に参りました。わたしの嫁を返して頂きたい。」

と申出ました。王は彼女が夜の間に何処かに逃亡したことを知り、婆羅門から呪詛されるのを怖れて、畏って

「何卒、許して頂きたい。あなたの嫁御は日夜お護りしていたのですが、魔法によって夜の間に何処かに連れ去られてしまいました。」

と申しました。婆羅門の姿をしたパンチャシカは容易に納得しない風を装うて、

「王よ、もしそれが事実であるならば、わたしの息子にあなたの娘御を頂きたい。」

と申しました。この言葉を聴きますと、王は婆羅門の呪詛を怖れて、デーヴァ・ダッタに自分の娘を与えましたので、パンチャシカは立去りました。デーヴァ・ダッタは公然と愛妻シュリーを再び得て、シュリーのほかに子女のない舅スシャルマン王の光耀の中に安楽に暮しました。

時経て、スシャルマン王は娘シュリーとデーヴァ・ダッタの間に生れた孫マヒーダラを王位につけました後、森林に隠遁しました。こうして、デーヴァ・ダッタも息子の隆々たる発展を見て、所期の望みを達したと思い、シュリーとともに苦行林に隠棲しました。そこで彼は再びシヴァ神を宥慰し、神の恩寵によって現世の肉身を捨てて、シヴァ神の眷属たるガナの地位を得ました。彼は愛人が歯で花を採った合図を理解することが出来なかったということから、ガナの群の間で

プシュパダンタという名をつけられました。彼の妻シュリーもジャヤーという名で、神妃（パールヴァティー）の門番となりました。彼がプシュパダンタと呼ばれたのは、こういう次第です。では、わたしの名の由来をお聴き下さい。

（マーリヤヴァットという名の由来）

嘗て、わたしはこのデーヴァ・ダッタの父の婆羅門ゴーヴィンダ・ダッタの子で、ソーマ・ダッタという名でした。兄デーヴァ・ダッタと同じ理由で家を出て、ヒマーラヤ山中に赴き、多くの華蔓（マーリヤー）を捧げて、常時シヴァ神を宥慰し悦ばせようと念じて、苦行を行いました。月輪を冠とせられる神（シヴァ神）は満足せられて姿を現わされましたが、わたしは他の快楽の享受を望みませんでしたので、かの神のガナとなることを選びました。すると、山の神の娘（パールヴァティー）の夫である威力ある神（シヴァ神）は、

「そなたは人跡未踏の森林に咲く花の華蔓を、そなた自ら捧げて余を祀ったが故に、マーリヤヴァット（「華蔓をもつ者」の義）と称して、余のガナとなれ。」

と、命令されました。こうして、わたしは肉身を捨てて忽ちに福徳あるガナの地位を得ました。このように、縺れた髪を頭に担う神（シヴァ神）は、その特別の恩寵のしるしとして、わたしにマーリヤヴァットという名を授けられたのです。ところが、山の娘（シヴァ神妃パールヴァティー）の呪詛で、カーナブーティよ、あなたの御存じのように再びこの世に人間として生れてきたのです。ですから、われわれ二人の呪詛の状態を終らせるために、シヴァ神が嘗て語られた物語を、今わたしに話して頂きたい。」

六

グナーディヤのこの要請に応じて、カーナブーティは七話から成る神々しい物語を自身の言葉で語りました。そして、グナーディヤはパイシャーチー語を用いて、それを七年間に七千頌としました。この物語をヴィディヤーダラたちが盗み聴くのを慮って、森林の中でこの大詩人は墨汁がありませんでしたので、自分の血で書きました。シッダ（シヴァ神の従者の一）、ヴィディヤーダラなどがカーナブーティの語るのを聴こうとして集まって来ましたので、天は絶えず天蓋で覆われているかのようでありました。グナーディヤが編述しました偉大な物語を見まして、呪詛の解けたカーナブーティは自分の住処に帰って行きました。カーナブーティに随って遍歴していましたピシャーチャどもも、かの神々しい物語を聴きまして、すべて天国に達しました。そこで、大詩人グナーディヤは

「わがブリハット・カターを世界に弘布させねばならない。これこそ女神が自分の呪詛の終る時期を宣示せられたときの条件である。しからば、如何にしてこれを弘布せしめようか。また誰にわたしはこの物語を委ねようか。」

と考えました。彼に随行していました弟子のグナ・デーヴァとナンディ・デーヴァの二人が、師匠に申しました。

「名声赫々たるサータヴァーハナ王こそ、この詩文を委ねるに足るただ一人です。まこと、かの王は趣味の人ですから、風が花の香を匂わすように、この詩文を流布せしめるでありましょう。」

「それがよかろう。」

と、グナーディヤは徳行すぐれた二人の弟子にこの書を渡しまして、サータヴァーハナ王の許に差し遣わしました。グナーディヤ自身も首都プラティシュターナに行きましたけれど、弟子たちと会う約束をしていたデーヴィークリティー遊園に留まりました。彼の二人の弟子はサータヴァーハナ王の許に行って、グナーディヤの作であると言って、その詩書を王に見せました。王はそれがパイシャーチー語で書かれていると聞き、また彼等二人がピシャーチャの風貌をしているのを見まして、王は自己の学問の誇りから冷笑を浮べて、

「七千頌とは権威あるものである。しかし、パイシャーチー語は野蛮である。しかも、血で書かれている。このピシャーチャの物語を遠ざけよ。」

と申しました。そこで、二人の弟子はその書を取り返し、来た道を引返して、グナーディヤに一部始終を語りました。グナーディヤはそれを聴きますと、忽ちに落胆しました。権威ある識者によって軽蔑されたとき、身中苦悩しない者がありましょうか。そこで、彼は弟子を連れて、あまり遠くはないが人里離れた美しい岩山に行き、そこに聖火の爐を築きました。彼は一枚一枚めくって読誦し、鳥獣に聴かせて火中に投じました。弟子たちは涙を浮べて、それを眺めていました。しかし、彼は弟子たちのために、彼等が愛好した『ナラヴァーハナダッタ行状記』一千頌をのこしました。彼がこの神々しい物語を読誦しては燃やしていますと、鹿や猪や野牛などがのこらず彼の傍に集まって来て、周囲に環をなして、食物も摂らないで、眼に涙を浮べて耳を傾けて聴いたのでした。

かれこれしている間に、サータヴァーハナ王が病気になりました。侍医はこの病気が滋養分のない肉を食べたためであると申しました。そのことを非難された料理人たちは

「猟師たちがこのような肉をわれわれのところへ持って参るのです。」

と申しました。猟師たちにその訳を訊ねますと、

「ここからあまり遠くない山で、ひとりの婆羅門が一枚一枚読誦しては、それを火に投じています。動物たちはのこらずそこに集まり、食物を摂らずに、聴き惚れています。彼等は何処にも行きません。そのために、彼等は饑えていますので、肉に滋養分がないのです。」

と言いました。猟師たちの言葉を聴きますと、王は好奇心をおこし、彼等に案内させてグナーディヤのところへ行きました。そして、森に住んだために頭髪を振り乱したグナーディヤを見ました。その頭髪はあたかも消えのこった彼の呪詛の焔から出る煙のように見えました。涙を眼に浮べた動物たちの真中に彼が坐しているのを見まして、王は恭しく敬礼して仔細を訊ねました。そ

こで、博識なグナーディヤは鬼霊の言葉（パイシャーチー語）で、自分のプシュパダンタとしての経歴や呪詛を受けた次第や天上の物語の地上への降下について物語ったのでした。サータヴァーハナ王は彼がガナの権化であると知って、彼の足下にひれふし、シヴァ神の口から語られた神々しい物語を懇願しましたので、グナーディヤはサータヴァーハナ王にそれを物語りました。

「王よ、六千頌より成る六篇の物語は既に燃やしてしまった。ただ一千頌の物語一篇のみがのこっている。それを受取られたい。余の二人の弟子があなたにそれを説明するであろう。」と言って、王に別離を告げ、神通力によって自己の肉体を捨て、呪詛より解放されたグナーディヤは天上に於ける自分の住処に帰って行きました。

かくて、サータヴァーハナ王はグナーディヤがのこして行きました物語をたずさえて、自己の都城に帰りました。それは『ブリハット・カター』と謂われ、『ナラヴァーハナダッタ行状記』などを含んでいました。王はこの物語をつくりました詩仙グナーディヤの弟子のグナ・デーヴァとナンディ・デーヴァの二人に、土地、黄金、衣服、馬匹、住居、財宝などを授けました。そしてサータヴァーハナ王は、この二人と一緒にこの物語を再構し、この物語が最初に如何にしてパイシャーチー語で伝えられるに至ったかの由来を記すために、この「物語の玉座」と称する序章をつくりました。この物語は数多くの面白い物語を含むがために、その不思議な面白さに釣りこまれて、これを読む人々はそれが神々の物語であることを忘れるほどでありました。こうして、この物語はサータヴァーハナ王の都城に於いて喧伝せられ、三界に不滅の名声をかちうるに至りました。

黄金城物語

一

むかし、大地の装飾であるヴァルダマーナ*という都に、敵を苦しめ悩ますパローパカーリンという王がありました。あたかも雲が稲妻を帯びているように、この勝れた王にカナカ・プラバーという妃がありましたが、この王妃には稲妻のような移り気はありませんでした。時を経て、パローパカーリン王とカナカ・プラバー妃の間に女児が生れましたが、この王女はラクシュミー（幸運と美の女神）の容姿の誇りを粉砕するために創造主がつくりたもうたかのようでありました。父王は母の名に因んで王女にカナカ・レーカーと名づけましたが、次第に成長するにつれてカナカ・レーカーは人々の眼には月輪のように見えました。

カナカ・レーカーが成長して年頃になりましたとき、侍臣を遠ざけて独りでいました王の傍に王妃が近づきますと、王が王妃に語りました。

「妃よ、成人した娘を何時までも親の許に留めておくべきではないのに*、年ごろになったカナカ・レーカーのことを考えると、あの子に相応わしい結婚のことが気がかりで、わたしの心は苦しい。まこと、適当な頼りどころを得ない良家の子女は調子はずれの音楽のようなもので、他人の娘のことであっても耳にすれば、耳を悩まし煩わすものである。迷妄のために相応わしくない男に嫁がされた娘は、学問を受けるに相応わしくない人に授けられた学問のようである。そして、

名誉にならず、正法に適わず、ただ悲しみを増すのみである。従って、わたしは娘をどの王者に嫁がすべきであろうか。誰があの娘に相応わしいのであろうかと、妃よ、わたしは心配しているのだ。」

と、パローパカーリン王の言うのを聴きまして、カナカ・プラバーは微笑んで、このように申しました。

「あなたはそのように仰せられますけれども、娘は結婚を望んではいません。今日、あの娘が人形遊びをして、人形を子供に見たてて可愛がっていましたので、『姫よ、そなたの結婚式をわたしは何時見ることが出来るのでしょうね。』と、申しました。すると、わたしの言葉を聴くや否や、あの娘はわたしを非難するかのようにわたしに答えました。『母上さま、わたしを誰のところへもお嫁にやってはいけません。わたしが母上さまとお別れするとは約束づけられていません。わたしは娘のままで十分幸福です。そうでないと、わたしは死んでしまうと御承知になっていて下さい。これには理由があるのです。』あなた、娘からこのように言われまして、わたしはがっかりして、あなたのお傍にやって参りました。あの娘は結婚を拒んでいるのですから、花婿のことを話しましても、何の役に立ちましょう。」

と、妃から聴きまして、王は当惑してしまいました。そして、王女の部屋に行って、王女に言いました。

「神や阿修羅（あすら）の娘たちでさえ、夫を得たいと望んで苦行をするというのに、姫よ、そなたは何

故に夫を得るのを拒むのか。」

と、父の語る言葉を聴きまして、王女カナカ・レーカーは眼を地上に落して申しました。

「父上さま、わたしは今結婚を望んでいません。それですのに、父上は何故わたしの結婚をお望みになり、また何故にそのことを固執なさいますの。」

と、王女が言いますと、思慮のある人々の中でも特に思慮深いパローパカーリン王は、再び王女にこのように言いました。

「姫よ、娘を嫁がせないでいて、父親としてわたしはどうして罪障を消滅することが出来ようか*。それに、身内の者に頼るべき娘が自由に振舞うのは相応わしくない*。娘と言うものは他人のために生れたのであって、その故に守護せられるのだ。父親の家は娘にとっては幼少の時代を除いては不適当なのだ。夫の家こそ適当な場処なのだ。月厄のはじまった娘を嫁がせないとき、身内の者は地獄に墜ち、その娘はヴリシャリー*と言われ、たといその後に結婚しても、その夫はヴリシャリーの夫だと言われて、人から軽蔑されるのだ。」

と、父から言われますと、王女カナカ・レーカーは心の中で考えていたことを直ちに申しました。

「父上さま、婆羅門であれ刹帝利であれ、カナカ・プリー（黄金城）という都城を見ることに成功した人があれば、その人にわたしを嫁がせて下さい。その人がわたしの夫になるでしょう。父上さま、そういう人が見つからないかぎり、わたしを不当に責めないで下さい。」

と、王女がこのように申しましたので、王は考えました。

「兎に角、有難い。娘は結婚を条件つきだが承諾した。あの娘は何か訳があってわが家に生れた女神の誰かに相違ない。そうでなければ、まだ年若い娘がそのようなことを知っている筈がない。」

と考えました王は、王女の申出を承諾して、

「そなたの望み通りにしよう。」

と言って、王女の部屋を出て、その日の行事を果しました。

翌日、王は政庁に出御しますと、侍坐する人々に

「卿等のうちで誰か黄金城を見たものがあるか。婆羅門であれ、刹帝利であれ、それを見た者があれば、その者にカナカ・レーカーを与えて、太子とするであろう。」

と申しました。すると、そこに侍坐していました人々はみな互いに顔を見合せて、

「わたくしたちはそのような名を聞いたこともありませぬ。ましてや見た者などいる筈もありませぬ。」

と申しました。そこで、パローパカーリン王は侍衛を呼んで命令を与えました。

「行って、太鼓を鳴らして、全市に布告せよ。誰か黄金城を見た者があるか、探し出せ。」

と、王から命ぜられました侍衛は

「御意。」

と、言上して退出しました。退出しますと、直ちに衛兵に命じて、太鼓を鳴らして全市を巡廻さ

せ、その音で市民の好奇心を喚起しました。

「婆羅門にてあれ、刹帝利の若者にてあれ、黄金城を見たことのある者は遠慮なく申し出られよ。王はその者に王女と太子の位を授けらる。」

と、太鼓を鳴らしながら布告しましたので、都城のあちらこちらで市民は驚きました。

「今日この城内で告示せられている黄金城とは一体何だろうか。われわれの老人たちでさえ、聞いたこともなければ、見たこともない。」

と、市民たちはこの布告を聞いて語りました。そして、一人として誰も

「わたしが見ました。」

と言う者もありませんでした。

すると、バラ・デーヴァの子でシャクティ・デーヴァという、その都に住む一人の婆羅門がその布告を聞きました。この若者は不身持で、博奕にふけって忽ちに無一文になっていましたが、王女を嫁がせると聞いて、心を躍らせて考えました。

「博奕で一文無しになってしまった自分は、今では親父の家はおろか遊廓に上ることさえ出来ない。だから、一文も持たぬ自分は、偽って『わたしはその都を見ました。』と、太鼓を鳴らして布告している人々に言おう。未だ嘗て誰もその都を見たことがないから、誰も自分が黄金城を知らないことに気がつかないだろう。そうすれば、自分は或は王女と結婚するようになるかも知れぬ。」

と考えて、シャクティ・デーヴァは直ぐに衛兵たちのところに行き、偽って

「わたくしはその都を見ました。」

と、申したてました。衛兵たちは

「目出度い。では、直ぐ侍衛のところに行こう。」

と言って、シャクティ・デーヴァを侍衛のところへ連れて行きました。彼は侍衛にも同じように偽ってその都を見た旨を述べました。侍衛はシャクティ・デーヴァを歓迎して、王の前に連れて行きました。王の前でも、彼は臆せず、同じようにそのことを話しました。博奕に身を持ちくずした詐欺漢に出来ないことが何かありましょうか。王は真実を確かめるために、この婆羅門を王女カナカ・レーカーの許に遣わしました。王女は侍衛の口からそのことを聴き、シャクティ・デーヴァが近づきますと、

「あなたが黄金城を見られたのですか。」

と訊ねました。

「わたくしが学識を得るために世界を遍歴していましたとき、その都城を確かに見ました。」

と、シャクティ・デーヴァは王女に答えました。王女が更に

「あなたはどの途を経てそこに行きましたか。そして、そこはどんなでしたか。」

と訊ねますと、この婆羅門はこのように答えました。

「わたくしはこの地からハラプラ*という都城に行き、そこから更にヴァーラーナシー（現在のベナーレス）

に行きました。ヴァーラーナシーから日を経てパウンドラヴァルダナ*に赴き、その地からカナカ・プリー（黄金城）という都城に行きました。見ますると、その都城は所行正しき人々が善業の果報を楽しむ土地でありまして、神の眼を楽しませる輝かしきシャクラ・プリー（天帝インドラの都城スヴァルガ「天国」）さながらでありました。わたくしはその地で学識を会得しまして、程経てここに帰って参りました。わたくしが黄金城に行きました途は以上の通りでございますし、その都城のさまは今申し述べた通りでございました。」

と、このように詐欺漢の婆羅門シャクティ・デーヴァが言い終りますと、王女は微笑みながら

「おお、偉大なる婆羅門さま、あなたは確かにその都を御覧になりました。話して下さい。どの途を経てそこに行かれましたか、もう一度話して下さい。」

と言いました。この言葉を聴きますと、シャクティ・デーヴァは再び臆面もなく鉄面皮ぶりを発揮しましたが、そのとき王女は侍女たちに彼をつまみ出させました。シャクティ・デーヴァを追い払うて、王女が父王の許に行きますと、父王は

「あの婆羅門は何か真実を物語ったか。」

と訊ねました。すると、王女は

「父上さま、あなたは王者でありながら、考えのないことをなされます。悪漢が正直な人間を瞞すことを御存じではありませんの。あの婆羅門は虚偽を言って、わたしを瞞そうとしたのです。あの嘘つきは黄金城を見たことなど決してありません。この世には、数々の詐欺が悪漢によって

なされています。例えば、シヴァとマーダヴァの話を聴いて下さい。お話しましょう。」

と言いまして、次の物語を語りました。

〔悪漢シヴァとその仲間マーダヴァの物語〕

その意義に相応わしくラトナ・プラ（宝玉城）*という勝れた都城があります。そこに、シヴァとマーダヴァという二人の悪漢がいました。大勢の悪漢に取巻かれていたこの二人は、永い間奸策を用いて、その町の金持をのこらず欺き、横領してしまいました。そこで、ある日、この二人は互いに次のような相談をしました。

「われわれは今日までにこの町をすべて荒してしまった。だから、今からウッジャイニーに行って住もう。あの土地に王の司祭官でシャンカラ・スヴァーミンという大金持がいることを聞いているが、策を廻らしてこの人から金を捋り取って、マーラヴァの女たちの媚をしっぽりと楽しもうではないか。この人は七つの甕に一杯になるほどの財貨を持ちながら、お布施を貰っても顔を顰めて仲間には半分しかやらないので、婆羅門たちから守銭奴と言われているんだ。それに、この婆羅門には掌中の珠といつくしむ娘が一人あることが知られている。うまくゆけば、金銀もろとも、この娘さえも手に入れることが出来るだろう。」

と、決心をし、お互いに為すべき役割を相談して、シヴァとマーダヴァの二人の悪漢はその都城

を出発しました。ウッジャイニーに着きますと、マーダヴァは公子を装うて、伴の者を従えて、城外のある村落に逗留していました。しかし、あらゆる種類の詐欺に巧みなシヴァは修行者に変装して、一人でまず都城に這入りました。彼はシプラー河の岸に草庵を営み、その中に泥土、ダルバ草、乞食（こつじき）用の鉢及び鹿の皮を外から見えるように置きました。そして、翌朝、彼は濃厚な泥土を身体に塗りつけましたが、そのさまはあたかも彼が将来塗られるべき阿鼻地獄の泥土を予め験しに塗るかのようでありました。そして、彼は河水の中に飛びこんで、永い間顔を俯けていましたが、そのさまは彼が悪業の結果将来地獄に墜ちるのを予め稽古しているかのようでありました。水浴から上ると、彼は永い間顔を上向けていましたが、それはあたかも彼が柱の上で槍に突き刺されるのに適しているのを示すかのようでした。こうして、彼は神前に行き、クシャ草*の輪をつくり、祈禱文をつぶやきながら、蓮華座という姿勢で、猫を被った狡猾な顔をして坐っていました。そして、善人たちの心を虚偽で捉えるかのように、時々、彼は白い花を摘んでヴィシュヌ神に散華の供養をしました。供養を終えますと、彼は再び偽って経文を専心読誦しているさまを装い、三昧にふけるふりをして数々の悪事に心を傾けていました。

そして、次の日、シヴァは黒鹿の毛皮を着て、乞食（こつじき）しながら都城の中を歩きまわりましたが、それは悪事を企らむ横目をごまかすかのようでありました。棒を手に持ち鹿の毛皮を着た彼は沈黙の行をつづけながら、婆羅門の家から貰った三杯の食物を、あたかも真実を粉砕するかのように、三分しました。そして、その一つを鳥に与え、またその一つを賓客に与え、のこりで自分の

胃袋を満たしましたが、これこそ彼の詐欺の種でありました。彼は人目をごまかして永い間経文を誦しながら珠数をつまぐっていましたが、そのさまはさながら自身の罪悪のすべてを数えているかのようでした。そして、夜間にはひとりで草庵にいて、世間の人々の弱点を微細な点まで考えていました。このように、彼は佯わりの厳しい苦行を行じて、都城の住民たちの心を惹きつけました。そして、

「嗚呼、この人はまことに平静な苦行者だ。」

という噂が四方に拡がり、人々はのこらず彼に帰依するに至りました。

さて、話かわって、シヴァの仲間のマーダヴァは間諜の口からこのことを知って、彼もまた都に這入りました。マーダヴァは遠くの神殿の中に住居を定め、公子を装い、シプラー河の岸に水浴に赴きました。水浴を終って、従者を連れて帰る途中、シヴァが神前で読経に専念しているのを見まして、シヴァの足許にひれ伏し、

「この方のような苦行者はほかにない。この方が霊場を巡礼していられるのを、わたしは度々見た。」

と、マーダヴァは人々の前で言いました。シヴァはこの男がマーダヴァであることを認めましたが、人前を憚って、頸を動かさずにじっとしていました。そこで、マーダヴァは住居に帰りました。夜になると、彼等両名はある場処に落合って飲食し、今後なすべき仕事の手筈を相談しました。そして、その夜の明けがたに、シヴァは悠々と自分の草庵に帰りました。マーダヴァは夜が

明けると、部下の一人の悪漢に

「この一揃いの衣服を持って、王の司祭官シャンカラ・スヴァーミンの許に行き、贈物として差出し、『マーダヴァという公子が親族の者から逐われて、父の遺産を多額に持参して、南方から当地に参っています。他に数名の同じ境遇の公子を連れていまして、この土地で閣下の仕えられる国王陛下に仕官を希望しています。名声の宝庫たる方よ、閣下の御拝眉を得たいと存じまして、わたくしは使者として参上致しました。』と、お前は礼をつくして言え。」

と命じました。マーダヴァから使いに出されました悪漢は、贈物を持参して、かの司祭官の家に行きました。彼は司祭官に近づきますと、適当な機会を選んでひそかに贈物を差出し、マーダヴァの命じた通りに言いました。司祭官は贈物に対する貪欲心から、将来のことを打算して、その言葉を信用しました。まことに贈賄は貪欲な人々を惹きつける唯一の妙薬であります。こうして、この悪漢が帰って来ますと、マーダヴァはその翌日適当な頃を見計らって、司祭官に面会するために自ら出かけました。仲間の者たちも、王の近侍の地位を希望する公子を装い、権標を持って、マーダヴァに随行しました。前触れさせていましたので、マーダヴァが司祭官を訪問しますと、司祭官は彼の訪問を喜び歓迎しました。こうして、マーダヴァは司祭官と暫くの間歓談したのち、挨拶をして自分の住居に帰りました。

次の日、マーダヴァは再び一揃いの衣服を贈物として贈り、再び司祭官の許に赴いて、

「われわれは扈従の者たちを喜ばせるために、仕官したいと願っています。ですから、あなた

さまにお縋りしました。それに、わたくしには財産だけしかないのです。」

と言いました。この言葉を聴きますと、司祭官は彼から何かを貰うことが出来ると思って、マーダヴァに彼の希望を適えようと約束しました。そして、司祭官は直ちに王のところへ行って、その旨を奏上しました。王は司祭官に対する尊敬の念から、彼の懇願を聴許しました。そして、その翌日、司祭官はマーダヴァと扈従の者たちを連れて、勿体ぶって王に会わせました。王は公子に似た姿をしたマーダヴァを見て、慇懃に彼を迎え、彼の知行を定めました。こうして、マーダヴァは王に仕えていましたが、毎夜シヴァと会って相談をしました。司祭官は貪欲から贈物に執心していましたので、

「わたしの邸にお住みなさい。」

と、マーダヴァに慫慂しましたので、マーダヴァは扈従の者たちと一緒に司祭官の家に寄寓しました。マーダヴァ等の寄寓は、あたかもマドグ*が樹木の幹を倒すように、司祭官の邸にとっては破滅の原因でありました。マーダヴァは贋の紅玉でつくった装飾品の満ちた宝石筐をこしらえて司祭官の宝庫に預けました。そして、時々その筐を開いては、装飾品を巧妙に半分ずつ見せて、あたかも草で家畜を釣るように、司祭官の心を捉えました。こうして、司祭官の信頼をかちえますと、マーダヴァは食事を次第に少くして身体を痩せさせ、病気のふりをしました。そして、幾日かが過ぎますと、この悪党の王者は彼の寝床の傍にいました司祭官に弱々しい声で言いました。

「兎に角、わたしの身体の状態は惨めです。ですから、勝れた婆羅門よ、わたしの今生及び後

生の安楽のために全財産を贈ることの出来るような勝れた婆羅門の方を誰かここにお連れして下さい。人間の生命は不常でありますゆえ、賢人は財宝にどのような関心を持ちましょうか。」
と、マーダヴァが言いますと、贈物に執心した司祭官が
「そのようにしましょう。」
と、答えましたので、彼は司祭官の足許に平伏しました。そこで、司祭官は次々に婆羅門を幾人も連れて来ましたが、誰を連れて来てもマーダヴァは一層勝れた婆羅門を希望している風を装うて、どの婆羅門にも信頼しませんでした。それを見て、マーダヴァの寝床の傍に附添うていました一人の悪漢がこう申しました。
「兎に角、普通の婆羅門ではこの人は喜ばないようです。ですから、シヴァという大苦行者がシプラー河の岸にいますが、この婆羅門がこの人を喜ばせるかどうかお確かめになって下さい。」
と言うのを聞きまして、マーダヴァは訴えるように司祭官に言いました。
「嗚呼、どうかその方を連れて来て下さい。あの方のような婆羅門はほかにありませんから。」
と、マーダヴァから言われました司祭官は、そこでシヴァのところへ行って、瞑想にふけっている風をして動かずにいる彼の姿を見ました。司祭官が彼の周囲を右遶して、彼の面前に坐りますと、そのときかの悪漢は静かに眼を開きました。司祭官はそこで彼を礼拝し、平伏して申しました。
「主よ、お怒りなくば、懇願申上げたく存じます。」

と、司祭官の言うのを聴きますと、シヴァが唇を開いて承諾の合図をしましたので、司祭官はシヴァにこのように言いました。
「この地に南方出身のマーダヴァという非常に富裕な公子が住んでおります。この人は今病気で、財産をすべて譲りたいと願っています。もしあなたさまが御承諾下さるならば、彼は極めて高価な数々の宝玉でつくられた輝かしい装飾品をすべてあなたさまに差上げるでありましょう。」
と言いますと、シヴァは沈黙を破って、
「婆羅門よ、乞食している梵行者であるわたしに、財宝は何の意義がありましょう。」
と、静かに言いました。そこで司祭官は再び彼に申しました。
「そのように仰せられるなかれ、偉大な婆羅門よ。あなたは四住期*の次第を御存知ではない。妻を娶り、家にあって神を祀り、祖先に供養し、客を歓待し、家長たる者は財産を費して、人生の三目的*を達成するのです。まこと、家長の時期は四住期の中で最も勝れたものです。」
と言いますと、シヴァは申しました。
「わたしは何処から妻を迎えることが出来ようか。わたしは普通の家からは妻を迎えたくないのだから。」
と、シヴァの言うのを聞きまして、貪欲な司祭官はシヴァが財宝を貰いさえすれば、それを思うままに自由に出来ると考えて、機会を見てシヴァに言いました。
「わたしにヴィナヤ・ヴァーシニーという未婚の娘がいます。非常な美人ですが、この娘をあ

なたに差上げましょう。あなたがマーダヴァから財宝を贈られましたならば、わたしが預ってあげましょう。そして、あなたは家長期を楽しくお暮しなさい。」

と、司祭官が言うのを聞きますと、シヴァは所期の目的を達しましたので、

「婆羅門よ、あなたがそのようにせよと飽くまで言われるのならば、わたしはあなたの言葉に従いましょう。しかし、わたしは苦行者で、黄金や宝玉のことについては何も知りません。ですから、あなたの言葉の通りに致しましょう。」

と申しました。シヴァのこの言葉を聴きますと、この愚かな司祭官は大いに喜び、

「よろしゅうございます。」

と言って、シヴァを自分の家に連れ帰りました。こうして、司祭官はシヴァ（「吉祥なる者」の意）という不吉な男を自分の家に入れて、一部始終をマーダヴァに物語り、彼の賞讃を受けました。そして、直ちに、苦労して育て上げた娘をシヴァに嫁がせましたが、それはあたかも自己の繁栄を愚かさのために捨て去ったかのようでした。そして、結婚式が終って三日目に、贈物を受けようと、シヴァを連れて、病気を伴っているマーダヴァの傍に行きました。マーダヴァは起上って、

「われらの考えも及ばざる苦行をなされたあなたに敬意を表し奉る。」

と言いながら、シヴァの足許に平伏しました。そして、数多くの贋の紅玉でつくった装飾品の筐を宝庫から持参させて、掟に従ってシヴァに贈りました。シヴァはそれを受取りますと、

「わたしには判らない。あなたこそ御存知だ。」

と言って、それを司祭官の手に渡しました。

「このことは以前にお約束したところです。あなたは何の御心配もいりません。」

と言って、司祭官は直ちにそれを受取りました。シヴァが祝福の祈りを述べて自分の妻の部屋に行きますと、司祭官は預った筐を持って行って自分の宝庫にしまいこみました。

さて、その翌日になりますと、マーダヴァは仮病を次第に止めて、偉大な布施の威力で病気が治まった、と言いました。そして、司祭官が傍に来ましたとき、

「わたしがこの不幸を切り抜けられたのは、あなたの真実の友情のお蔭です。」

と、彼を賞讃しました。そして、

「わたしの身体が救われたのは、あの方の御威光によるものです。」

と言って、シヴァと公然と友情を結びました。幾日かが経ちますと、シヴァが司祭官に

「何時までも、こうして、あなたの邸に世話になってもいられますまい。あなたは何故に幾許かの金であの装飾品を買い取られないのですか。もしあれが非常に価値のあるものでしたならば、それ相当の金額をわたしに下さい。」

と言いました。この言葉を聴きますと、司祭官はそれが測り知れないほどに価値のあるものと考えて、シヴァの申出に同意し、その代償として自分の全財産をシヴァに与えました。そして、売買の証拠として、シヴァに自筆で受取書を書かせ、またその財宝は自分の払った金額以上に価値があると思って、自分も受取書をつくりました。互いに書付を受取って分れたのち、司祭官と別

居したシヴァは別のところに家を営みました。かくして、シヴァとマーダヴァの二人は同居して、司祭官から奪った財産を食いつくしながら、思うままに放埓な生活を送っていました。

そして、日を経て、現金の必要になった司祭官は装飾品の中の一つを市場で売るために町に出かけました。宝石鑑定の知識を持っている商人たちは、それを検べて、

「ああ、この贋物を誰がつくったか知りませんが、なかなか智慧があります。と申しますのは、これは硝子と石英の破片でつくられ、色々な色で染められていて、真鍮でつなぎ合わせたものです。宝石も、黄金も、全然ありません。」

と申しました。この言葉を聞きますと、司祭官は狼狽し、直ちに家に帰って装飾品をすべて持参して、商人たちに見せました。彼等はそれを見まして、そのすべてが同様に贋物であると言いましたので、その言葉を聴きました司祭官はあたかも稲妻にうたれたような思いをしました。そこで、この馬鹿者は直ぐにシヴァのところへ行って、

「お前の装飾品を返すから受取れ。わたしの財産を返せ。」

と言いました。すると、シヴァは

「どうして今日まで財産をのこしておくものか。これまでにのこらず俺は家で費ってしまったよ。」

と答えました。かくて、司祭官とシヴァの二人は互に争いながら、マーダヴァが傍に侍坐する国王のところに行きました。司祭官は

「陛下、硝子と石英の破片でつくり、真鍮でつなぎ合わせ、巧妙に色づけをした贋の装飾品を、何も知らないわたしに摑ませて、シヴァはわたしの財産を食いつくしてしまいました。」

と、王に奏上しました。そこで、シヴァが申しました。

「陛下、わたくしは幼少のときから苦行者でありました。この人が熱心に慫慂しましたので、わたくしは贈物を受けました。そのとき、世間のことにうといわたくしではございましたが、『わたくしは宝石などについては何の知識もないから、あなたが頼りです。』と、申しますと、『その点については、わたしがいますから。』と、彼は確約しました。そして、わたくしは贈物を受けますと、それをすべて彼の手に委ねました。そして、彼はそれを、陛下、自分から現金で買い取りました。そして、二人は自筆の受取書を交しました。今こそ、陛下のお力添えを賜わりとう存じます。」

と、シヴァが言い終りますと、マーダヴァが司祭官に向って言いました。

「そのようなことを仰言ってはいけません。あなたは尊敬すべき方です。この問題について、わたしに何の罪がありましょうか。わたしは貴方からも、またシヴァからも、何も貰っていません。父から受継いだ財産を、わたしは永い間他処に預けて置きました。そして、あのとき、それを持って来て、婆羅門に贈ったのです。もしそれが本当の黄金でなく、また真の宝玉でないならば、真鍮、石英および硝子を贈与したことによって、わたしは報いを受けるでしょう。贈与の際にわたしが真面目な心であったことは、わたしが重病から恢復したことから、明らかです。」

と、マーダヴァが顔色も変えずに言いますと、王は大臣たちと一緒に大笑いをし、そして彼の言うことに満足しまして、

「マーダヴァにも、シヴァにも、何等不正はない。」

と、政庁にいました人々は笑いころげながら申しました。かくて、司祭官は財産を奪われ、恥をかかされて、引き退りました。まことに、あまりにも貪慾のために理性を盲目にすることは、あらゆる災難の原因ではないでしょうか。こうして、シヴァとマーダヴァの二人の悪漢は、満悦した王の寵愛を受けて、永くその地で幸福に暮しました。

「このように、悪漢は地上に於ける漁夫のように、あれこれと数百の糸を繰り、舌の網をひろげて、人間たちを罠にかけて生活をしています。ですから、父上さま、あの婆羅門は偽って、黄金城を見たかのように申立て、あなたを誑して妾を得ようと望んでいるのです。そういう訳ですから、妾の結婚をお焦りにならないで下さい。妾は暫くの間娘のままでいます。わたしたちは何がおこるかを見ていましょう。」

と、王女カナカ・レーカーから言われますと、パローパカーリン王はそのとき王女にこのように答えました。

「姫よ、年頃になった娘が何時までも結婚しないでいることは、よくないことです。何故なら、悪人どもは美点を嫉んで、偽って欠点を言い立てるからです。そして、世間の人は勝れた人の特

質に汚点をつけるのを喜ぶものです。この点について、ハラ・スヴァーミンの物語を聴きなさい。それをお前に話して上げよう。」

〔中傷された苦行者ハラ・スヴァーミンの物語〕

ガンジス河の辺に、クスマ・プラ*という都城があります。その地に、ハラ・スヴァーミンという苦行者がいて、霊場の巡拝を念願していました。この婆羅門はガンジス河の岸に草庵をつくって、食を乞うて生活していましたが、激しい苦行によって世間の人々の非常な尊敬を受けました。ある日、ハラ・スヴァーミンの徳を嫉んだ一人の悪人が、乞食に出かけた彼の姿を遠くから見て、人々の間で

「あの苦行者がどういう似而非行者か諸君は知っているかね。あの男はこの都城の子供たちをみな食ったのだ。」

と言いました。この言葉を聴いて、同じような別の悪人も

「それは本当だ。人々がそう言っているのを、わたしは聞いた。」

と言いました。すると、もう一人の男がそれを確認して、

「その通りだ。」

と言いました。悪人の言葉の連鎖は善良な人々の非難を結び合わせました。そして、この噂は次

第に耳から耳へ伝わり、都城の中の到るところに拡がってゆきました。すると、都城の人々はみな

「ハラ・スヴァーミンは子供たちを連れて行って、のこらず食うのだ。」

と、子供たちを無理に家の中に閉じこめてしまいました。そこで、その地の婆羅門たちは子孫の絶滅を怖れ、会合して、ハラ・スヴァーミンを都城から追放することを相談しました。しかし、『あの男は怒って、われわれを食べるかも知れぬ。』という恐怖から、彼等は一人として彼に近づいて言うことが出来ませんでしたので、使者を派遣しました。使者たちはハラ・スヴァーミンのところへ行って、遠くの方から彼に

「婆羅門の方々はあなたに『われわれの都城から出て行って頂きたい。』と、申しています。」

と言いました。彼が驚いて、

「何故。」

と言いますと、彼等は再び

「あなたはここで子供を見ると食べています。」

と、ハラ・スヴァーミンに言いました。ハラ・スヴァーミンはこの言葉を聞いて、それを自分で確かめようと思い、婆羅門たちに近づきますと、人々は彼を怖れて逃げ去りました。婆羅門たちも彼の姿を見るや否や怖れて、塔の上に登ってしまいました。噂のために瞞された人々は一般に判断することが出来ません。そこで、ハラ・スヴァーミンは塔の下に立って、上にいる婆羅門た

ちを一人一人呼んで、

「婆羅門たちよ、これはまた何という誤解だ。誰の子供を、何処で、幾人わたしが食べたというのか。諸君たちは何故お互いに検べて見ないのか。」

と言いました。その言葉を聞きますと、婆羅門たちは互いに検べ合って、皆の人々の子供たちがすべて無事息災でいるのに気がつきました。また、そのことを検べることを命ぜられた市民たちも次第にその通りであることを認めましたので、商人たちも、婆羅門も、みなともどもに言いました。

「嗚呼、われわれは誑されて、誤って正しい人を中傷してしまった。皆の者の子供たちは生きている。誰の子供をあの人が食ったと言うのか。」

と、皆の者が言いますと、冤罪を雪いだハラ・スヴァーミンは悪人が惹きおこした中傷の言葉に嫌気を抱くようになり、都城を立去ろうとしました。弁別の力のない人の住む醜悪な土地に、賢明な人々は如何なる喜びを見出すでしょうか。そこで、商人たちも、婆羅門たちも、ハラ・スヴァーミンの足許に平伏して懇願しましたので、彼は漸くのことでその土地に留まる決心をしました。

「このように、悪人たちは一般に善人の善行を見ると、憎しみをこめたお喋りにまかせて、偽って善人に罪を転嫁するものである。まして、善人に少しでも隙を見つけたならば、悪人たちは

燃えた火に多量の油の雨を注ぎかけるのである。その故に、愛する姫よ、もしそなたがわたしの心にささった矢を抜こうと思うならば、そなたの現在の若々しさが輝いているとき、自分のためだけで何時までも嫁がずにいて、悪人どもの中傷を得易い状態にいることはよくない。」

と、父王から度々言われましたけれども、堅く決心をした王女カナカ・レーカーは

「婆羅門であれ、刹帝利であれ、黄金城を見た人を早く探して、その人に妾を嫁がせて下さい、と申しましたではございませんか。」

と、繰返し申しました。この言葉を聞きますと、王は王女が前生を思い出して決心していると考え、また王女の望む夫を得るためにほかに手段のないことを覚りました。そして、黄金城を見たと言って新らしくやって来る人を探すために、その後毎日国内で絶えず太鼓を鳴らして、再び布告することを命じました。そして、到るところで太鼓を鳴らしては、絶えず

「婆羅門であれ、刹帝利であれ、まこと黄金城を見た人は名乗り出でられよ。王はその人に太子の位とともに王女を授けられる。」

と、宣示しましたけれども、黄金城を見たという人は一人として見つけられませんでした。

二

話かわって、婆羅門シャクティ・デーヴァは卑しい心の持主でしたけれども、恋い慕う王女か

ら辱かしめられて、考えました。

「偽って黄金城を見たと言って、自分はひどく辱かしめられた。しかも、王女を得ることは出来なかった。だから、王女を得るためには、その都を見るか自分の命が無くなるまで、世界を遍歴すべきである。まこと、かの都城を見て帰り、その成功の褒美として王女を得ないかぎり、生命など何の役に立つだろうか。」

と、誓いを立てて、婆羅門シャクティ・デーヴァはヴァルダマーナ城から出発して、南方に向いました。次第に進んで、彼はヴィンディヤ山の大森林に到着して、遠大で達成し難い彼自身の願望のように通過し難い広大な森に這入りました。森の中では、太陽の光線の塊に熱せられた彼を、風にそよぐ樹の若葉が煽ぐかのようでした。大勢の盗賊に荒される苦悩の声をあげるかのように、獅子などの猛獣に殺される獣の叫び声が夜となく昼となくこだましていました。素晴らしく巨大な湖水の蜃気楼が其処彼処に現われて、湖水があるのかと暑熱にあえぐ人々を騙しましたが、それは太陽の激しい熱を征服しようとしているかのようでした。ヴィンディヤ山の森林の中には、湖水は何処にもありませんでしたが、災難は到る処にありました。そして、森林は行けども尽きることなく、果しなく拡がっていました。

幾日かの間長い旅をしましたシャクティ・デーヴァは、寂寞とした地点に、清冽な水を湛えた大きな湖のあるのを見つけました。その湖には、高くささげた傘蓋のような蓮が生い繁り、白く輝くチャーマラ*にも似た白鳥が泳ぎまわり、あたかも一切の湖水の王者であるかのようでありま

した。この湖で沐浴などの斎戒を終えましたとき、シャクティ・デーヴァは湖の北岸の辺に、果物の実った美しい樹木の繁った聖庵を見つけました。そして、そこのアシュヴァッタ樹の根元には、苦行者に囲まれて、スールヤ・タパスという老齢の聖仙が坐していました。聖仙は、珠の一つ一つが彼の百歳の寿を数える結び目のように見える珠数を、老齢のために白く光る耳の尖にかけて、光り輝いていました。シャクティ・デーヴァが恭しく礼をして聖仙に近づきますと、聖仙は彼を賓客の礼で迎えました。聖仙は彼に果物などを饗応して、

「あなたは何処から来られたか。また、何処へ行かれるか。お話しなさい。」

と訊ねました。シャクティ・デーヴァは恭しく身を屈めて、

「わたくしはヴァルダマーナ城から参りました。そして、誓いを立てて、黄金城へ行きたいと念じています。しかし、それが何処にあるか、存じておりませぬ。尊者よ、もし御存知ならば、何卒お教え下さい。」

と、聖仙に申しました。すると、

「愛児よ、余はこの庵に八百年の歳月を過したが、まだそのような都城のことを聞いたことはない。」

と、聖仙が言いましたので、シャクティ・デーヴァは落胆して、

「世界を遍歴しようとするわたくしですが、ここで死にます。」

と、再び申しました。すると、漸くにしてその本心を覚りました聖仙は

「そなたがそれほどに堅く決心をしているのであれば、わたしの言う通りにせよ。ここから三百由旬のところに、カームピリヤ*という土地がある。その地にウッタラと称する山があり、其処に庵がある。その庵に余の長兄のディールガ・タパスという者が住んでいる。彼のところに行くがよい。彼は老齢であるゆえ、恐らくその都城を知っているであろう。」

と言いました。この言葉を聴きまして希望の生じましたシャクティ・デーヴァは

「そう致します。」

と言って、その夜をこの聖庵で過し、翌朝急いで出発しました。彼は幾百という森林を越えて、長途の旅に疲れ果て、漸くにしてカームピリヤ国に到着し、ウッタラ山に登りました。彼はそこにディールガ・タパス仙が庵を結んでいるのを見まして大いに喜び、聖仙に恭しく近づきますと、聖仙は彼を鄭重に迎えました。シャクティ・デーヴァが

「わたくしは王女から言われました黄金城に赴く途中であります。しかし、尊者よ、わたくしはその都城が何処にあるか存じません。でも、わたくしはそこに行かねばなりません。そこで、その地へ行くことが出来るようにと、スールヤ・タパス仙がわたくしをあなたさまの許にお遣わしになりました。」

と言いますと、聖仙はシャクティ・デーヴァに言いました。

「わが子よ、わたしはこのように老齢であるが、そのような都城は今日はじめて聞いた。わたしは外国から来た多くの旅行者と知合いになったが、未だ嘗てそのような都城のことを聞いたこ

とはない。ましてや、わたしが見たことはあろう筈はない。だが、それが何処か遠方の島にあることは必定じゃ。愛児よ、わたしはそなたに策を授けよう。大海の真中にウットスタラ*という島があり、そこにサティヤ・ヴラタという富裕なニシャーダ王*がいる。この王は諸方の島に往来している故に、その都城を見たことがあるか、或は聞いているに相違ない。されば、まず、海岸にあるヴィタンカ・プラ*という都に行くがよい。そして、目的達成のために、そこから誰か商人と乗船して、ニシャーダ王のいるところへ行け。」

と、聖仙が言いましたので、シャクティ・デーヴァは直ちに

「そのように致します。」

と言って、聖仙に別れを告げて、その庵から出発しました。幾多の土地を過ぎ、幾クローシャ*かの距離を踏破して、シャクティ・デーヴァは漸くにして海岸の勝れた装飾であるヴィタンカ・プラに到着しました。彼はその地でウットスタラに往来するサムドラ・ダッタという商人を探し出し、この人と友人になりました。彼はこの商人の船に乗せてもらい、その親切によって航海中の食糧も与えられて、航海の旅に出ました。すると、あまり進まないうちに、突然に真黒な入道雲が湧きおこり、蔓草の舌のような稲妻を閃かせて、雷が轟きはじめました。そして、怖ろしい暴風が吹きはじめ、運命の女神さながらに軽い物を吹き飛ばし、重い物を覆えしました。また、風にあおられて大波が海面に騒ぎ立ち、翼のある山が安住の場処を侵されて怒り狂うに似ていました。そして、船は一瞬高く上ると、次の瞬間には波の底へと、あたかも金持の浮沈のように、

揺られました。商人たちの叫び声を満載した重さのために砕けたかのように、船は忽ちに砕けて顚覆してしまいました。船が沈没すると、その船主のサムドラ・ダッタは海中に放り出されましたが、板にすがって永い間漂流し他の船に救われました。シャクティ・デーヴァは大きく口を開いた大魚に呑まれましたが、身体の何処にも怪我をしませんでした。この魚は大海を自由に遊弋して、たまたまそのときウットスタラ島の近くに行きました。そこでは、漁夫の王サティヤ・ヴラタの召使たちがシャパラ（小魚の一種）をとっていましたが、彼等が偶然にもこの大魚を捕えました。漁夫たちは魚が非常に大きいのを自慢して、直ぐにそれを引きずって自分たちの王のところへ行きました。サティヤ・ヴラタもその巨大なのを見て好奇心をおこし、召使たちにそれを剖くように命じました。彼等がこの大魚を剖きますと、その腹から、胎児として母の胎内にいたのにつづいて、奇しくも二度目の胎内居住を経験しましたシャクティ・デーヴァが生きたまま出てきました*。漁夫の王サティヤ・ヴラタは魚の胎内から若者が現われて、彼に挨拶の言葉を述べましたので、驚いて

「あなたはどなたですか。何処から来られましたか。何故に魚の胎内に居られましたか。婆羅門よ、あなたが経験された運命は、また何という不可思議なことでしょう。」

と訊ねました。この言葉を聞きますと、シャクティ・デーヴァは漁夫の王に答えました。

「わたくしはヴァルダマーナの都から来ましたシャクティ・デーヴァという婆羅門です。わたくしは黄金城にどうしても行かねばならないのですが、それが何処にあるか知りませんので、ず

っと以前から永い間世界を遍歴していました。ディールガ・タパス仙の言葉から黄金城が島にあることを知り、その位置を知るためにウットスタラ島に住む漁夫の王サティヤ・ヴラタの許に赴く途中、船が難破してわたくしは水中に沈み、魚に呑まれて、今ここに着いたのです。」

と、シャクティ・デーヴァが言いますと、サティヤ・ヴラタ王が語りました。

「わたしがそのサティヤ・ヴラタです。そして、この島があなたの探していられる島です。わたしは多くの島を見ましたが、そういう都城を見たことはありません。しかし、あなたが見つけたいと望んでいられる都城が遠くの島にあるということは聞いています。」

と、サティヤ・ヴラタ王が言いますと、シャクティ・デーヴァが落胆しましたので、それを見て、客に対する親切心から王は再び言葉をつづけました。

「婆羅門よ、決して落胆せられるな。あなたは今夜ここに宿られよ。明朝、あなたの希望のために、何か手段をお授けしよう。」

と、漁夫の王から慰められ、案内されて婆羅門の僧院に赴きました。婆羅門シャクティ・デーヴァは客人として歓待されました。彼はそこに住むヴィシュヌ・ダッタという一人の婆羅門から食物を供せられ、この人と歓談しました。歓談していました間に、訊ねられるままにシャクティ・デーヴァは自分の生国や家柄や自分の経験してきましたことをつつまず話しました。ヴィシュヌ・ダッタはそれを聞きますと、忽ちに彼を抱きしめ、喜びの涙に咽びながら、はっきりしない言葉で言いました。

「何という奇縁だ。あなたはわたしの母方の叔父の息子だ。あなたはわたしと生国は同じだ。わたしは嘗て若いときに郷里を出てここに来たのです。だから、ここに逗留していなさい。間もなく、他の島から商人がやって来て、色々と聞き知ることが出来て、あなたの希望は遂げられるでしょう。」

と言って、ヴィシュヌ・ダッタは自分の素姓を述べて、色々と心づくしを尽してシャクティ・デーヴァをもてなしました。シャクティ・デーヴァも非常に喜び、旅の疲れも忘れました。異郷に於いて親族の者に遭うことは、沙漠に於いて甘露の泉に出遭うのと同じであるからです。そして、シャクティ・デーヴァは自分の希望の達成は近いと考えました。と言いますのは、途中に於ける幸運は事業の成功を示すものであるからです。こうして、シャクティ・デーヴァが臥床に横たわって、希望の成就を念じて睡らずにいますと、傍にいましたヴィシュヌ・ダッタは彼を元気づけ、また悦ばすために、次の物語を話しました。

〔ヴィディヤーダラとなった兄弟の物語〕

むかし、カーリンディー河（ヤムナー河の別名）の岸にある大きな拝領地に、ゴーヴィンダ・スヴァーミンという偉い婆羅門が住んでいました。この有徳な人に、アショーカ・ダッタとヴィジャヤ・ダッタという父親に似た二人の息子が相ついで生れました。彼等は平穏にその地に住んでいましたが、

程経て怖ろしい飢饉が襲来しましたので、ゴーヴィンダ・スヴァーミンが妻に言いました。

「飢饉の災害によって、この土地は兎も角荒廃してしまった。わたしは友人や親族の者たちの困窮を見るに忍びない。彼等に誰がどれだけの物を与えることが出来ようか。だから、われわれの手許にある食物を友人や親族に頒ち与えて、われわれはこの土地を離れよう。そして、家の者たちを連れて、ヴァーラーナシー（現在のベナーレス）に行って、その土地で住むことにしよう。」

と言って、妻の同意を得ましたので、自分たちの食物を友人親族に頒ち与え、妻子召使を連れて、ゴーヴィンダ・スヴァーミンは拝領地から出発しました。気高い心の持主は自己の親族の不運を見るに忍びないからです。その途中、半月を頂くシヴァ神のように髑髏を冠り、灰を白く全身に塗り、髪を束ねたシヴァ行者を見ました。ゴーヴィンダ・スヴァーミンは子供に対する愛情からこの賢者に近づき、恭しく礼をして、二人の子供の吉凶を訊ねますと、行者が彼に語りました。

「あなたの二人の息子の将来の運命は目出度い。しかし、婆羅門よ、あなたは次子のヴィジャヤ・ダッタと別離するであろう。そして、兄のアショーカ・ダッタの力によって、あなたがたは再会するであろう。」

と、賢者から言われましたゴーヴィンダ・スヴァーミンは喜びと悲しみと奇異の念に心が迷いましたが、行者に別れて出発しました。ヴァーラーナシーに到着しますと、彼は城外のチャンディカー女神（シヴァ神の妃ドゥルガーの別名）の神殿で女神に生贄をささげるなどの神事を行って、その日を送りました。夕方になりますと、家族とともに、外国から来た巡礼者たちの仲間に加わって、神殿の外の大樹

の下に宿りました。夜になって、長途の旅行に疲れて、皆の者が敷きつめた葉など旅行者が常に用いる寝床に横たわって睡っていますと、目を覚ましました次子のヴィジャヤ・ダッタが突然に悪感の発作を起しました。その発作のために、彼の頭髪が逆立ちましたが、それは近く彼が身内の者と別れるのを怖れたためであるかのようでありました。悪感に堪えかねて、ヴィジャヤ・ダッタは父を起して、

「父上、今、悪感の発作がおこって、とても苦しいのです。ですから、薪を持ってきて火を燃やして寒くないようにして下さい。そうでないと、寒気はとても納まりそうもありませんし、今夜を過せそうもありません。」

と、言いました。この言葉を聞きますと、ゴーヴィンダ・スヴァーミンはヴィジャヤ・ダッタの苦悩に心を痛めながら、

「坊や、今、何処から火を持って来ることが出来ようか。」

と、言いました。すると、息子が

「父上、近くで火の燃えているのが確かにここから見えます。あの火は非常に大きそうです。あそこに行って、身体を暖めてはいけませんか。ですから、震えるわたしの手をひいて、早くあそこへ連れて行って下さい。」

と言いましたので、この婆羅門は再び言いました。

「あれは焼屍場だよ。屍体を焼く火が燃えているのだよ。だから、ピシャーチャ（悪魔の一）などの

怖ろしいものがいるあそこに、子供のお前がどうして行けよう。」

と、愛情深い父親の言葉を聞きますと、勇敢なヴィジャヤ・ダッタは決然と言いました。

「父上、ピシャーチャなどの卑しい輩がわたしに何をすることが出来ましょう。わたしは臆病者でしょうか。ですから、何も心配なさらないで、わたしをあそこへ連れて行って下さい。」

と、執拗に言いましたので、父はヴィジャヤ・ダッタを連れてそこに行きました。子供は身体を暖めながら薪に近づいて行きました。燃えさかる薪は湧き上る煙が乱れた髪のように、人間の肉を食いつくすさまは、屍を焼く薪を支配する羅刹の化身さながらでした。すると、子供は忽ちに元気づいて、父親に

「薪の中に見える円いものは何ですか。」

と訊ねました。傍に立っていました父は

「坊や、薪の中で燃えているのは人間の髑髏だよ。」

と答えました。すると、子は向うみずにも尖端が燃えている棒で、その髑髏を叩き割りました。脳髄が迸り出て彼の口に這入りましたが、あたかも彼を羅刹たらしめるために焼屍場の火が彼にそれを授けたかのようでありました。脳髄を嘗めた途端に子供の頭髪が逆立ち、焔から引抜いた剣を持ち、歯を剝き出した羅刹となりました。彼は髑髏を薪の間から引きずり出しては脳髄を飲み、骨にまつわる火焔のように揺れ動く舌で嘗めました。それから彼は髑髏を捨てて、剣を振りあげて、自分の父のゴーヴィンダ・スヴァーミンを殺そうとしました。そのとき、

「カパーラ・スポータ（「髑髏を割る者」の意）よ、おお神よ、汝の父を殺すなかれ。ここに来れ。」

と、焼屍場から声が聞えて来ました。この声を聞きますと、羅刹となりました子のヴィジャヤ・ダッタはカパーラ・スポータという名を得て、父をその場にのこして姿を消しました。父のゴーヴィンダ・スヴァーミンは

「ああ、坊や。ああ、好い子よ。ああ、ああ、ヴィジャヤ・ダッタよ。」

と、大声で泣きながら其処を立去りました。そして、チャンディカー女神の神殿に帰ってきまして、翌朝一部始終を妻と長男のアショーカ・ダッタに語りました。こうして、ゴーヴィンダ・スヴァーミンは家族の者たちとともに、雲間から閃く稲妻のように、突然に悲しみの火に襲われて、嘆き悲しみました。ヴァーラーナシーに住む人も、女神を詣でに来た人も、彼のところに来まして、心から彼の悲しみに同情しました。

兎角する間に、たまたま女神の参詣に来ましたサムドラ・ダッタという大商人がゴーヴィンダ・スヴァーミンのこのような有様を見ました。この善良な商人は婆羅門ゴーヴィンダ・スヴァーミンのところへやって来まして慰め、直ちに妻子眷族とともに彼を自分の家に連れ帰り、水浴などの数々の接待をしてもてなしました。困窮した者に同情することは、偉大な人々の本性であるからです。ゴーヴィンダ・スヴァーミンも彼の妻も漸く正気を取戻し、嘗て偉大な行者の語った言葉を憶い出して、次子ヴィジャヤ・ダッタとの再会を願っていました。その後、ゴーヴィンダ・スヴァーミンは慫慂せられるままに、この富裕な商人の家に留まり、ヴァーラーナシーに住みま

した。

ゴーヴィンダ・スヴァーミンのもう一人の息子アショーカ・ダッタは、その地で青年となり、学問を修めたのみでなく、角技をも習得しました。彼は次第にこの技に長じ、遂にはこの世に於いて彼に勝つ敵手は無いほどになりました。あるとき、祭典の余興に闘技が行われ、南方から一人の有名な大力士が参加しました。この力士はヴァーラーナシー王プラターパ・ムクタの面前で、王のお抱え力士をのこらず負かしてしまいましたので、有名なアショーカ・ダッタを商人サムドラ・ダッタの家から召して、この力士との角力を命じました。この力士はアショーカ・ダッタの腕を摑んで角力をはじめましたが、アショーカ・ダッタは相手の腕を摑んだままはたきこみました。そのとき、相手の大力士が倒れたときにおこった音は、あたかも土俵がアショーカ・ダッタの勝利を喜んで万歳のどよめきを挙げたかのようでありました。王は非常に喜び、アショーカ・ダッタに宝玉をあまた与え、またその膂力を知りましたので、自身の親衛としました。アショーカ・ダッタは王の寵臣となり、日とともに立身出世しました。勇敢な行為の人にとって、美点を弁別する力のある王者はまこと宝庫であります。

さて、ある月の十四日に、プラターパ・ムクタ王は城外の遠方の町にある華麗な堂舎に祀られているシヴァ神に参詣するために出御しました。そして、参詣を終えて、夜間に焼屍場の傍を通って帰っていますと、その中から

「首席裁判官はわたくしに対する憎悪からわたくしを死刑に処すべき旨を宣告し、わたくしが

誤って刺殺されてから三日経ちました。王よ、わたくしは悪事をしたのではありません。そのために今に至るも尚わたくしの生命は絶えません。ですから、わたくしは喉が渇いて仕方がありません。どうか、わたくしに水を授け与えられるようにお命じになって下さい。」

という声が聞えてきました。王はこの言葉を聞きますと、憐愍の心から近侍のアショーカ・ダッタに

「あの男に水を遣れ。」

と命じました。アショーカ・ダッタは

「陛下、夜分に誰が彼処に行くことが出来ましょうか。わたくしだけが行きます。」

と言いまして、水を持って出かけました。そして、王が都城に向けて出発しますと、勇士アショーカ・ダッタはあたりが真暗闇につつまれて這入り難い焼屍場の中に足を踏み入れました。そこには、夕方の供物の人肉が豺のために食い荒されて散らばっていましたし、其処彼処には屍体を焼く火が燃えさかり、その光にあたりは照らし出され、怖ろしいヴェーターラの（死体に憑く鬼霊）拍つ掌の音が響き渡って、そのさまは真黒な夜の神の宮殿さながらでありました。

「王に水を懇請したのは誰ですか。」

と、アショーカ・ダッタが大声で叫びますと、一隅から

「お願いしたのはわたくしです。」

という声が聞えてきました。アショーカ・ダッタがその声を辿って、その近くの燃えている薪の

ところへ行きますと、一人の男が死刑柱の尖に突きさされているのが見えました。しかも、その下には、まだ見たこともないほどに容姿の勝れた女が美しい飾りをつけたまま泣きくずれているのが見えました。その女は月光の輝いた夜が黒分となって月が没したので、屍を焼く薪に登るために来たかのようでありました。

「貴女はどなたですか、お女中。貴女は何故にここで泣いていられるのですか。」

と、アショーカ・ダッタが訊ねますと、その女が申しました。

「わたしは不運な女で、あの串刺しの刑に処せられた男の妻です。わたしはあの人と一緒に薪の上に登ろうと堅く決心して、ここにいます。そして、生命があの人の身体から出て行くのを暫くの間待っているのでございます。今日でもう三日にもなりますのに、生命がまだあの人から出て行ってしまわないのです。度々水を欲しがりますので、わたしはそれを持って来ましたのですが、死刑柱が高いので口まで届かないのです。」

と、その女が言うのを聴きまして、豪胆な英雄は

「ここに王から遣わされた水があります。ですから、わたしの背に上って、この水をあの人の口に飲ませてやりなさい。困っているときには、夫以外の男に触れるだけならば、女にとっては汚辱ではありません。」

と言いました。女は同意して、水を持って、死刑柱の根元に蹲ったアショーカ・ダッタの背に両足で立ち上りました。すると、間もなく、突然に血が地上と彼の背に滴って来ましたので、この

勇士は顔を挙げて見ました。すると、その女が死刑柱の尖端に突き刺った男の肉を小刀で切り取っては食べていました。アショーカ・ダッタはこの女が魔女であると思い、引きずり下ろして大地に叩きつけようと、足飾りが音を立てている女の足を摑みました。女は即坐に足を投げ捨てて、魔力によって素早く天に飛び上り、何処かに姿を消してしまいました。そして、その足から落ちた宝石造りの足飾りだけがアショーカ・ダッタの手の中にのこりました。アショーカ・ダッタは女が最初には美しく、中ごろには下賤な所行をして、そして終りには兇悪な人間と一つになったかのように怖ろしい姿となって忽然と消えてしまったことを考え、また手の中にのこされた神々しい足飾りを見て、驚き困惑するとともに悦んだのでした。彼は焼屍場を出て、足飾りを持って自分の家に帰り、朝になると水浴をして王宮に行きました。王が

「死刑柱に串刺しになっている男に水を与えたか。」

と訊ねましたので、アショーカ・ダッタは

「仰せの通りに致しました。」

と答えて、足飾りを差出しました。王が

「それを何処で手に入れたのか。」

と訊ねましたので、彼は奇異で怖ろしい夜の冒険を、一部始終、王に物語りました。王はアショーカ・ダッタの勇気が他に比類のないことを考えて満足するとともに、彼の性質が他よりも勝れていることを殊のほか悦びました。王はアショーカ・ダッタの献上しました足飾りを嘉納します

と、自ら王妃のところに行ってそれを贈り、アショーカ・ダッタがそれを入手しました次第を王妃に物語りました。王妃はその話を聴き、また宝玉製の足飾りを見まして非常に悦び、アショーカ・ダッタを誉めちぎりました。そこで、王が王妃に申しました。

「妃よ、家柄も、学識のあることも、誠実なことも、また容姿の勝れていることも、あの男は他の勝れた人々より一層勝れている。アショーカ・ダッタが娘のマダナ・レーカーの夫になってくれるならば、まことに悦ばしいことであると、わたしは考えている。これらの徳をこそ婿に望むべきであって、瞬時に消え去る財産を望むべきではない。だから、わたしはこの勇士に娘を嫁がせたいのだ。」

という夫の言葉を聴きますと、王妃は恭しく申しました。

「それはまことに結構なことです。あの若者は娘の夫に相応わしうございます。それに、娘はあの人を春の庭園で垣間見て心を惹かれ、暫くの間は放心して見ることも聞くこともしませんでした。そのことを侍女から聞き、妾は心配で夜も睡られませんでしたが、朝がた近くうとうととしましたとき、ある天女が夢の中に現われまして、妾に『愛児よ、マダナ・レーカーをアショーカ・ダッタ以外の男に嫁がせてはならない。そなたの娘は前生に於いてあの男の妻であったのであるから。』と、申されました。この言葉を聞きました途端に眼が覚めましたので、妾は直ぐに娘のところに行って、娘を慰めてやりました。そして、あなたはそのことを御自分から申されました。ですから、春の蔓草が樹木にからみつくように、娘をあの人に添わせてやりましょう。」

と、愛する妃が申しましたので、王は非常に悦び、大饗宴を催して、アショーカ・ダッタに王女マダナ・レーカーを嫁がせました。そして、王女と偉大な婆羅門の息子との結婚は、あたかも繁栄と謙譲との結合のように、相互の光耀を増したのでありました。

こうして、ある日、王妃はアショーカ・ダッタが持って帰りました宝玉製の足飾りを王に見せて言いました。

「あなた、この足飾りは一つだけでは映えません。これと対をなすものを一つつくらせて下さい。」

と、王妃の言うのを聴きまして、王は金細工師などにこの足飾りに似た別のものをつくるように命じました。彼等はそれを審に検べまして、

「陛下、これに似た別のものをつくるのは不可能であります。と申しますのは、これは天上の技術でつくられたものでありまして、人間業ではありません。このように沢山の宝玉は地上にはございません。ですから、これを手に入れられました処で、別のものをお探しなされませ。」

と言上しました。この言葉を聴きまして、王も王妃も落胆してしまいました。傍に侍坐していましたアショーカ・ダッタが、それを見ますと即坐に

「わたくしがこの足飾りの片方を持って帰りましょう。」

と申しました。アショーカ・ダッタがこのように誓言しますと、王は彼の向う見ずに驚き、娘婿に対する愛情から思い止まるように説得しましたが、彼は決心を翻えしませんでした。そして、

黒分の十四日の晩に、その足飾りを持って、嘗てそれを得た焼屍場に再び行きました。そこでは、屍を焼く薪の物凄い煙に燻された樹木の太い枝の根元にはぐるりと人間が鎖で倒にかけられ、羅刹が満ち溢れていました。アショーカ・ダッタは勇を鼓して焼屍場の中に這入りましたが、嘗て見かけた女の姿は見えませんでした。そのとき、彼は足飾りを得るための唯一の手段として、人間の肉を売ることに思いつきました。彼は早速に鎖を解いて樹から死体を引下ろし、

「人間の肉を売ります。買って下さい。」

と、大声で呼ばわりながら焼屍場の中を歩き廻りました。すると、忽ちに、一人の女が

「勇士よ、それを持ったままで、兎も角妾と一緒に来て下さい。」

と、遠くから彼に声をかけました。その言葉を聞きましたアショーカ・ダッタは、その申出に同意して女に従って行きますと、沙漠の中で蓮華を見るかのように、このような場処で見かけようとは思いもよらないような神々しい姿の女性が、宝玉の装飾品もきらびやかに、侍女たちに侍ずかれ、玉座に坐って樹下にいるのを見ました。アショーカ・ダッタが女に案内せられて、樹下の玉座に憩うている女性に近づき、

「人間の肉を売っております。どうぞお買い下さい。」

と申しました。

「おお、豪胆な方よ、幾らでそれをお売りになりますか。」

と、神々しい姿の美女が訊ねました。そこで、勇士は死体を担いだままで、手に持っていました

宝玉の足飾りの片方を見せて、

「この足飾りと同じ別のものを下さる人に肉を差上げます。もしあなたがそれをお持ちならば、この肉をお受取り下さい。」

と言いました。この言葉を聴きますと、その女性は言いました。

「わたしはこの足飾りの片方を持っています。これはあなたがわたしから奪った足飾りだからです。わたしはあなたが嘗て死刑柱で刺殺された男の傍で見られたあの女なのです。今日は姿を変えていますので、あなたにはお判りになりません。肉などは要りません。もしあなたが妾の申上げる通りにして下さるならば、この足飾りと対をなす片方をあなたに差上げましょう。」

と言われました勇士は、その言葉に同意し、

「あなたの仰言ることをすべてわたしは直ちに実行しましょう。」

と言いました。そこで、かの神々しい女性は自分の希望をのこらずアショーカ・ダッタに語りました。

「雪山の頂に、勇士よ、トゥリガンタという都城があります。その都にラムバ・ジフヴァという豪勇な羅刹王がいました。わたしはその妻でヴィデュト・シカーと言いまして、思いのままに姿を変えることが出来ます。わたしの夫は娘のヴィデュト・プラバーが生れますと間もなく、カパーラ・スポータ王の面前で戦死しました。王はそれを嘉せられて、御自分の都城をわたしに下さいましたので、わたしは今そこで娘と幸福に暮しています。娘は今日では成長して年頃になり

ましたので、わたしの心は娘に勇敢な夫を迎えたいという考えで一杯でした。そして、あの十四日の晩に、わたしはここにいまして、あなたが王と一緒にあの道を通って来られるのを見ました。『この勝れた若者は勇士で、わたしの娘の夫に相応わしい人だ。だから、あの人を得るために、何か策略を用うべきだ。』と考えまして、刑死した男の声を真似て水を請い、わたしはあなたを瞞して焼屍場の中にあなたを引張りこんだのです。わたしは魔力によって姿などを変え、また偽りのことを述べて、僅かの間ではありましたが、あなたを瞞すことが出来ました。そして、あなたを再び誘き寄せるために、その鎖として、わざと足飾りを捨て去ったのです。今日、こうしてわたしはあなたと会うことが出来ました。ですから、わたしの家に行って、娘と結婚して、もう一つの足飾りを受取って下さい。」

と、羅刹女から言われましたアショーカ・ダッタは彼女の言葉に同意しました。英雄アショーカ・ダッタは彼女に連れられ、その神通力によって天空を飛んで都城トゥリガンタに赴きました。あたかも日輪が天空の旅行に疲れて停滞しているかのように、黄金に輝く都城が雪山の頂に見られました。アショーカ・ダッタはヴィデュト・プラバーという羅刹の王女と結婚しましたが、彼女は彼自身の勇気の偉大な成功が化身したかのようでありました。アショーカ・ダッタはそこに留まって、妻の母の財産を享受しながら、暫くの間愛する妻と幸福に暮していました。

さて、あるとき、アショーカ・ダッタが姑に言いました。

「わたしは一度ヴァーラーナシーの都に帰らねばなりませぬゆえ、足飾りを下さい。と申しま

すのは、嘗て王に貴女から貰いました足飾りと美しさを競う別の足飾りを持って帰ると約束したからです。」

と、アショーカ・ダッタが言いますと、姑は彼に片方の足飾りを与え、更に黄金の蓮華を与えました。この二つの品を受取りましたアショーカ・ダッタは必ず再び帰って来ると約束しまして、その都城を出発しました。彼の姑はその魔力によって空中を飛び、彼を再びあの焼屍場に送り届けました。彼女はそこの樹木の下に下り立って、

「わたしは何時でも黒分の十四日にここに来ています。ですから、その夜にあなたがここへ来さえすれば、わたしがこの榕樹の下にいるのが判りましょう。」

と、アショーカ・ダッタに言いました。彼はその夜に再び来ることを約束し、羅刹女と別れて、まず父の家に帰りました。突然に帰って来ましたアショーカ・ダッタは、次子のヴィジャヤ・ダッタと別れて悲しんでいました上に彼がいなくなって悲しみを二重にしていました両親をこの上なく喜ばせましたが、舅のプラタープ・ムクタ王も彼の帰って来たことを知って、そこにやって来ました。王はアショーカ・ダッタのように豪胆な人に触れるのを怖れているかのように、喜びのあまりに身体中の毛髪を莢のように逆立てて、前に膝まずくアショーカ・ダッタを永い間抱きしめて、再会の喜びに浸りました。アショーカ・ダッタは王に随いて王宮に這入りましたが、彼はあたかも喜びが化身したかのようでありました。そして、天上の足飾りを二つ揃えて王に献上しましたが、その触れ合って鳴る音は彼の勲功を賞讃しているかのようでありました。また、彼

は王に美しい黄金の蓮華をも献上しましたが、それは羅刹の宝庫を支配する吉祥の女神の手から捥ぎ取られた女神愛玩の蓮華さながらでした。王と王妃が好奇心からアショーカ・ダッタに訊ねますと、彼は自分の冒険を一部始終物語って、彼等の耳を娯しませました。王は

「アショーカ・ダッタが述べた素晴らしい行為はわれわれの心を驚嘆させずに措かなかったが、かかる輝かしい名声は豪胆を発揮しないでどうしてかちえられようか。」

と語りましたが、一対の足飾りを得ました王妃と一緒に、このような女婿を得て、自分たちの人生に於いて為すべきことは成就したと考えました。アショーカ・ダッタの帰還を祝う大饗宴の音楽の音は王宮内に響き渡り、彼の徳を讃えるかのようでありました。

次の日、王は自ら建立した神殿に黄金の蓮華を華麗な銀器に載せて献納しました。器と蓮華の二つは銀色と金色に輝き、王の栄光とアショーカ・ダッタの威光とを象徴するかのようでした。シヴァ神の信者である王は、このように輝く二つのものを見て、信心の喜悦につつまれて、歓喜に眼を瞠らせて申しました。

「ああ、この銀器に黄金の蓮華をのせて光り輝くさまは、赤褐色の髪をたばねて身体に白く灰を塗ったシヴァ神さながらだ。もしこのような黄金の蓮華がもう一つあれば、ここにあるもう一つの器に載せることが出来るであろうに。」

と、王が言う言葉を聞きまして、アショーカ・ダッタが

「陛下、わたくしが別の蓮華を持って参りましょう。」

と申しました。この言葉を聴きますと、王は

「別の蓮華など要らない。そなたの豪胆はもう止めにして貰いたい。」

と、アショーカ・ダッタに答えました。

そして、幾日かが過ぎ、アショーカ・ダッタが黄金の蓮華を持って来たいと望んでいますうちに、黒分の十四日が再び廻って来ました。天上の湖に咲き誇る黄金の蓮華とも言うべき太陽が、黄金の蓮華を希求する彼の望を知って、それを怖れるかのように西方の山に没し、紫黒の夜のとばりが肉を食うて傲りたかぶる羅刹のように、肉にも見まごうばかりに赤く映える夕方の雲を呑みつくして忽ちにあたりに拡がり行き、明滅する燈火が夜間に徘徊する羅刹女の開いた怖ろしい口の中に見え隠れする歯列にも似て美しく物凄く瞬く頃、妻の王女が睡りますと、アショーカ・ダッタは自ら宮殿を出て、再びかの焼屍場に出かけました。そこの榕樹の下に、姑の羅刹女が来ていて、彼を鄭重に迎えていました。若者アショーカ・ダッタは姑に連れられて、再び妻の待ちわびる雪山の頂にある家に行きました。彼はそこで暫くの間妻と暮しましたが、あるとき姑に

「何処かで黄金の蓮華をもう一つ入手して頂けませんでしょうか。」

と言いました。この言葉を聴きまして、姑が彼に言いました。

「黄金の蓮華をもう一つと言われましても、それをどうして入手することが出来ましょう。われわれの王カパーラ・スポータの園池に、そのような蓮華が生えているのです。王はその池から一本の蓮華を取って、親愛の情からわたしの夫に授けられたのです。」

と、姑が答えますと、アショーカ・ダッタは
「その池から黄金の蓮華を貰うために、わたしをそこへ連れて行って下さい。」
と、姑に頼みました。
「そこには羅刹が守護していますので、到底そこへは行けないのです。」
と、姑から思い留まるように言われましたけれども、アショーカ・ダッタは執拗に頼みました。
こうして、アショーカ・ダッタは漸くにして姑を説き伏せて連れて行って貰い、高山の渓谷にある天上の湖水を遥かに眺めました。湖水には、いつも太陽の光線を浴びているために太陽の光を吸収したかのように金色に輝く、高い茎の蓮華が一面に繁茂していました。アショーカ・ダッタがそこへ行って蓮華を折り取っていますと、そこを守護している怖ろしい羅刹が彼を止めようとしました。彼が武器をふるうて幾人かの羅刹を殺しますと、他の者は逃げて王のカパーラ・スポータにそのことを告げました。羅刹の王はそのことを知りますと、大いに怒って自ら出かけて、アショーカ・ダッタが蓮華を奪ったのを見ました。しかし、その瞬間に、王は
「何だって！ わたしの兄のアショーカ・ダッタがここへ来たのではないか。」
と覚って、驚きました。そこで、王は武器を捨てて、喜びの涙を眼に溢らせて急いで走り寄り、アショーカ・ダッタの足許に膝まずいて語りました。
「わたしはあなたの弟のヴィジャヤ・ダッタです。わたしたち二人は有徳の婆羅門ゴーヴィンダ・スヴァーミンの子です。わたしは運命によって御覧の通りに羅刹に生れ変り、永い間こうし

ていました。屍を焼く薪の上の髑髏を砕いて脳髄を飲んだために、カパーラ・スポータ（「髑髏を砕く者」の意）と呼ばれています。あなたにお目にかかって、わたしは婆羅門の生れであることを思い出し、迷妄のためにわたしの心を曇らせていました羅刹の本性は消え失せました。」
と、ヴィジャヤ・ダッタが語るのを聴きまして、アショーカ・ダッタは弟を抱きしめて喜びの涙を流しましたが、涙の滴りは羅刹の本性で汚されていました弟の身体を洗い清めるかのようでありました。そのとき、プラジュナプティ*呪法に通暁したカウシカというヴィディヤーダラ族の尊師が天から降臨して、彼等二人の兄弟に言いました。
「そなたたちはすべてヴィディヤーダラである。呪詛のためにこの境遇に墜ちたのである。今こそ、そなたたちすべての者の呪詛は終った。されば、そなたたちはそなたたちが本来所持すべきこの神通力（ヴィディヤー）を受けて、身内の者たちとともにそれを捧持せよ（ダラ）。そなたたちは身内の者たちとともに本来の住居に帰れ。」
と宣うて、尊師は彼等にプラジュナプティ呪法を授けて、天に昇って行きました。
アショーカ・ダッタとヴィジャヤ・ダッタの二人は迷妄から覚めてヴィディヤーダラとなり、黄金の蓮華を手にして、天空を駆って雪山の頂に帰りました。アショーカ・ダッタが愛する羅刹の王女に近づきますと、彼女にかけられていました呪詛も解け、彼女もヴィディヤーダラとなりました。兄弟二人は美しい眼をした彼女を伴うて、天空を飛んで忽ちにヴァーラーナシーに帰りました。彼等が両親に近づきますと、別離の火にさいなまれていました両親に、忽ちに兄弟の出

現という甘露の雨を注ぎかけたのでした。彼等二人は肉体を変えることはありませんでしたけれども、このような不思議な転生を経て、今ここに帰って来て、両親を悦ばせたばかりでなく、世間の人々をさえ悦ばせました。ヴィジャヤ・ダッタは久し振りに父の胸をしっかりと抱きしめたのでしたが、同時に父の望みを十分に満足させたのでした。すると、アショーカ・ダッタの舅のプラターパ・ムクタ王も彼の帰ってきたことを知って、喜びのあまりにそこへ来ました。アショーカ・ダッタは王に迎えられて、身内の者たちと一緒に、愛する妻の待ち焦れている王宮に這入りましたので、王宮は歓喜に湧き立ちました。彼が王に沢山の黄金の蓮華を献上しますと、望んでいたよりも多く得た王は大喜びでした。

そこで、奇異の念と好奇心を持ちましたゴーヴィンダ・スヴァーミンは、満座の中でヴィジャヤ・ダッタに

「倅よ、あの夜、焼屍場でそなたが羅刹となって以来、どんなことをしたのか、一部始終を話して貰いたい。」

と、訊ねました。そこで、ヴィジャヤ・ダッタが父に話しました。

「父上、運命に引きずられて無法な考えをおこし、わたくしが薪の上で燃えている髑髏を叩き割り、脳髄が口に這入りましたためにわたしの心は乱れ、あなたが御覧になりました通りわたくしは羅刹になってしまいました。それから、他の羅刹たちに呼び寄せられ、カパーラ・スポータという名をつけられ、彼等の仲間に加わりました。彼等に案内せられて遂に羅刹王の許に行きま

すと、王はわたくしを見るや否や非常に満悦せられて、わたくしを将軍に任命しました。あるとき、羅刹王は傲慢のあまりにガンダルヴァ*を襲撃し、その戦闘で敵軍のために殺されました。部下の者たちは直ちにわたくしの命令に服従しましたので、わたくしは羅刹の王位につき、その都城に君臨していました。そこへ、突然に、黄金の蓮華を求めて兄上のアショーカ・ダッタが来られ、兄上を見ました途端にわたくしのこの境遇は終ったのであります。わたくしたちの呪詛が解けましたことによって、わたくしたちが自身の神通力を取り戻しました次第は、兄上がすべてお話し申上げましょう。」

と、このようにヴィジャヤ・ダッタが話しますと、アショーカ・ダッタがそのときその因縁を最初から物語りました。

「嘗てわれわれはヴィディヤーダラでありましたが、ガーラヴァ仙の庵の近くでガンジス河で水浴をする聖仙の娘たちを天上から見ました。われわれは忽ちに彼女等に恋しましたが、彼女たちもまた同じ思いでありました。この秘密は神のように洞察力のある彼女たちの親族の者の知るところとなり、彼等は怒ってわれわれに呪詛をかけました。『悪事をなす汝等両人は人間の腹に生れよ。而して、汝等は奇妙なる別離をなすべし。但し、人間の到達し得ざる遠隔の地に近づける一人を見て、他の一人がその誰なるかを知るとき、ヴィディヤーダラ族の尊師より神通力を得て、汝等は再びヴィディヤーダラとなり、自己の親族と再会するを得ん。』と、聖仙たちから呪詛されましたわれわれは、この世に生れ、そしてあのように別れましたが、そのすべては御存知の

通りです。そして、この度、蓮華を取りに姑の神通力によって羅刹王の都に行き、この弟に会いましたのです。そして、そこで、プラジュナプティ呪法に通暁されたカウシカ仙から神通力を得て、忽ちにヴィディヤーダラとなり、急遽ここに帰って参りました次第です。」

と、アショーカ・ダッタが語りました。そして、この奇異な冒険の勇士は呪詛の暗黒から脱出したことを悦び、両親と愛する王女とに自らの数々の神通力を授けましたので、彼等の心は忽ちに覚め、彼等もヴィディヤーダラとなりました。

こうして、幸福を得ましたアショーカ・ダッタは舅のプラターパ・ムクタ王と別れ、両親を連れ、二人の妻を伴い、弟とともに、天空を飛翔して、ヴィディヤーダラ族の覇王の宮殿に急行しました。覇王に謁えて、その命令によって自らはアショーカ・ヴェーガと称し、弟のヴィジャヤ・ダッタはヴィジャヤ・ヴェーガという名を得ました。ヴィディヤーダラ族の勝れた若者となりました兄弟は、身内の者を連れてゴーヴィンダ・クータという名山に赴き、そこに住みました。

ヴァーラーナシー王プラターパ・ムクタは奇異の念に感激して、一本の黄金の蓮華を第二の器に載せて自分の神殿に奉納し、アショーカ・ダッタが贈りました爾余の黄金の蓮華でシヴァ神を祀り、親族の者の栄光を寿ぎ、自分の家は何不足なく幸運であると喜びました。

「このように、天上の人々はある理由で化身して人間世界に生れ、その身に具った徳と勇気とで得難い成就を達成するものです。ですから、あなたも必ずや神界の一人で、あなたの希望せられることは成就すると思います。偉大な人々によっても為し難い所行を敢て為そうとするのは、特に勝れた本性を物語るものです。また、あなたの恋せられる王女カナカ・レーカーも確かに天上の人です。無邪気な子供なら別として、どうして黄金城を見た夫を望みましょうや。」

と、ヴィシュヌ・ダッタからひそかに面白く長い物語を聴きまして、シャクティ・デーヴァは心中深く黄金城を見ることを熱望すると同時に、また黄金城を見ようと堅く決心して、その夜を過しました。

三

その翌朝、ウットスタラ島の僧院に宿りましたシャクティ・デーヴァの許に、漁夫の王サティヤ・ヴラタが来ました。そして、約束した通り、彼に申しました。

「婆羅門よ、あなたの希望の達成のために、わたしは方法を考えました。大海の真中に、ラトナ・クータ*という勝れた島があります。そこに、海神の建立しました尊きヴィシュヌ神の神殿があります。アーシャーダ月（六月から七月に至る）の白分の十二日に、そこで祭典が行われ、行列の行進があります。島の人々は参詣のために競ってそこへ出かけます。誰かが黄金城を知っているかも知れません。ですから、そこへ参りましょう。その祭日も間近いのですから。」

と、サティヤ・ヴラタ王の語るのを聴きまして、シャクティ・デーヴァは大喜びで同意し、ヴィ

シュヌ・ダッタの調えました旅の食糧を受取りました。

こうして、シャクティ・デーヴァはサティヤ・ヴラタ王の用意した船に乗り、王と一緒に急遽海路を出発しました。島に似た怪物*のいるなど奇怪なことの住居である大海を渡っていました途中でシャクティ・デーヴァが舵手を務めているサティヤ・ヴラタに

「ここから遠くの方に、海中に見える巨大なものは何ですか。あれは思いのままに海中から翼を上げている山のように見えるが。」

と訊ねますと、サティヤ・ヴラタが

「あれは神聖な榕樹で、あの下には海下の世界への入口である巨大な渦巻があると言われています。そして、われわれは彼処を避けて進まねばなりません。と申しますのは、あの渦巻の中に巻きこまれた者は二度と再び還って来たことがないからです。」

と言いました。サティヤ・ヴラタがこのように言っていました間に、船は潮の流れに流されて、その方向に進んでいました。それを見ますと、サティヤ・ヴラタがシャクティ・デーヴァに再び言いました。

「婆羅門よ、われわれの破滅のときが到頭やって来た。御覧なさい、船は突然にその方向に流れて行きます。今それを止めることはわたしにはどうしても出来ません。あたかも死の口のような深い渦巻の中に、力強い業(ごう)*にも似て、海がわれわれを引きずりこむからです。誰の肉体でも永劫につづく訳ではないのですから、わたしにとっては死ぬことは何でもありません。しかし、あ

なたの願望が今日までの艱難辛苦を無にしてここに至って挫折するのは、何としてもわたしには苦痛です。ですから、わたしがこの船を一瞬引き止めている間に、あの榕樹の枝に急いで飛びつきなさい。生きて居れば、今後為すべきことについて、また何等かの方便もありましょう。運命の気まぐれと海の波とを誰が算定することが出来ましょう。」

と、豪胆なサティヤ・ヴラタが言っています中に、船は樹の近くに近づきました。その瞬間、シャクティ・デーヴァは大胆に飛んで、海の榕樹の拡がった枝を掴みました。しかし、サティヤ・ヴラタの肉体は他人に提供した船もろともに海底界の入口である渦巻の中に吸いこまれてしまいました。シャクティ・デーヴァはあたり一面を被うている大樹の枝に擱まりましたけれども、失望落胆して考えました。

「最早黄金城を見ることも出来ず、人里離れた処で死なねばならぬ。その上、漁夫の王さえも殺してしまった。しかし、万人の頭上にいつも足を踏んまえている運命の女神に誰が反抗し得ようか。」

と、この若い婆羅門が樹上でそのときに相応わしく色々と思い廻していました間に、その日も暮れかかりました。夕方になりますと、四方からその榕樹に兀鷹に類する大鳥が多く集まってきました。その声は四方に響き渡り、その広い翼で激しくあおられた海の波は、これらの鳥に対する親愛の情から彼等を歓迎して湧き上がるかのようでありました。そこで、シャクティ・デーヴァは葉の繁みの中に隠れて、鳥たちが互いに人間の声で喋り合うのに耳を傾けました。ある鳥は遠

くの島、ある島は遠くの山、そしてある島は遠方の土地と、その日に飛び廻った場処のことを、それぞれに話し合っていました。すると、その中の一羽の年老いた鳥が申しました。

「わたしは今日遊山のために黄金城へ行った。そして、明日も安楽に一日を送るためにそこへ行くのだ。遠くへ飛んで行って疲れるのだから、それ位のことがなければ行けないよ。」

と言う甘露の驟雨にも似た鳥の言葉を聞きまして、シャクティ・デーヴァの苦悩は忽ちに消え失せました。彼は

「万歳、かの都城は実在するのだ。そこへ行く手段が授けられた。この巨大な鳥が乗せて行ってくれる。」

と考えまして、その鳥が睡っている隙に静かに近寄って、その翼の羽毛の中に隠れました。翌朝、他の鳥たちが諸方に飛び立って行きますと、その鳥は運命の神さながらに不思議にもシャクティ・デーヴァに幸いして、隠れひそんだ彼を背に乗せたまま羽搏きして遊山のために再び黄金城に向って飛び立ち、忽ちにそこに着きました。*

黄金城に着きますと、鳥は遊苑の中に下りましたので、シャクティ・デーヴァはひそかにその背から降り、その傍を急いで離れました。そして、シャクティ・デーヴァが遊苑の中を歩き廻っていますと、二人の女が花を摘んでいるのを見ました。静かに彼女たちに近づいて、彼が突然に現われたのに驚く彼女たちに、

「ここは何処ですか。麗わしい方々よ、あなたがたはどなたですか。」

と訊ねました。

「ここは黄金城と申します都で、ヴィディヤーダラ族の住処です。友よ、ここにチャンドラ・プラバーと言われるヴィディヤーダラ族の女王がいられます。わたしたちはその方のこの遊苑の番人で、その方のために花を摘んでいるのでございます。」

と、二人の女は彼に答えました。そこで、この若い婆羅門が

「では、あなたがたの御主人にお目にかかれるようにして下さい。」

と申しました。この言葉を聞きますと、二人の女は同意して、この若者をその都城の王宮に案内して行きました。シャクティ・デーヴァが王宮に到着して見ますと、諸々の繁栄の逢曳の場処さながらに、宝玉の柱が立ち並び、黄金の壁が張りめぐらされていました。彼が到着しましたのを見まして侍臣たちはチャンドラ・プラバーの許に行って、人間の不思議な到着を告げました。チャンドラ・プラバーは侍従に命じてシャクティ・デーヴァを直ちに自分の部屋に案内させました。女王の部屋に這入りましたシャクティ・デーヴァは眼の饗宴とも言うべき美しいチャンドラ・プラバーを見ましたが、彼女はまこと創造主の不可思議な創造力の化身さながらでありました。彼が近づかないうちに、女王は華麗な宝玉の玉座から立上って、彼を恭しく迎えましたが、シャクティ・デーヴァの姿を見て、見とれてしまいました。シャクティ・デーヴァが席に着きますと、女王は訊ねました。

「福徳ある方よ、あなたは一体どなたですか。人間の到着することの不可能なこの土地に、あ

なたはどうして来られましたのですか。」

と、チャンドラ・プラバーが好奇心をおこして訊ねますと、シャクティ・デーヴァは自分の生国、素姓、名前を申述べ、この黄金城を見た褒賞として王女カナカ・レーカーを得るためにこの土地に来た次第を物語りました。その言葉を聴きますと、チャンドラ・プラバーは溜息をついて暫くの間考えこんでいましたが、人々を退けてシャクティ・デーヴァに申しました。

「どうかお聴き下さい。あなたに少しお話し申上げましょう。幸運な方よ。この土地にシャシカンダというヴィディヤーダラの王がいます。この王にわたしたち四人の娘が次第に生れました。わたしは長女で、チャンドラ・プラバーと申します。次がチャンドラ・レーカーと言います。三女がシャシ・レーカーで、四女がシャシ・プラバーです。わたしたちは父の許で次第に成人しました。あるとき、わたしが月厄でいましたときに、三人の妹は水浴をしに一緒にガンジス河に出かけました。そこで、若い人の無遠慮さから水遊びをはじめまして、そのとき水中に居られましたアグリヤ・タパスという聖仙に水をかけてしまいました。怒られました聖仙は、執拗に水をかけ合う妹たちを呪詛せられて『お前等性悪な娘たちよ、お前等はすべて人間界に生れよ。』と、宣言せられました。わたしたちの父はそれを知りますと、行って聖仙を宥慰しましたので、大仙は妹たちの一人一人に呪詛の終るときを語られ、人間の状態にあっても神通力の助けによって生れを思い出すことの出来るように指示せられました。こうして、妹たちが姿を変えて人間の世界に行ってしまいますと、父は悲しみのあまりわたしにこの都を譲って、森林に隠棲しました。そして、わたしがここに住んでいますと、アンビカー女神（シヴァ神妃 ドゥルガー）が夢の中で、『娘よ、人間がそなたの夫となるであろう。』と、お告げになりました。こういう訳で、父は多くのヴィディヤーダラ族の求婚者を勧めましたけれども、わたしはそれを拒んで、今日まで処女のままでいました。わたしは今あなたさまの来られましたのに深く心をうたれ、またあなたの美しいお姿に深く心を惹かれました。わたしはあなたにわたしを差上げます。ですから、わたしは来るべき十四日に、あなたのことについて父の許しを得るためにリシャバという大山に行きます。その日に、そこにある霊場に、シヴァ神を礼拝するためにヴィディヤーダラ族の長老たちが諸方から集まって来ます。父もそこへ参ります。わたしは父の許しを得ましたならば、直ちにここに帰って参ります。そのとき、わたしと結婚して下さい。さあ、どうぞお立ち下さい。」

と、チャンドラ・プラバーはシャクティ・デーヴァに言いまして、ヴィディヤーダラ族に相応わしい色々の贅沢品を贈りました。シャクティ・デーヴァがチャンドラ・プラバーの申出を承諾しまして、そこに安楽に逗留していますと、あたかも森林の火事の熱さに堪えかねた人が甘露の池に飛びこんで元気を恢復するかのようでありました。

そして、十四日になりますと、チャンドラ・プラバーがシャクティ・デーヴァに申しました。

「あなたのことについて父の許しを得ますために、わたしは今日参ります。ここにいます扈従の者たちもみなわたしと一緒に参ります。二日の間あなただけとなりますが、苦しいとお考えにならないで下さい。しかし、お一人でここにいられます間に、どんなことがありましても、中央

の露台に登ってはいけません。」

と言いまして、チャンドラ・プラバーは自分の心をこの若者の傍にのこして出発しましたが、また若者の心を伴として連れて行きました。こうして、一人となりましたシャクティ・デーヴァは宏壮華麗な大宮殿の諸方を歩き廻って、心を愉しませました。すると、「ヴィディヤーダラの娘は何故に宮殿の屋上に登ってはいけない、と禁止したのであろうか。」と、好奇心が生じて、宮殿の中央の露台に登りました。まこと、人間の心は一般に禁止されたことをしたいと思うものであります。シャクティ・デーヴァが露台に登ってみますと、秘密の幄舎が三つ見えました。その一つの入口が開いていましたので、彼はその幄舎の中に這入りました。中に這入りますと、綿布がかけられた華麗な宝玉の椅子の上に、布を被って何かが寝ているのが見られました。布をめくって見ますと、パローパカーリン王の美しい王女カナカ・レーカーが死んで横たわっているのでした。それを見まして、シャクティ・デーヴァは考えました。

「これはまた何という摩訶不思議なことだろうか。かの王女は覚めることのない睡りを睡っているのであろうか。それとも、奔放自在な迷妄なのであろうか。かの王女のために、自分は困難な旅をしてきた。その王女は今息絶えてここに居り、しかもあの故郷の土地で生きている。今見る容姿も、故郷で見たのに比べて、遜色ない。とすれば、これは創造主が何かの理由でわたしを惑わそうとしているのに相違ない。」

と考えました。その幄舎を出て、更に他の二つの幄舎に這入りますと、同じように二人の娘がその中にありました。シャクティ・デーヴァは驚いて宮殿を出て、腰を下ろして宮殿の下にある美しい池を見ていました。その岸辺に、宝玉の鞍を置いた一頭の駿馬が繋がれていましたので、シャクティ・デーヴァは好奇心をおこして、その傍に行きました。その馬には誰も乗っていませんでしたので、シャクティ・デーヴァがそれに跨がろうとしますと、馬は彼を後足で蹴飛ばして池の中に投げこみました。彼が水中に没したかと思った途端に、驚いたことに彼は忽ちに故郷のヴァルダマーナ城の遊園の池の真中に浮び上りました。彼は直ぐに自分が生れ故郷の池の中にいるのに気がつきましたが、チャンドラ・プラバーと離れた彼は、月光（チャンドラ・プラバー）のない夜に咲いているみじめな白い睡蓮と同じでありました。

「ヴァルダマーナ城はヴィディヤーダラ族の都城と比べて、何と異っていることだろう。嗚呼、これはまた何という不可思議な妖術のしわざであろうか。何者かに瞞された自分は、また何という不運な男であろうか。だが、このような場合に、誰が運命の本性を知り得ようか。」

などと考えながら、シャクティ・デーヴァは池の中から這い出して、狐に抓まれた感じを抱きながら父親の家に帰りました。「布告の太鼓に随いて歩き廻っていた。」と、偽りの口実を述べて、父に喜び迎えられましたシャクティ・デーヴァは、親族の者たちと酒宴を催しました。

次の日、家を出ましたシャクティ・デーヴァは、太鼓を鳴らしながら

「婆羅門にてあれ、刹帝利にてあれ、まこと黄金城を見た人は申し出られよ。王はその人に王女と太子の位とを授けられるであろう。」

と、そのときも尚、都城の中を布告し廻っているのを聞きました。シャクティ・デーヴァはそれを聞きますと、太鼓を鳴らしている人たちのところへ近づいて、再び

「その都をわたくしは見ました。」

と申し出ました。彼等は直ちにシャクティ・デーヴァを王の前に連れて行きました。王は彼を見まして、以前のように何か虚偽を申し立てるのに相違ない、と考えました。しかし、シャクティ・デーヴァが

「もしわたくしが虚偽を申しあげて、かの黄金城を見たのでなかったならば、今度は死刑に処して頂きます。何卒、王女さまが如何ようにもわたくしにお訊ねになって頂きます。」

と申しましたので、王は傍に侍坐する者に命ぜられて、王女カナカ・レーカーをそこへ連れて来させました。王女は以前に見たことのあるこの婆羅門を見まして、

「父上さま、この男はまた何か虚偽を申し立てるのでございましょう。」

と、王に言いました。シャクティ・デーヴァはこの言葉を聴きまして、申しました。

「王女さま、わたくしが真実を申し述べますか虚偽を申上げますか、わたくしが不思議に思うていますことを説明して下さい。わたくしは生命のなくなった貴女が黄金城で椅子の上に横たわっていられるのを見ましたが、今またここで生きていられる貴女を見るというのは、どうしたことでございますか。」

と、シャクティ・デーヴァが訊ねますと、証拠となる事実を聴きましたカナカ・レーカーは、父

の面前でこのように申しました。

「父上さま、この豪胆な方は確かに黄金城を見られました。そして、間もなくわたしがかの地に住むようになりましたとき、この方はわたしの夫になられる方です。この方はそこでわたしの三人の姉妹たちとも結婚せられ、かの都城に於いてヴィディヤーダラ族の王者として君臨されます。わたしは今日もとの姿にかえって、かの都に帰らねばなりません。と申しますのは、わたしは聖仙の呪詛のために、あなたのお家に生れてきましたのです。しかも、その聖仙が『そなたが人間の姿をしている間に、黄金城にそなたの身体が残されているのを一人の男が見て、その真相を暴露するであろう。そのとき、そなたにかけられた呪詛は解け、その男がそなたの夫となるであろう。』と、呪詛の終を指示せられていたからです。わたしは現在人間界にいますけれども、前生を思い出し、また神通力を得ました。ですから、わたしは天上の幸福を得るために、今ヴィディヤーダラ族の国に行きます。」

と言いまして、王女は姿を消してしまいました。王宮の中に混乱と泣き叫ぶ声が溢れました。

シャクティ・デーヴァは数々の苦難によって二人の娘を得ながらも遂に得ることの出来なかったこの二人の愛人のことを思いながら、また望みの達せられなかった自分をさげすみながら、意気銷沈して王宮を退出しましたが、その途端に考えました。

「『わたしの望みは遂げられる。』と、カナカ・レーカーは言った。悄気る必要がどうしてあろうか。成功は勇気に基づくのだ。前のときと同じ道を辿って、再び黄金城へ行くのだ。運命は必

ずや再びそこへ赴く手段をわたしに授けてくれるであろう。」

と考えまして、シャクティ・デーヴァは直ちに都城を出発しました。豪胆な人は一度決心したときには、目的を成就するまで決して退転しないからです。シャクティ・デーヴァは旅をつづけて、長い月日の後に、海岸にあるヴィタンカ・プラという都城に再び着きました。すると、嘗て一緒に海に乗り出して船の難破したあの商人に出会いました。

「あれはサムドラ・ダッタではないか。海中に墜ちたあの人が、どうして逃げ出して来たのであろうか。不思議なことではないか。とは言うものの、自分だってその例に洩れないではないか。」と考えながら、シャクティ・デーヴァが商人に近づきますと、サムドラ・ダッタも彼を認めて、歓喜して彼の頸に抱きつきました。サムドラ・ダッタはシャクティ・デーヴァを自分の家に連れ帰り、厚くもてなして、

「船が難破したとき、君はどうして海から逃げ出したのだ。」

と訊ねました。シャクティ・デーヴァは魚に呑まれて、まずウットスタラ島に行ったことを一部始終物語りました、そして、直ちに、この勝れた商人に

「あのとき君はどうして海から逃げ出したのか、話してくれ。」

と訊ねました。すると、かの商人は語りました。

「あのとき海に墜ちた自分は、木片に縋って三日の間漂うていた。すると、そこへ突然に一隻の船がやって来た。わたしが大声をあげて叫ぶと、その船に乗っている人々がわたしを見つけて、

船に引き上げてくれた。船に上ると、ずっと以前に外国に行って、丁度そのとき久し振りに帰国している自分の父をわたしは見た。父もまたわたしと知って、わたしの頸に抱きつき、涙を流しながら仔細を訊ねたので、わたしはこのように語った。『お父さん、あなたが長い間外国に行って帰って来られないので、わたしは商売が本職だと思ってはじめました。ところが、外国へ赴く途中に船が難破して海中に墜ちていましたのを、あなたがたが見つけて救って下さったのです。』と、わたしが話すと、父はわたしを咎めるように言った。『お前は何故そのような無鉄砲なことをするのだ。伜や、わたしは金持なのだよ。それに、わたしはお金を儲けるのに一生懸命だったのだ。御覧よ、お前のために黄金を満載したこの船を持って帰って来たのだよ。』と言って、父はわたしを慰め、その船でヴィタンカ・プラのわたしの家に連れ帰ってくれた。そういう訳で、わたしは今ここにいるのだ。」

と、商人サムドラ・ダッタから話を聴きまして、シャクティ・デーヴァはその夜は彼の家で憩み、翌日彼に言いました。

「船主よ、わたしは再びウットスタラ島に行かねばならぬ。だから、どうすれば今そこへ行くことが出来るか話して貰いたい。」

と言いますと、その商人は

「わたしのところの商人たちが今そこへ向けて出発しようとしている。その船に乗って、あなたは彼等と一緒に行きなさい。」

と言いましたので、シャクティ・デーヴァは商人たちと一緒にウットスタラ島に赴きました。その島に着きますと、

「この地には身内のヴィシュヌ・ダッタがいる。前のときと同様に、彼の家に宿らして貰おう。」と考えました婆羅門シャクティ・デーヴァは、市場の真中の道を通って行こうとしました。すると、偶然に、漁夫の王サティヤ・ヴラタの息子たちが彼の姿を遠くから見つけました。そして、はっきりとシャクティ・デーヴァと認めますと、

「婆羅門よ、あなたは父と一緒にあのとき黄金城を探しに出かけられました。それにも拘わらず、何故にあなたはひとりで今日ここに帰って来ていられるのですか。」

と申しました。そこで、シャクティ・デーヴァが

「あなたがたのお父上は、船が難破したとき、海底界の入口に墜ちこまれたのです。」

と言いますと、それを聴きました漁夫の王の息子たちは怒って、家来の者たちに言いました。

「この悪漢を縛れ。此奴はわれわれの父を殺したのだ。そうでなければ、二人の者が同船していて、一人が海底界の入口に墜ちこみ、一人が助かるなどということが、どうしておこり得ようか。だから、われわれの父を殺したこの男を、明日ドゥルガー女神の前に犠牲にしてそなえ、女神をお祀りしよう。」

と言いまして、漁夫の王の息子たちはシャクティ・デーヴァを縛り、ドゥルガー女神の怖ろしい神殿に連行しました。その内部は絶えず無数の生物を呑んだ腹のように拡がり、並んだ鈴は歯を

剝き出した死の神の口さながらでありました。

シャクティ・デーヴァは縛られたままそこに放って置かれましたが、自分の生命に絶望して、ドゥルガー女神に祈りました。

「女神さま、あなたさまは悪魔のルルの頸から迸る血潮を心ゆくばかり呑まれたかのように赤く輝く昇天の日輪にも似た化身の姿もて、世間を普く救済されました。されば、常時あなたさまを崇め奉るわたくしに何卒加護を垂れ給え。わたくしは愛する女に再び会わんものと遠路遥々ここまで参りましたのに、図らずも突然に敵の手中に陥りました。」

と、女神に祈念して少しまどろみますと、夢の中で神殿の内陣から一人の女性が出て来るのを見ました。神々しい姿のその女性はシャクティ・デーヴァに近づきまして、彼を憐れむかのように申しました。

「シャクティ・デーヴァよ、そなたは怖れるでない。そなたは害せられないであろう。かの漁夫の王の息子たちに、ビンドゥマティーという妹があるが、その娘が明朝そなたを見て、自分の夫にすると言うであろう。そなたはそれを聴きいれるがよい。そうすれば、彼女はそなたを自由にするであろう。彼女は漁夫の素姓の女ではなく、天上の女性で、呪詛のためにその境遇に墜ちているからである。」

という天上の声を聴きました途端に、シャクティ・デーヴァは眼を覚ましました。夜が明けますと、漁夫の王の娘がシャクティ・デーヴァのいる神殿に参詣しに来ました。王女は彼には甘露の

雨のように見えました。王女は彼の傍に来ますと、自分の名を告げて熱心に申しました。

「あなたをここから自由にしてあげます。ですから、わたしの望む通りにして下さい。わたしは兄たちの内諾を得ました求婚者たちを拒んできました。しかし、あなたを見て、わたしの心に愛情が萌してきました。ですから、わたしを娶って下さい。」

と、漁夫の王の娘ビンドゥマティーが申しましたので、シャクティ・デーヴァは夢を思い出し、喜んでその申出に同意しました。ビンドゥマティーが直ちに縄を解きましたので、シャクティ・デーヴァは美しい王女と結婚しました。そして、夢の中でドゥルガー女神から彼女の希望を適えるように命ぜられていました兄たちも、彼女の望みを直ちに許しました。シャクティ・デーヴァはこうして人間の姿をした天上の女性であるビンドゥマティーと幸福に暮しましたが、彼女はまこと幸福の成就を得るのと同じく、彼の前生に於ける徳行によってのみ得られたのでありました。

あるとき、シャクティ・デーヴァが露台にいましたとき、牛肉を担いでやって来るチャンダーラ種（賤民の一種）の男を見まして、愛する妻に申しました。

「ねえ、御覧よ、あの悪人はどうして三界の人々が尊敬する乳牛の肉を食べるのであろうか。」

と、シャクティ・デーヴァが言うのを聴きまして、そのときビンドゥマティーが夫に答えました。

「あなた、あのような悪業は到底考えられないことです。この点については、何とも言いようもありません。わたしはほんの小さな過失をしただけでしたけれども、乳牛の威力によって漁夫の家に生れました。ですから、あの男の罪を如何なるもので贖うことが出来ましょう。」

と、このようにビンドゥマティーが言いますと、彼女にシャクティ・デーヴァが言いました。

「それは不思議なことだ。ねえ、話してごらん。一体そなたは誰なのか。また、どうしてそなたは漁夫の家に生れたのか。」

と、シャクティ・デーヴァが執拗に訊ねますと、ビンドゥマティーが答えました。

「あなたがわたしの言う通りにして下さるならば、秘密のことですけれども、お話し申上げましょう。」

「よろしい。必ずそのようにしよう。」

と、シャクティ・デーヴァが誓いを立てますと、ビンドゥマティーはまず彼にして貰いたいことを述べました。

「あなたはこの島で間もなく別の妻を持つでしょう。そして、あなた、彼女は遠からず妊娠するでしょう。彼女が妊娠八ヵ月に達しましたならば、あなたは彼女の腹を剖いて胎児を取出さなければなりません。しかも、あなたはそれを嫌がってはなりません。」

と、ビンドゥマティーが言いましたので、シャクティ・デーヴァは驚いて、

「それはどういうことなのか。」

と、恐怖におののきながら言いますと、彼女は再び言葉をつづけました。

「ある理由であなたはわたしの言った通りにしなければなりません。では、わたしが誰であるか、またどうして漁夫の家に生れたかを聴いて下さい。わたしは嘗て前生に於いてはヴィディヤ

ーダラ族の女でありました。そして、今では呪詛のために人間界に墜ちています。わたしがヴィディヤーダラ族の女でいましたとき、乳牛の腱でつくった糸を歯で切り琵琶に結びつけました。そのために、わたしは漁夫の家に生れたのです。このように乳牛の乾いた腱に歯を触れただけでも、このように貶斥されるのであります。ですから、乳牛の肉を食べた場合などは言語道断の沙汰なのです。」

と、このようにビンドゥマティーが語っていましたとき、彼女の兄の一人が狼狽してやって来まして、シャクティ・デーヴァに

「さあ、大きな猪が何処からか現われ、多くの人々を殺しながら猛々しくこちらの方へやって来ています。」

と言いました。この言葉を聞きますと、シャクティ・デーヴァは宮殿の露台から下り、槍を手にし馬に乗って猪にむかって突進しました。この勇士は猪を見つけるや否や槍で突きました。すると、猪は傷を負うたまま逃げて、洞穴に逃げこみました。シャクティ・デーヴァがそれを追うてそこに這入りますと、その途端に彼は大きな遊園の叢林があってそこに家の建っているのを見ました。彼が茫然としてそこに立っていますと、殊のほかに美しい娘が何か思いわずらいながら彼の方に近づいてくるのが見えました。そのさまはあたかも彼に愛情を抱く森の女神が、彼を迎えに来たかのようでありました。シャクティ・デーヴァが

「美しい方よ、あなたはどなたですか。また、何を思い悩んでいられますか。」

と、彼女に訊ねますと、この言葉を聞きました美女は

「チャンダ・ヴィクラマという南方の土地の王がいます。わたしはその娘でビンドゥ・レーカーと申します。燃えさかる眼をした兇悪なダイティヤ（鬼霊の一種）が今日突然にわたしを瞞して、父の家から攫ってここに連れて来ました。生肉が食べたくなりました彼は、猪に姿を変じて外に出て行きましたが、まだ肉を食べないうちにどなたか勇士のために突き刺されました。突き刺されるや、彼はここに逃げこんだのですが、死んでしまいました。わたしはここへ連れて来られますと直ぐに逃げ出しまして、操を汚されずにすみました。」

と答えました。この言葉を聴きますと、シャクティ・デーヴァは彼女に

「もう御心配には及びません。王女よ、あの猪はわたしが槍で殺しましたから。」

と言いました。すると、王女が

「あなたはどなたですか、話して下さい。」

と申しましたので、彼は

「わたしはシャクティ・デーヴァという婆羅門です。」

と答えました。

「では、あなたはまことわたしの夫です。」

と、ビンドゥ・レーカーが申しましたので、勇士シャクティ・デーヴァはその言葉を承諾し、彼女を連れて洞窟から出て行きました。自宅に帰って、妻のビンドゥマティーにそのことを話し、彼

彼女の許しを得てシャクティ・デーヴァは王女ビンドゥ・レーカーと結婚しました。こうして、シャクティ・デーヴァが二人の妻と暮していました間に、ビンドゥ・レーカーが妊娠しました。八ヵ月になりますと、最初の妻ビンドゥマティーがシャクティ・デーヴァに言いました。

「勇気ある方よ、あなたがわたしに約束して下さったことを思い出して下さい。あなたの第二の妻は妊娠八ヵ月です。」

と、ビンドゥマティーから言われますと、シャクティ・デーヴァはビンドゥ・レーカーに対する愛情と可哀想に思う心とで心乱れましたが、また嘗ての約束に縛られていましただけに、暫くの間は返事することも出来ませんでした。彼は思い悩みながら部屋を出て、ビンドゥ・レーカーの許に行きました。

「あなた、あなたは今日何故ふさいでいられるのですか。判っています。わたしが妊っている胎児を取出すようにと、ビンドゥマティーに言いつけられたのでございましょう。あなたは是非それをしなければなりません。と申しますのは、それには少し訳があるからです。残酷なことは少しもありません。わたしが可哀想だとお考えにならないで下さい。あなた、この点について、デーヴァ・ダッタの物語を聴いて下さいませ。

〔博奕打デーヴァ・ダッタの物語〕

むかし、カムブカ*の町に、ハリ・ダッタという婆羅門がいました。この勝れた人にデーヴァ・ダッタという息子がありましたが、この息子は少年時代に学問を修めたのにも拘わらず、博奕にふける若者になりました。あるとき、博奕に負けて着物までも剝がれ、父の家に帰ることが出来なくなり、誰も住んでいないある神殿に這入りました。そこに這入ってみますと、数々の修行を積んで呪法を成就したジャーラ・パーダという大苦行者が、唯ひとり呪文を唱えていました。デーヴァ・ダッタが静かに近づいて苦行者に拝礼をしますと、苦行者は沈黙の行を捨てて歓迎の挨拶をしました。デーヴァ・ダッタが暫くそこにいますと、苦行者が彼の惨めになった訳を訊ねましたので、自分の不幸が博奕に凝って財宝を失ったためであることを物語りました。すると、その大苦行者がデーヴァ・ダッタに言いました。

「倅よ、この世に於ける如何に多くの財貨といえど、博奕打ちが満足することはない。そなたが不運から免れたいと望むなら、余の言葉に従うがよい。余はヴィディヤーダラたらんとして準備をしたが、吉相のある男よ、そなたは余を援けてそれを成就せしめよ。余の教示に従えば、そなたが不幸でなくなることは必定じゃ。」

と、苦行者から言われたデーヴァ・ダッタはそれを承知して約束し、苦行者の傍に坐りました。

翌日、大苦行者は夜になりますと焼屍場の片隅に行き、そこに生えている榕樹の下で供物を置き、「最上の食物*」をそなえ、四方角に供物の一部を捧げて祀り、傍に侍べる婆羅門デーヴァ・ダッタに言いました。

「そなたは毎日ここでこのように祀り、『ヴィドュット・プラバーよ、この供物を受けよ。』と、言うのだ。そうすれば、われわれが目的を達成することは必定じゃ。」

と、苦行者は彼に言いまして、その夜は自分の家に帰りました。デーヴァ・ダッタはその後毎日その樹の下に行って、教えられた通りに祀りました。ある日、祭祀が終りましたとき、突然にその樹が裂けて、天上の女性が彼の眼前に現われました。

「あなた、わたくしどもの御主人があなたさまに来て頂きたい、と申していられます。」

と、デーヴァ・ダッタに言いまして、彼を案内して樹の中に這入りました。彼が樹の中に這入りますと、そこには宝玉でつくられた宮殿があり、その中に一人の麗人が安楽椅子に倚っていました。デーヴァ・ダッタはその人を見ました途端に

「われわれの目的成就の化身だ。」

と考えました。その麗人は彼を鄭重に迎え、四肢につけた装飾品をあたかも彼を歓迎するためであるかのように鳴らせながら立上り、彼を自分の席に坐らせました。そして、彼に言いました。

「わたしはヤクシャ王ラトナ・ヴァルシャの娘で、ヴィドュット・プラバーと申します。大苦行者ジャーラ・パーダはわたしの恩寵を得ようとして、わたしを祀りました。わたしは彼の目的を成就させましょう。それに、あなたはわたしの生命の恩人です。ですから、わたしのあなたにささげる愛情がお判りになりましたら、わたしと結婚して下さいませ。」

と言われますと、デーヴァ・ダッタはその言葉に同意しまして彼女と結婚しました。暫く一緒に

暮していますと、彼女は妊娠しました。デーヴァ・ダッタは帰ろうと思い、大苦行者のところへ帰りまして、怖れおののきながら一部始終を語りました。すると、自身の目的の成就を望んでいる大苦行者がデーヴァ・ダッタに言いました。

「そなたは旨くやった。しかし、もう一度行って、そのヤクシャの女の腹を剖き、胎児を引き出して素早くそれを持って帰りなさい。」

と語りまして、以前に交わした約束を思い出させました。デーヴァ・ダッタは苦行者に送られまして、再び愛する妻のところへ帰りました。彼が約束に従って為さなければならないことを考えて心を悩ませていますと、ヤクシャの女性ヴィドュット・プラバーの方から申しました。

「あなた、あなたは何を思いわずらっていられるのですか。わたしの腹を剖くようにと、あなたがジャーラ・パーダから命ぜられましたことを、わたしは存じています。わたしの腹を剖いて、胎児を引き出して下さいませ。もしあなたが為さらないのでしたら、わたしが自分で致します。と申しますのは、そのことには何か目的があるからです。」

と、ヴィドュット・プラバーが言いましたけれども、かの婆羅門はそれを敢て行うことが出来ませんでした。すると、ヴィドュット・プラバーは自ら腹を剖いて胎児を取出し、それをデーヴァ・ダッタの前に投げ捨てて言いました。

「これを食べた人にヴィディヤーダラの身分が授与されます。さあ、受取って下さい。それに、わたしはヴィディヤーダラの女でしたのですが、呪詛によってヤクシャの身分に生れましたので

す。まこと、これがわたしにかけられた呪詛の終るときです。わたしは前生を思い出しました。今こそわたしは自分の本来の住処に帰ります。そして、わたしたちはそこで再会致しましょう。」

と言いまして、ヴィドユット・プラバーは何処かへ姿を消してしまいました。デーヴァ・ダッタはその胎児を取上げて、悄然と苦行者ジャーラ・パーダの許に行き、彼の祈願の成就を齎らすようにと、その胎児を彼に渡しました。善良な人々は苦境に際しても自我の欲するままに行動しないからです。大苦行者はバイラヴァ（シヴァ神の権化の一）を祀るためにデーヴァ・ダッタを森に行かせて、その胎児の肉を料理しました。そして、婆羅門デーヴァ・ダッタが祭祀を終えて帰ってみますと、苦行者は胎児の肉をのこらず食べてしまっていました。

「何故あなたはそれをのこらず食べてしまったのですか。」

と、デーヴァ・ダッタがつぶやいています間に、狡猾なジャーラ・パーダはヴィディヤーダラとなって、天に登って行きました。空のように青く光る剣を持ち、頸飾りや腕環を輝かせながらジャーラ・パーダが昇天しますと、デーヴァ・ダッタは考えました。

「何ということだ。あの心の悪い奴にわたしは瞞されたのだ。それとも、馬鹿正直ということは、誰にも不幸を将来しないのであろうか。どのようにしたならば、あの悪者に報復することが出来ようか。どうすればヴィディヤーダラとなったあの男のところへ行くことが出来るであろうか。ヴェーターラ（死屍に憑く鬼霊）を祀り宥慰するよりほかに手段はない。」

と、デーヴァ・ダッタは決心をしまして、夜間に墓場に行きました。彼は墓場に行きますと、人

間の屍に憑いているヴェーターラを樹の根元に招じて祀り、人肉を供えましたが、ヴェーターラはそれに満足しませんでした。しかし、それ以上に人肉を持って来ることが出来ませんでしたので、デーヴァ・ダッタはヴェーターラを満足させるために自分の肉を切り取ろうとしました。そのとき、ヴェーターラがこの豪胆な人に言いました。

「その勇気で満足じゃ。はやまるではない。お前がわたしにしてほしい望みというのは何だ。」

と、ヴェーターラが言いましたので、勇士は

「信頼した男を裏切ったジャーラ・パーダに誅伐を加えるのであるから、その男のいるヴィディヤーダラの住処にわたしを連れて行け。」

と答えました。ヴェーターラが承知しましたので、その肩に乗りますと、忽ちに天空を飛んでヴィディヤーダラ族の住処に連れて行ってくれました。すると、そこではジャーラ・パーダがヴィディヤーダラの王位をかちえて傲然と王宮に居住し、宝玉を鏤めた玉座に登って、ヴィディヤーダラとなったヴィドユット・プラバーが嫌がるのにも拘わらず、彼女を妻にしようと色々と口説いていました。若者デーヴァ・ダッタはそれを見るや否や、ヴェーターラの援助を得て、ジャーラ・パーダに飛びかかりました。それを見まして、ヴィドユット・プラバーの眼は、あたかもチャコーラ鳥*が甘露を湛えた月を眺めたときのように、歓喜に溢れました。ジャーラ・パーダはデーヴァ・ダッタが突然に這入ってきたのを見ますと、驚愕のあまりに剣を落し、玉座から床の上に倒れました。デーヴァ・ダッタはその剣を奪い取りましたが、ジャーラ・パーダを敢て殺そう

とはしませんでした。偉大な心の持主は怖れおののく敵に対して憐れみを抱くからです。ヴェーターラがジャーラ・パーダを殺そうとしますと、デーヴァ・ダッタはそれを遮ぎって言いました。

「われわれがこの惨めな異端者を殺したとて何になるか。だから、此奴を連れ帰り、地上にある此奴の家に置いて貰いたい。髑髏をかぶる悪い苦行者は矢張りそこにいるのがよい。」

と、デーヴァ・ダッタが言っていますと、ドゥルガー女神が天から降臨せられて、彼の前に姿を現わされました。平伏しましたデーヴァ・ダッタに、女神は

「吾子よ、今、余は他に比類のないそなたの豪胆な所業に満足したぞよ。されば、ここに、そなたにヴィディヤーダラの身分を授けようぞ。」

と、宣わせられました。女神はこのように仰せられますと、デーヴァ・ダッタに神通力（ヴィディヤー）を授けられて、忽ちに姿を消されました。神通力を失いましたジャーラ・パーダはヴェーターラに連れて行かれ、地上に置かれました。不法な者は永く栄えることはありません。デーヴァ・ダッタはヴィディヤーダラ族の覇王の位を得て、ヴィドュット・プラバーと一緒に幸福に暮しました。」

この物語を夫のシャクティ・デーヴァに語りますと、ビンドゥ・レーカーは更に言葉優しく夫に熱心に申しました。

「このようなことが必ずあります。ですから、何の御心配もなく、ビンドゥマティーの申しました通り、わたしの腹を剖いて胎児を取出して下さいませ。」

と、このようにビンドゥ・レーカーが言いましても、シャクティ・デーヴァは悪業を犯すことを怖れて、躊躇していました。すると、天から声が聞えてきました。

「おお、シャクティ・デーヴァよ、怖れることなくビンドゥ・レーカーの腹を剖け。胎児の頭を汝の手で攫むとき、それは剣となるべし。」

という天上の声を聞きますと、シャクティ・デーヴァはビンドゥ・レーカーの腹を剖いて素早く胎児を取出し、その頸を手で攫みました。彼がそれを攫むや否や、それは忽ちに彼の手に握られた剣となりました。それはあたかも勇気によって攫まれた繁栄の長髪さながらでありました。すると、この婆羅門は忽ちにヴィディヤーダラに生れ変りました。また、ビンドゥ・レーカーもそのとき姿が見えなくなりました。それを見ますと、シャクティ・デーヴァはもう一人の妻ビンドゥマティーの許に行き、すべてを話しました。すると、彼女が彼に申しました。

「あなた、わたしたちはヴィディヤーダラ族の王の娘の三人姉妹で、呪詛のために黄金城から追放されていました。呪詛の終ったときにあなたがヴァルダマーナ城で見られましたカナカ・レーカーはその一人で、今は自分の都城に帰っています。カナカ・レーカーにかけられた呪詛があのように不思議に終りましたと言いますのも運命の摂理であります。そして、わたしは三番目の娘で、わたしにかけられた呪詛も今終りました。愛しい方よ、わたしも今日こそわたしの生れた都城に帰らねばなりません。わたしたちのヴィディヤーダラとしての身体がそこにあります。それに、わたしたちの長姉チャンドラ・プラバーがそこに居ります。ですから、あなたも剣の神通

力の威光によって速かにそこへ行って下さいませ。あなたはそこで森林に隠棲していますわたしたちの父からわたしたち四人の姉妹やその他のものを受けられ、わたしたちを妻にされて、黄金城にて王者となられましょう。」

と、ビンドゥマティーが自身の秘密を語りますと、シャクティ・デーヴァはその言葉に同意し、彼女と一緒に天空を駆って黄金城に再び行きました。

シャクティ・デーヴァが黄金城に再び到着しますと、嘗て三つの幄舎の中の長椅子の上に死んで横たわっていました天上の美女が、いずれも蘇ってカナカ・レーカーなど三人の愛妻となって、彼の前に頭を下げていました。また、長姉チャンドラ・プラバーが祝禱を唱えて、久し振りに見る彼の姿を眼で呑みつくしていました。シャクティ・デーヴァが到着しますと、それぞれの仕事にいそしんでいました扈従の人々や後宮の侍女たちも喜び迎えました。宮殿の内宮に這入りますと、チャンドラ・プラバーが語りました。

「あなたがヴァルダマーナの都城で見られました王女カナカ・レーカーは、チャンドラ・レーカーという、この妹です。あなたがウットスタラ島で最初に結婚されました漁夫の王の王女ビンドゥマティーが、シャシ・レーカーという、この妹です。ダーナヴァに連れ去られて、ウットスタラ島であなたの妻となりましたビンドゥ・レーカーが、シャシ・プラバーというこの妹です。ですから、大望を成就せられた方よ、今、わたしたちと一緒に、わたしたちの父のところに参りましょう。そして、父の許しを得て、わたしたち四人と速かに結婚して下さいませ。」

と、チャンドラ・プラバーが素早く、そして大胆に、カーマ（恋の神）の命令を申し述べますと、シャクティ・デーヴァは四人の姫を連れて、彼女たちの父に会うために森林に赴きました。ヴィディヤーダラ族の王は前に跪ずきました四人の娘から一部始終を聴き、また天上の声に心を動かされて、シャクティ・デーヴァを喜び迎え、彼に四人の娘をすべて与えました。次いで、王は彼に黄金城に於ける富裕な王土を与え、またヴィディヤーダラ族のみの有する神通力（ヴィディヤー）をのこらず彼に授けました。また、王は目的を達成しました彼に自分の名を与えてシャクティ・ヴェーガと名乗らせましたので、シャクティ・デーヴァはその後この名でヴィディヤーダラ族の間に知られました。

かくして、シャクティ・ヴェーガは王となって、ヴィディヤーダラ族の世界の旗印である黄金城に、四人の妻とともに帰りました。そして、その都城に於いて、黄金で構築されて燦然と光り輝き、その輝くさまはその非常に高く聳えているがために、あたかも太陽の光線が凝結して降りそそぐかのような宮殿に住み、宝玉の橋の架けられた池のある園林の中で、眉目美わしい四人の妻とともに、この上ない幸福な生活を楽しみました。

訳　註

一『ブリハット・カター』因縁譚

七　ヴィディヤーダラ――「神通力（ヴィディヤー）を持つ（ダラ）者」の意。シヴァ神の扈従者の一。

八　クベーラ――財宝と富の神。北方を主宰する。

九　カウシャームビー――ヴァツァ国の首都。漢訳仏典に見える憍賞弥。

〃　ヴァラルチ――解題一六九頁を見よ。

〃　スプラティシュタ――ゴーダーヴァリー河の上流に沿うプラティシュターナの都城の名。プラティシュターナは前二世紀の頃から栄え、アンドラ王朝の都で、マハーラーシュトラ（現在のマーラッタ）地方の中心地。

〃　グナーディヤ――解題一七二頁を見よ。

〃　カイラーサ山――インド神話に名高い山。クベーラ神の住処、シヴァ神の楽園があるとせられる。ヒマーラヤ山中に在ると見做され、マーナサ湖の北にある最高峯とされる。

〃　カルパ樹――天上の楽園に繁茂するという五種の樹木の一。

〃　カーティヤーヤナ――解題一七一頁を見よ。

〃　ナンダ王――解題一六八頁を見よ。

〃　サーラ樹――学名 Vatica Robusta 欅の一種で、主要な木材用樹木。

一〇　ウッジャイニー――マーラヴァ（現在のマールワー）地方の都。西インドに於ける学芸と商業の要衝。

〃　プルシャ――インド思想史に於ける創造原理の一。既に『リグ・ヴェーダ』の末期に現われ、諸神がプルシャを犠牲の

祭獣として祭祀を行った結果、その各部分から万有が展開したと説かれる。辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』七七頁を見よ。

一三　プラティシャーキャー——ヴェーダの各学派（プラティシャーカー）に属する音声論の教科書。

〃　ヴェータサという都城——比定不詳。

一四　カールッティケーヤ神——戦争と盗賊の神。シヴァ神とパールヴァティーの子とせられるが、別の所伝（第一巻一六四頁を見よ）もある。

〃　パータリプトラ——現在パトナの近郊に遺跡があり、前五世紀の頃からマガダ国の首都であった。

一七　ヴェーダ——バラモン教の聖典。インド最古の文献。辻直四郎、前掲書　二五—三八頁に詳し。

〃　聖紐——四種姓の中、ブラーフマナ（司祭者階級）、クシャトリヤ（王族武士階級）およびヴァイシャ（庶民階級）の三種姓は、第四の種姓シュードラ（賤民奴隷階級）に対して、社会的に比較にならない高い位置を占め、ヴェーダを学習し、神聖な祭祀に関し、また再生族としての特権の象徴である聖紐を身に帯びた。即ち、入門式に儀式的に聖紐を授与せられたとき第二の誕生即ち再生があると考えられた。聖紐は三本あるいはそれ以上の糸の緩かな撚り紐で、ブラーフマナの聖紐は木綿糸製、クシャトリヤのは麻糸製、ヴァイシャのそれは毛糸製と諸法典に規定せられている。通常左肩から右腋下にかけられる。

〃　アンガ——元来は「四肢」の意。ヴェーダのアンガ（ヴェーダンガ）としては、シクシャー（音韻学書）、カルパ・スートラ（祭式規則の綱要書）、ヴィヤーカラナ（文法書）、ニルクタ（語源学書）、チャンダス（韻律書）およびジョーティス（天文学書）の六種がある。

一八　ビムバ——学名 Momordica Monadelpha 鮮紅色の瓢形の果実をつける。

二〇　パーニニ——解題一七〇頁を見よ。

〃　アインドラ派の文法——以前には、今日に存存しない『インドラの文法』というものがあって、パーニニよりも古く、その流を汲むアインドラ派が存在した、と主張されたが、今日では誤りであることが判った。（Winternitz, M. : Geschichte der indischen Literatur, Bd. 3, S. 398, n. 6）

二一　初更——更（プラハラ）とは時間の単位で、一日の八分の一。

二七　アヨーディヤー——現在のオード Oudh.「ラーマーヤナ」の主人公ラーマの都。

二九　首陀羅——四種姓の最下位、賤民奴隷階級。

三三　魚が笑った話——インドの説話に屢々現われ、古典では『シュカサプタティ』（鸚鵡七十物語）に見られ、近代に於いては諸地方の民間説話に種々の所伝が見られる。更に、外国の説話にも同じモティーフが見られ、イタリアの『ストラパローラ』、『ペンタメローネ』などにも同巧異曲の物語がある。詳しくは、田中於菟弥『印度さらさ』（昭和十八年生活社）一七九頁以下を見よ。

四四　輪廻——インドに於いては、最古の時代から、人間の生命が現世の一生に限られているとは考えていなかった。『リグ・ヴェーダ』には、死後の理想として、死者の王ヤマの楽土の楽しみと悦びとを説いて、善良な者は死後にかかる楽園に到達し得るものと信ぜられた。しかし、次第に地獄の観念が具体化され、善因善果・悪因悪果の思想が進展するに至った。ウパニシャッドの時代になると、現世を再生の舞台とする輪廻思想が確立した。即ち、死後現世に再生する径路を五個の供犠に託する「五火」説の神秘教義が展開し、この教説を知る者は不死を得るが、しからざる者は死後「祖道」を通って現世に再生する。地上に於ける形態は前生の業によって規定され、浄行者は婆羅門、王族あるいは庶民の階級に生れ、醜行者は犬、豚あるいは賤民の胎に宿るとせられた（『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』五・一〇・七）。

〃　チャーナキヤ——解題一六八—九頁を見よ。

四五　ダルバ草——クシャ草の別名。尖端の鋭い長い茎を持ち、祭祀に用いられた。

四六　チャンドラグプタ——解題一六八—九頁を見よ。

四七　バダリー聖処——バダリカーとも言い、ガンジス河の水源に近く、ナラ仙およびナーラーヤナ仙の隠棲処のある土地。

四八　サータヴァーハナ王——解題一七二頁を見よ。
四九　ガーンダルヴァ式の結婚——親の許諾を受けずに行う自由結婚。
五〇　サーマ・ヴェーダ——ヴェーダ聖典の一。歌詠を司る祭官（ウドガートリ）に属し、歌詞集、旋律集などから成る。
五一　ディーナーラ——金貨の単位。ラテン語デナリウス denarius に由来し、一、二世紀以後ローマの貨幣が多量にインドに流入したために、インドの金貨の単位として借用された。
五二　パナ——銅貨の単位。
五三　マーシャ——金貨の単位。
〃　ヴィタ——『カーマ・スートラ』第一篇第四章に「財産を蕩尽した土着の人で、美点を有し、結婚していて、遊女の間や社交界に気受けがよく、その後援を受けて生活をする者がヴィタである。」と記し、社交界に於ける道楽者で、幇間的存在である。
五四　手を乳牛の耳の形に組み、両手で管のようにして、サーマ・ヴェーダの一節をうたう——ヴェーダの祭祀に於いて、かかる特異な姿態をすることは伝えられていない。ただ『チャンドーギヤ・ウパニシャッド』一・一二には、バヒシュパヴァマーナ・ストートラ（朝のソーマ圧搾に於ける第一の歌詠）を行わんとする祭官が互いに前行する者の衣を執りながら忍び歩く旨を記し、婆羅門が犬の挙動を模倣したことが窺われる。
〃　半月——指を半月形にまげて、爪でひっ搔くこと。
五五　シャルヴァ・ヴァルマン——解題一七二頁を見よ。
五六　ティラカ——装飾のために額に描いた印。
〃　シリーシャ花——シリーシャ樹（アカシアの一種、学名 Acacia Sirissa）の花。
〃　連声——梵語の文法に於いて、文章の中に前後相連続する単語間におこる音韻変化ならびに単語の構成・変化に関しておこる音韻変化を総称して連声（サンディ）という。ここでは mā の語末母音 ā と udaka の語頭母音 u とが合して

〇となるのである。
六一　チャータカ鳥——学名 Cucculus melanoleucus 雨滴にて生命をつなぐといわれる。
六四　カータントラ——解題一七二頁を見よ。
〃　バーラドヴァージャ仙——聖仙の一人で『ヤジュル・ヴェーダ』に属するバーラドヴァージャ派の始祖。
六五　毎日食べても減らぬ米粒——原始仏教徒の説話集『ジャータカ』（本生譚）第七十八に、一つのパンではじめ五百人の弟子を満腹させ、さらに後にはある僧院の全員を満足させたにも拘わらず、なお残ったという物語が見られる。なお、このモティーフは『マタイ伝』一四・一五以下、『マルコ伝』六・三五以下および『ルカ伝』九・一三以下に、「パンの奇蹟」として見られる。
〃　プリンダ族——ヴィンディヤ山に住む蛮族の一。
六六　バフ・スヴァルナカ——比定不詳。

二　黄金城物語

七八　ヴァルダマーナ——現在のバルドワーン Bardwān.
〃　成人した娘をいつまでも親の許に留めておくべきではない——『マヌ法典』九・四「適齢に於いて、娘を嫁がしめざる父は非難せらる。」と記されている。インドでは適齢を大体十二歳とした。
八〇　娘を嫁がせないでいて、父はどうして罪障を消滅することが出来ようか——『ヤージュナヴァルキヤ法典』一・六四「保護者にして娘を嫁がしめざるとき、月経の廻り来るごとに、彼等は胎児殺しの罪を得る。」
〃　身内の者に頼るべき娘が自由に振舞うのは相応わしくない——『ヤージュナヴァルキヤ法典』一・八五「娘のときは父が、結婚せば夫が、老いたるときは子が、彼女を守るべし。これらの者なきときは、親族の者が彼女の世話をなす。彼女にとりて自由は何処にもなし。」『マヌ法典』五・一四八、九・三参照。

八〇　ヴリシャリー——元来はシュードラ種姓の女の意。
八三　ハラプラ——比定不詳。
八四　パウンドラヴァルダナ——現在のベンガール州の北部パブナ Pabna に比定される。
八五　ラトナ・プラ——比定不詳。
八六　クシャ草——前述のダルバ草と同じ。
八九　マドグ——樹木の幹を齧る野獣の一種。
九一　四住期——梵行期（師に就いて宗教的教育を受ける期間）。家住期（結婚して家長として社会的活躍をする時期）。林住期（社会人としての義務を果した者が後事を子に托して森林に隠棲する時期）および遁世期（煩悩を去って遊行し、托鉢によって生活し、ひたすらに解脱を希求して精進する時期）の四で、古代インド人の一生の生活を規定した制度。
〃　人生の三目的——ダルマ（法）、アルタ（財）およびカーマ（愛）である。ダルマとは宗教的義務の履行、アルタとは財産の獲得とその保持、そしてカーマは性慾の満足である。
九七　クスマ・プラ——「花の都」の義。パータリプトラの別名で、漢訳仏典では華氏城と訳されている。
一〇一　チャーマラ——柄の先に毛あるいは羽をつけた蠅払い。払子（ホッス）。豪奢な柄をつけて古来権威の印とした。
一〇三　カームピリヤ——カームピーラとも言い、パンチャーラ国の首都。
一〇四　ウットスタラ——比定不詳。
〃　ニシャーダ——猟師、漁夫、盗賊などで生活する野蛮種族。ビッラ Bhilla（現在のビール Bhils）族と同一とせらる。
〃　ヴィタンカ・プラ——比定不詳。
〃　クローシャ——距離の単位。一ヨージャナの四分の一または八分の一。地方によって異なる。詳しくは『科学史研究』第三十九号所載の拙稿『古代インドの尺度』を見よ。
一〇五　大魚に呑まれて生きたまま助けられた話——このモティーフはわれわれの『カター・サリット・サーガラ』にもなお数

度現われる。例えば、第百廿三章に於ける「二王女の物語」では、大魚が乗組もろとも船を呑み、また同章の「ケーシャタとカンダルパの物語」では、女が大魚の腹の中から救われる。インドの近代文学に於いてもこのモティーフは見られ、ヒンディー語の『プンデールカンディー』では、勇士アルハーは魚腹の中に拘禁せられたが、後に救い出された。また、カシュミールの物語に於いても、ある王が魚腹の中に数年に亙って住み、浜に打ち上げられたその魚を斧で切り刻んだ陶工によって救われた。このモティーフのインドに於ける流行は、三世紀に出たローマのソリヌスが「インドの海の鯨には四人の人間が遊べるほどの広間がある。」と述べているのと並べて興味深く、一・二世紀の頃以来東方貿易に従事した人々から聴いた話であろうが、丁度この頃われわれの『カター・サリット・サーガラ』の原本『ブリハット・カター』の作者グナーディヤも、かかる話を航海業者から聞いたと思われる。このモティーフはまた『旧約聖書』に於ける預言者ヨナに関して語られヨナは三日三夜の間魚腹の中にいた後に陸に吐き出されたという。因みに、ドイツ語では Jonasfisch（「ヨナの魚」の意）という語が用いられ、Hai「鮫」の同義語として用いられている。更に、このモティーフはイギリス中世の『ゲスタ・ロマーノールム』（ローマ武勲詩）の中にも知られる。その第三十二話に於いて、アムブルイの王女がローマ皇帝アンセルムの王子の許に嫁ぐために航行中、船が難破し、鯨に呑まれたが、王女は腹の中の諸処をナイフで切り、鯨はその本性に従って陸地に進み、遂にある貴族に助けられた。このモティーフが果して何処に発したかは不明であるがグンケルはヨナ伝説に関してフェニキアの航海者の所伝に源を発すると考えた（H. Gunkel: Kultur der Gegenwart, I. s. 56）。
一二五　プラジュナプティ呪法——プラジュナプティとは「予見」「予知」の意。来世を予見する神通力をいう。『カター・サリット・サーガラ』には数度述べられ、またヴィディヤーダラ族の持つ神通力として、この外にモーハニー「魅惑せしめる力」などが述べられている。
一二七　ガンダルヴァ——空界に住み、天上の医師あるいは楽士とせられ、種々の属性が賦与せられている。また、羅刹、ピシャーチャなどとともに悪魔ともせられる。

一二九　ラトナ・クータ――「宝玉の頂」の意。比定不詳。

一三〇　島に似た怪物――『千一夜物語』の「船乗りシンドバードの物語」には、その最初の航海に大魚を島と間違えて上陸した話を記している。ローマの作家の作品にもかかる島に似た怪物を記し、Pristis または Pistrix と言う。例えば、ヴェルギリウスは『アエネイス』三・四二七に Neptunus pistricum dominus「海の怪物の主なるネプテューン」と記し、またプリニウスの『博物誌』にも記されている。ミルトンは『失楽園』の中で「神はあらゆる創造物の中で大海に泳ぐ最も巨大な海の獣を創りたまいしが、ノールウェイの海上に睡るこの海獣を船頭は屢ゝ島かと思う」と記している。ノールウェイの海上にいるという巨大な海獣を、十六世紀のスウェーデンの史家オラウス・マグヌスはクラーケン Kraken と呼んでいる。

〃　業――輪廻(りんね)の思想に於いて、生々流転に際しての形態を規定する原動力として考えられた人間の所業。即ち、人間は欲望所成とせられ、欲望のままに意向をおこし、意向のままに行為するが、その行為によってその果報を受けねばならない。人は善業によって善人となり、悪業によって悪人となり、前生の業が現在の形を規定し、今生の業が未来の形を左右する。このように善悪果報の道徳的要求を基礎とする業(ごう)説は、輪廻の教義と結んで、人間行為の動かすべからざる鉄則となり、その後インドに於ける宗教思想の根柢となった。

一三二　大鳥に乗って所期の目的地に到達する話――このモティーフについては、解題一七七頁以下を見よ。なお、このモティーフは中世ドイツの楽人文学『エルンスト公』Herzog Ernst の中にも用いられている。

一四九　カムブカ――比定不詳。

〃　最上の食物――砂糖を入れて牛乳で炊いた米粥。オーダナという。

一五三　チャコーラ鳥――鷓鴣(しゃこ)の一種。月光を飲んで生命を保つといわれる。

解　題

一、『ブリハット・カター』因縁譚について

この物語はわれわれの『カター・サリット・サーガラ』の冒頭に物語られるところであるが、これと同じ物語はソーマ・デーヴァと同時代のカシュミールの詩人クシェーメーンドラ『ブリハット・カター・マンジャリー』(本書第一巻一九九頁参照)に見える。さらに十二世紀のカシュミール詩人ジャヤ・ラタ Jayaratha の『ハラ・チャリタ・チンターマニ』Haracarita-cintāmaṇi (シヴァ神所行讃)の第廿七にも見える (Brough, J.: Selections from Classical Sanskrit Literature London 1951, pp. 2―21. テキスト並びに英訳)。これらはすべて、インドの文学に特有な神話的な物語の中に、インド言語学史上に不朽の名を列ねるパーニニ Pāṇini、ヴァラルチ Vararuci あるいはシャルヴァ・ヴァルマン Sarvavarman のごとき学匠を登場させ、しかもこれらの人物を歴史上の事件に絡ませて渾然たる構成を見せているばかりでなく、『マハーバーラタ』および『ラーマーヤナ』と並べて第三の叙事詩といわれる『ブリハット・カター』の作者グナーディヤ Guṇāḍhya に関する所伝を伝えて、『ブリハット・カター』の因縁譚を興味深く述べている。従って、玆では歴史上の事件とそれに絡ませられる学匠とグナーディヤに関する所伝の三つに分けて、

この物語の素材を分析してみることにしよう。

玆に歴史上の事件というのはマウリヤ朝興起前のマガダ国の政情をいうのであって、物語の発展とともに述べられるナンダ王の死、贋ナンダ王の登極、チャーナキヤの登場とチャンドラグプタの即位という一連の事件は歴史に伝えられる事実を反映している。マガダ国は現在のビハール州南部を中心に前六世紀の後半に興り、シャイシュナーガ朝のビンビサーラ Bimbisāra (ca. 543—491 B. C.) およびその子アジャータシャトゥル Ajātaśatru (491—459 B. C.) の二代の治世の間にマガダ国は強大となった。当時は仏教の始祖釈迦の活躍時代で、この両王は仏教徒の所伝に於いて著名である。アジャータシャトゥル以後のマガダ国王については諸伝一致しないが、四世紀前半にナンダ Nanda 朝がマガダ国に君臨するに至ったと考えられる。プラーナ文献によれば、ナンダ朝は嚮のシャイシュナーガ朝の子孫であるが、マハーナンディン Mahānandin 王がシュードラ素姓の女に生ませたマハーパドマ Mahāpadma が王位についた後、王朝の呼称を変えたようである。しかし、ナンダ朝に関しては殆んど知られるところがなく、ダナ・ナンダ Dhana-nanda が四世紀後半に王位にあったとき、アレクサンドゥロス大王が北西インドに侵入した。ギリシア語およびラテン語資料によれば、その頃東インドにはクサンドラメース Xandramēs (あるいはアグラムメース Agrammēs とも伝えらる) という王が二万の騎兵、二十万の歩兵、二千輛の戦車および三千 (或は四千) 頭の象軍を擁していた。そして、この王は性質下劣で、理髪師の子であったが王妃の情夫となり、遂に王を弑して王位についたという。このクサンドラメースがインド資料のダナ・ナンダに比定せられる。チャンドラグプタ Candragupta はこのナンダ王に将軍として仕えていたが、元来ナンダ王統の血を受けていた。婆羅門チャーナキヤと共謀して王家の簒奪者たるダナ・ナンダを討って失敗し、北西インド方面に逃亡した。プルータルコスの『英雄伝』によれば、チャンドラグプタはその逃亡の間にアレクサンドゥロスに会見し、軍をガンジス河流域に入れることを進め、その地の王は無能であり不人気である故に征服は容易であると申立てたという。前三二五年にアレクサンドゥロス大王がインドを去った後、チャンドラグプタが如何にしてナンダを倒してマウリヤ朝の基を礎いたかは殆んど判らない。五世紀頃のヴィシャーカダッタの戯曲『ムドラーラークシャサ』(ラークシャサの印章指環)はその間の事情を僅かながらに伝えるが、そこに政略を縦横にふるうのがチャーナキヤである。チャーナキヤはその後チャンドラグプタの宰相として輔弼し、今日に伝わるカウティリヤの『アルタ・シャーストラ』(実利論)は、少くともその骨子は、彼の著作であるとせられる。

さて、われわれの物語に於いて、ヴァラルチは贋ナンダ王の宰相であったという。玆に贋ナンダ王というのは神通力によって死んだナンダ王の肉体に宿った婆羅門ということになっているが、これは物語としての構成上の問題である。従って、ヴァラルチはナンダ王家を簒奪した王者の宰相であったと解せられよう。この王者をナンダ王と呼ぶか、歴史に伝えられるダナ・ナンダに比定するかは問題でない。二世紀に出たアシュヴァ・ゴーシャ(馬鳴)の作とされる『大荘厳論』に婆羅留支が六偈を作って難陀王を讃えた旨が記され、ヴァラルチの名がナンダ王と結びつけられ

ている。その文面から見ると、婆羅留支は難陀王の輔相即ち大臣であったようであり、われわれの物語の所伝と一致すると考えられる。しかし、ヴァラルチの名はインド文学史の上に屢〻現われ、種々に記されているのであって、まず第一にヴァラルチはプラークリット語の文法書『プラークリタ・プラカーシャ』の著者とされる。この文法書は現存するプラークリット語文法書の最古のものであるが、この書に見られるプラークリット語形は二世紀のアシュヴァ・ゴーシャの作品に見られる語形よりも明らかに後代のものであり、従ってこの書の成立は早くとも三世紀とせられる。後世の著作をヴァラルチに帰したか、或は同名の学者がいたと解せられる。その他、チベットの史家ターラナータはヴァラルチをナーガールジュナ即ち仏教に於いて八宗の祖とせられる龍樹(二世紀ごろ)と同時代とし、またインドの文芸書はヴァラルチをヴィクラマーディティヤ即ちグプタ朝のチャンドラグプタ二世(ca. 375−414)の宮廷に仕えた「九宝」の一人とするが、いずれも他に拠るべき資料はない。前二世紀頃の文法学者パタンジャリは、その著書の中に「ヴァラルチの詩」という語を記しており、ヴァラルチが前二世紀よりも以前であることが窺われる。

次に、われわれの物語ではヴァラルチはパーニニと同時代とされ、また別名をカーティヤーヤナ Kātyāyana と言っていることが知られる。パーニニはインドが生んだ文法学の最高の権威であって、その著書『アシュタードヤーイー』は今日に伝わる古典サンスクリット語の最古の文法学書であるばかりでなく、古典サンスクリット語文法書の基本として今日に至るまで尊重せられている。しかし、その年代および経歴については殆んど知られず、僅かに母をダークシーと言い、

北西インドのシャラートゥラ(現在の Attock 近傍)に生れたということが知られている。寓話集『パンチャ・タントラ』の一詩頌によれば、パーニニは獅子に殺されたという。その年代についても歴史的に正確な史料は全くなく、学者の見解は大体に前四世紀の中葉としている。これは文献学的に一応無理なく考えられるというだけであって、パーニニの文法に対するカーティヤーヤナのヴァールッティカ(パーニニ文典の各〻の規則に対する原典批判的、解説的、補足的な釈義書)を註解して『マハーバーシャ』Mahābhāṣya を著わしたパタンジャリ Patañjali がほぼ前二世紀の人であるとされるからである。言語の上から見ても、パーニニの取扱った言語はブラーフマナあるいはウパニシャッドの言語に極めて近いのに反して、カーティヤーヤナとパタンジャリは本質的な点で既に古典サンスクリット文学の言語を予定している。カーティヤーヤナは彼以前にヴァールッティカを書いた文法家にも言及しており、少くともパーニニとカーティヤーヤナとの間には相当の時間的な隔りが認められることは確かである。従って、パタンジャリを前二世紀とし、パーニニを前四世紀とするのは研究上に支障のない一つの仮説に過ぎず、学者によってはパーニニを前八世紀とし、また前六世紀より後ではないともするのである。一般にパーニニを前四世紀とするのは実にわれわれの物語に基づくのであるが(M. Winternitz: Geschichte der indischen Litteratur, Bd. 3. S. 383, n. 2)これが歴史的に価値がないことは言うまでもない。

われわれの物語はヴァラルチがカーティヤーヤナという名でも知られたと記しているが、他にかかる所伝はない。インド文献学史上では、カーティヤーヤナは前述のようにパーニニ文典に対

するヴァールッティカの著者であり、また『ヤジュル・ヴェーダ』のヴァージャサネーイン派の『プラティシャーキヤ』(音韻論書)の作者としてカーティヤーヤナの名が伝えられている。パタンジャリはヴァールッティカの作者カーティヤーヤナを南インドの人 dākṣiṇātya と伝えている。なお、この物語に於いてヴァラルチの友人と記されるヴヤーディは、前述の『マハーバーシャ』の資料の一つとなった文法綱要書の著者として、インド言語学史にその名を残している (La Kāvyamīmāṃsā de Rājaśekhara, tr. par N. Stchoupak et L. Renou, Paris 1946, p. 162, n, 123)。

次に、グナーディヤに関する物語の中にシャルヴァ・ヴァルマン Śarvavarman の『カータントラ』Kātantra が述べられている。現在する『カータントラ』はパーニニ文典から独立することなしに新らしい文法体系を創り出そうとした文法書の中で最古のもので、研究者にパーニニ文典よりも易しい教科書を提供しようとしたものである。この文典が何時成立したか、従ってまたシャルヴァ・ヴァルマンが何時の人かは全然明らかでないが、学者の見解ではこの文法は大体西暦三〇〇年頃の時代に属するとされる。われわれの物語に於いてシャルヴァ・ヴァルマンが大臣として仕えたというサータヴァーハナ Sātavāhana 王の名は、ある特定の王者の名ではなく、前二世紀から後三世紀の前半に至るまでデカン高原およびインド西海岸に覇を唱えたアンドラ Andhra 王国の王家の名ないしは族名で、シャータヴァーハナ Śātavāhana とも記される。

次に、われわれはグナーディヤ Guṇāḍhya に関する所伝について検討を加えよう。六世紀に

『ブリハット・カター』Bṛhatkathī という物語集が存在し、その作者はグナーディヤと言い、『マハーバーラタ』の作者ヴィヤーサや『ラーマーヤナ』の作者ヴァールミーキと並び称せられたことは、七世紀以後に出た古典文学の作家のダンディンやバーナが記していることである。また、九世紀に属するカンボジヤの碑文には、グナーディヤは「プラークリット語の友」と記されている。これはグナーディヤが『ブリハット・カター』をパイシャーチー語で書いたという所伝に基づくのである。玆に於いて、われわれはグナーディヤに関する所伝と『ブリハット・カター』に用いられたという以外には知られていないパイシャーチー語とは如何なる言語かという問題とに当面するわけである。まず、グナーディヤに関する所伝について考えると、グナーディヤという作家のいたことは諸伝が錯綜しているとは言いながら疑うべくもない。しかし、種々の伝説がこの名に結びつけられてはいるものの、作者自身についてはわれわれは何も知らないのである。彼はプラティシュターナ Pratiṣṭhāna に生れたという。事実、プラティシュターナという都城がゴーダーヴァリー河の上流にあり、古くからその名は聞え、アンドラ王国の首都であった。その結果、グナーディヤはサータヴァーハナ王の大臣にせられたと考えられる。前述のように、サータヴァーハナはアンドラ王国の王家の名ないしは族名であるからである。従って、グナーディヤの年代は決定不可能である。本書第一巻の解題に於いて述べたように、グナーディヤの『ブリハット・カター』の原本は今日に伝わらず、カシュミールおよびネパールに伝わったサンスクリット改稿本があるのみであるが、今日に伝わるサンスクリット改稿本を見ると、海に関する綺

談が相当に多く含まれていることは注意すべき事実である。われわれの『カター・サリット・サーガラ』には本書に収めた「黄金城物語」をはじめ、商売の目的でスヴァルナ・ドヴィーパ（黄金島）に行く船に乗り、遂にその首都カラシャ・プラに到達したサムドラシューラの物語、カターハ・ドヴィーパの王女グナヴァティーが結婚のためにインドに赴く途中にスヴァルナ・ドヴィーパの近くで遭難した物語などがある。特に興味あるのは『カター・サリット・サーガラ』第五十六章に見える婆羅門チャンドラ・スヴァーミンの物語である。彼は森林の中で息子と娘を見失ない、両人の後を追うてジャラ・プラ（比定不詳）からナーリケーラ・ドヴィーパ（現在のニコバル群島）、カターハ・ドヴィーパ（マライ半島西海岸のケダー）カルプーラ・ドヴィーパ（「樟脳島」の義、スマトラ西海岸）、スヴァルナ・ドヴィーパ、シンハラ・ドヴィーパ（現在のセイロン島）と周航する。また、『ブリハット・カター』のネパール伝本には、商人の息子で驚くべきほど数多くの冒険を経験したサーヌダーサの物語が見られる。この事実は少くともグナーディヤが海の冒険物語を聞くことの出来た時代と土地に属することを意味するものであろう。

インド洋に於ける航海は西暦紀元前の頃に溯ると考えられる。一世紀の中葉に無名のギリシア人によって著わされた『エリュトゥラー海案内記』にはインドの西海岸、南インドの諸港市については輸出品および輸入品などを詳しく記し、また諸港市の名も詳しいが、それ以遠の地域の諸港市については記載が漠然としている。換言すれば、その知識はガンジス河口以遠には及ばなかった。それにも拘わらず、僅かにほぼ半世紀後のプトレマイオス（アレクサンドリアの地理学者）の『地理学』には

ガンジス以遠の地にある黄金国あるいは黄金半島について詳しく記載をのこしている。この事実はギリシア人の東方への進出がこの間に著しく発達したことを示すものである。しかも、プトレマイオスの記載を詳しく検討するとき、インド人がこの方面に活躍したことを伝えているのである（岩波書店発行『西洋古典学研究』（1）所載の拙稿『プトレマイオスの《地理学》に記される’labadiou について』参照）。しかし、中国の史料によれば、更に古く前二世紀の頃に、マライ半島南端からその西海岸を北上し恐らくはビルマの西岸のある港からベンガル湾を横断して黄支国（今日の Conjeever-am の古名 Kacci）に達し、更にセイロン島に達する航路の開けていたことが知られる。いずれにもせよ、グナーディヤが海の冒険に関する数々の物語を収録していることは、前述のようにインド洋の航海が栄えて後のことである。しかも、これらの海の冒険がいずれもスヴァルナ・ブーミ（黄金国）あるいはスヴァルナ・ドヴィーパ（黄金島）など古代インド人のエル・ドラードーに関して物語られていることが注意せられる。この黄金郷に関して伝えられるのは、インドの文献ではジャータカ（仏教走の本生譚）以後であり、ギリシア・ローマの資料では一世紀のポンポニウス・メラの『地方誌』および無名の航海業者の『エリュトゥラー海案内記』以後であって、プトレマイオスの記事が最も詳しい。従って、グナーディヤがこの時代以後であることは疑い得ないであろう。この時代はインドの西海岸地帯を中継地として東西貿易が栄え、アンドラ王国は莫大な利益を得た時代である。内地に於いてはプラティシュターナおよびタガラのごとき都市が発達し、西海岸に於いてはバルカッチャをはじめとしてシューラパーラカ、カリヤーナなどの諸港市が繁栄して、

市場は殷盛を極め、豪商が擡頭し、きらびやかな社交界が出現した。この社交界には高い教養と豊かな趣味とを具えた遊女がその研を競い、また豪奢な生活を誇示した。こうした豪奢な遊女の姿が『ブリハット・カター』に記されていたことが、その改稿本から辿られる。しかも、グナーディヤは三世紀より後ではなかったと考えられる。何となれば、本書第一巻二〇三―四頁に述べたように、バーサの書いた戯曲『夢に現われたヴァーサヴァダッター』および『ヤウガンダラーヤナの誓い』はいずれも『ウダヤナ王行状記』とそのテーマを同じくしているのであって、バーサは『ウダヤナ王行状記』にそのテーマを得たのであり、しかもこの物語は『ブリハット・カター』に収録されていたと考えられるからである。こうして、グナーディヤは諸般の記載から見て、恐らくは二世紀前後の頃に西インド方面に於いて『ブリハット・カター』を書いたであろうと推察される（S. Lévi: Ptolémée, le Niddesa et la Bṛhatkathā, Hanoi 1925. 参照）。

次に、グナーディヤが『ブリハット・カター』を書くのに用いたというパイシャーチー Paiśācī 語については、インドの諸学匠の記すところも一致せず、また近代の学者の見解も種々である。「ピシャーチャの言語」として悪魔の言語と見做す伝承とともに、パイシャーチー語に三種あるいは十一種ありとする所伝もある。十一種のパイシャーチー語があるという所伝によれば、そこに挙げられる十一種の方言は殆んどインド全土の諸方言を網羅している。十二世紀の前半頃にカナウジのゴーヴィンダ・チャンドラ王の外務大臣であったとされるラクシュミーダラは、パイシャーチーという名はその言葉が話されているピシャーチャ族の土地に由来するとし、かかる土

地としてパーンディヤ、ケーカヤ、バーフリーカ、サヒヤ、ネーパーラ、クンタラ、ガーンダーラなどの名を挙げているが、これらの中でパーンディヤ（南インド）とクンタラ（デカン高原東南部）とを除いた他はすべて北インドあるいは北西インドである。結局、ラクシュミーダラの記述も、その基づいた資料が判明しない以上、謎は依然として謎であるといわねばならぬ。近代のインド学に於いては、諸学者の見解はパイシャーチー語の起源を北西インドに置く説（Pischel, Grierson）と西インドに置く説（Konow, Lacôte）とがあるが、後者の見解が音韻論的にも穏当であり、またインドの伝承にも逆わないと考えられる（cf. Keith, A. A.: A History of Sanskrit Literature, p. 269）。

二、「黄金城物語」について

われわれの「黄金城物語」は「チャトゥル・ダーリカー」（四人妻）と名づける『カター・サリット・サーガラ』第五篇の物語である。前項に述べたように、この物語は「カター・サリット・サーガラ」に含まれた海の冒険に関する多くの物語の一つで、特にわれわれの興味を惹くのは主人公シャクティ・デーヴァがガルダ鳥につかまって窮地を脱し、しかも目的地に達するというモティーフである。このモティーフを聴くとき、われわれは直ちに『千一夜物語』の中の「船乗りシンドバードの物語」の第二話を思い浮べるであろう。バグダードの船乗りシンドバードは航海に出て、同船者と一緒に美しい島に上陸し眠りこんでいる間にひとりのこされてしまった。その

とき、彼はルックという大鳥の脚にわが身を縛りつけて島を脱出する。そして、非常に高い山々に四方を囲まれた広い深い谷間に運ばれた。その渓谷には夥しいダイアモンドがあり、それを取るために商人が投げこんだ羊の肉にしがみつき、肉を奪い去るルックによって谷底から脱出するのである。詳しくは、岩波文庫版『千一夜物語』(十)三七—四三頁、角川文庫版『千夜一夜物語』12 一三四—八頁を見よ。

さて、「船乗りシンドバードの物語」は中世に於けるアラビア海およびインド洋の航海とその冒険に素材を得ているのであって、従ってその中にはインドの風物なり地名が出て来るのであり、またインドの口碑伝説の類も種々の形で示されていることが知られる。今、シンドバードの前述の冒険に関連して述べれば、十三世紀の終にインドに立寄ったマルコ・ポーロはムトフィリ Mutfili 王国に関する記事の中にシンドバードの物語の金剛石の谷に於けるのと同じ方法による金剛石の採集について同じ所伝を記している。玆にムトフィリというのは現在のマドラス州グントゥール県にある小漁港モートゥパッリ Motupalli である。また、十五世紀にインド方面を旅行したニコロ・コンティはヴィジャヤナガルの北方十五日の行程の土地にあるアルベニガラス Albenigaras という山に関して同じ所伝を伝えている。これらはゴルコンダ地方および東海岸に近いカダパならびにカルヌール地方のダイアモンド鉱に関して述べられたことが知られている。アラビアの作家では、カズウィーニー Qazwīnī (1203—1283) が同じ所伝をセレンディブの山中にある月の谷に関して伝えており、ティーファーシ Tīfāshī (1253 死) は宝石に関する著書の中

でセレンディブの金剛石とジルコン鉱に関して同じ所伝を伝えている。玆にセレンディブ Serendīb というのは六世紀の初頭にインドに来たアレクサンドリアの商人コスマス Cosmas Indicopleustes の記す Sielediba と同じくセイロン島をさし、サンスクリット名シンハラ・ドヴィーパに由来するアラビア人の訛った名称である。セイロン島は古くから宝玉の産地として知られ、インドの文献ではカウティリヤの『アルタ・シャーストラ』、ギリシア文献では『エリュトゥラー海案内記』、法顕、玄奘および慧超の旅行記などに記され、アラビア人の資料ではジャジーラット・アル・ヤークート Jazīrat al Yāqūt (紅玉の島) として知られていた。従って、いずれにもせよ、シンドバードの冒険物語の作者がそのモティーフを、前述のごとき諸所伝の由来するインドの所伝ないしはその流を汲むアラビアのいずれかの所伝に依拠したことは明らかである。それと同時に、前述の諸所伝が嚮に述べた『ブリハット・カター』のネパール伝本に見られるサーヌダーサの物語に似ているのも不思議ではないのである。サーヌダーサは冒険家の一行に加わって「黄金国」に赴こうとする。一行は海を渡り、ある山の麓に上陸する。蔓につかまって山を登り、岸に垂れる竹の梢にぶら下って山中の河を渡る。両側が断崖となった尾根の小径のところに来ると、一行は火を焚く。煙は山中に住むキラータ族を誘い出し、山羊を売りに来る。一行は山羊を購い、それに乗った。足の確かな獣の山羊のみが尾根の小径を眩暈せずに通ることが出来るのである。一行が辛うじてそこを通過すると、一行の隊長は山羊の屠殺を命じ、その皮を裏返しにして被るように命ずる。大鳥が新鮮な肉塊を求めて飛来し、血と肉のついた山羊の皮を被る人

間を摑んで巣にさらってゆく。黄金のあるのはそこである。サーヌダーサをさらった鳥は獲物を争う他の鳥に襲われ、山羊の皮が裂けたので、サーヌダーサは繁茂した森林の中にある池に落ちた。翌日、彼は堤が黄金の砂の河を発見した（Lacôte, F.: Essai sur Guṇāḍhya et la Bṛhatkathā, Paris 1908. p. 175 ff.）。

これと同じモティーフはまたインドの他の物語にも見られる。本書第一巻に収めた「ウダヤナ王行状記」に於いて、妊娠して異常嗜欲を起した王妃ムリガーヴァティーが臙脂など赤色塗料の満ちた風呂で浴みをしていると、ガルダ鳥が生肉と誤って王妃を摑み去ることが述べられている。この物語の異本で『法句経註釈』の中に記される所伝では、王妃サマーヴァティーが妊娠したので、王が魔除けのために真赤なマントを王妃に着せる。王妃がそれを着て外出すると、その途端に大鳥が王妃を生肉と見誤って飛び下り、王妃をさらって空高く飛び去る、と記されている。その他、ガルダ鳥による空中旅行はインドの説話文学に屢〻見られるところである（例えば、本書第一巻に収められた挿話「婆羅門ローハジャンガの物語」はその一例である）。従って、大鳥によって空中を旅行し、所期の目的を達成するというモティーフはインドの説話文学に於いては大きな位置を占めていることが知られる。このモティーフの展開には、インドの説話文学に屢〻見られるように、神通力による空中飛翔という空想が大きく働き、現実に空を飛ぶ鳥にその夢を托したことが推察されるのであるが、しかも鳥の利用という点でインド人が果した大きな役割として文化史上に看過し得られないのは伝書鳩の利用である。伝書鳩は十字軍の際にヨーロッパに伝え

られたのであるが、これはアラビア人から学んだところである。アラビア人はこれをインド人から学んだのであって、伝書鳩の使用は既に前四、五世紀の頃の仏教経典に述べられている（Hirt, F. and W. W. Rockhill: Chau Ju-kua, p. 28; Mookerji, R.: A History of Indian Shipping. p. 73）。即ち、原始仏典の『ディーガ・ニカーヤ』に含まれる『ケーヴァッダ・スッタ』（堅固経）に見えるのが最初で、その後の文献にも見られる。例えば、『カターコーシャ』という物語集には、財貨を獲得するために五百艘の船を率いて航海に出たナーガダッタの船が難破したとき、彼は手紙を鸚鵡の足に結びつけて救助をスヴァルナ・ドヴィーパの王スンダラに請うて救助せられたという物語が見られる。伝書鳩はその後インド洋航行の船舶に用いられ、唐代にはセイロンおよびペルシアの船舶がこれを用いたことが『酉陽雑俎』などの漢籍から知られる（桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』八六―七頁）。玆に於いて、われわれはインド人が一面に於いては奔放自在な空想にふけりながらも、また他の一面に極めて現実的な着想に秀でていた事実を知るのであり、われわれの物語に於いても極めて非現実的な構想の中に常に現実的な教訓を織りこんでいるのと一体をなすものである。

さて、われわれの物語の主人公シャクティ・デーヴァはガルダ鳥の翼の中に身を潜ませて「黄金城」（カナカ・プリー）に到達する。この都城については他に所伝はない。しかし、同じく「黄金城」を意味する「カーンチャナ・プリー」あるいは「カーンチャナ・プラ」の名は、われわれの『カターサリット・サーガラ』の中に見える。いずれも空想的な都城であるが、なおその所

在の方角が東方であると考えていたことは主人公シャクティ・デーヴァがはじめに王女に偽って「黄金城」を見たと申述べる言葉から知られる。また、その都城が海を渡った遥かな絶遠の地と考えられていたことは、物語の推移とともに語られる彼の旅行の次第によって窺われる。これらのことから、われわれはこの物語の構想が地理上の事実に基づいていることを知るのである。何故なれば、既に古くからインド人にはエル・ドラードー（黄金郷）としてスヴァルナ・ブーミ（黄金国）およびスヴァルナ・ドヴィーパ（黄金島）の名が知られていたが、そのいずれもその方向が東南を指向しており、またいずれも海を渡って辛苦を重ねて行く土地であったからである。文献学的に見ると、スヴァルナ・ブーミの名がスヴァルナ・ドヴィーパよりも古い文献に見え、前二世紀の中葉以前に成立したという『マハージャナカ・ジャータカ』に見えるのが最も古いと考えられる。その後の数多くの文献にスヴァルナ・ブーミの名は見えるが、特に興味あるのは二、三世紀に成立したと考えられるパーリ語仏典『マハーニッデーサ』に見られる周航記の記事である。玆に挙げられる地名については数々の考証が必要であるが、大体に於いて次の航路をとっている。即ち、マライ半島の西海岸に比定せられるタッコーラ（プトレマイオスの『地理』に見られる商港タコーラ）あるいはヴェースンガ（同じくプトレマイオスのベーシュンガ）から南下してジャヴァに到り、更にタマリンガ（マライ半島東岸パハン地方）およびヴァンカ（現在のバンカ島）に寄港し、次いでエーラヴァッダナおよびスヴァンナ・クータという比定不詳の二地を通ってスヴァルナ・ブーミに達し、更にタンバパンニ即ちセイロン島に至るのである（Lévi, S.: Ptolemée, le Niddesa et la Bṛhatkathā, pp. 7—37）。次に、スヴァルナ・ドヴィーパについて

は、われわれの『カター・サリット・サーガラ』に種々記載されている。即ち、第百廿三章には、カターハ・ドヴィーパの王女グナヴァティーが結婚のためインドに赴く途中、スヴァルナ・ドヴィーパの近海にて遭難した物語を記し、この王女の母后はスヴァルナ・ドヴィーパの王チャンドラ・シェーカラの妹であったという。玆に記されるカターハ・ドヴィーパは現在のマライ半島西海岸のケダーに比定される。また、第五十四章には、商人サムドラ・シューラがスヴァルナ・ドヴィーパに向い、遂にその首都カラシャ・プラに到着した話を記す。このカラシャ・プラが『新唐書』あるいは『冊府元亀』などに見られる哥羅舎分に比定せられるとすれば、この地はインド・シナ半島の中央部にあったことになる。仏典『マンジューシュリー・ムーラカルパ』（文殊師利根本儀軌経）には、カラシャという土地がインド・シナ半島にあったことを記している。また、嚮に一七三頁に引用した婆羅門チャンドラ・スヴァーミンの航海の次第によれば、スヴァルナ・ドヴィーパは現在のスマトラ方面に求められるであろう。いずれにもせよ、古代のインド人が黄金郷として憧れたスヴァルナ・ブーミあるいはスヴァルナ・ドヴィーパが東南アジアの方面に指向されたことは事実である（ギリシアの資料およびアラビアの資料もこの方面に金島の所在を指摘し、後世に於けるジャヴァおよびスマトラの碑文はそれぞれの土地を黄金国と称している）。こうして、古代インド人のエル・ドラードーは一方では現実の地名として物語に収録され、また他方では憧憬の土地として神通力の所有者のみの赴き得る土地と構想せられたことが知られる。玆にも現実と空想との奔放自在な結合が見られるのであって、これこそインド人の構想力の一つの

偉大な特色ということが出来るであろう。

インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ(二)〔全4冊〕

1957年8月26日 第1刷発行 ©
1989年3月17日 第3刷発行

定価350円

訳 者 岩本 裕

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所 株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社 製本・田中製本

 Printed in Japan
ISBN 4-00-320662-2